

506
87

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



3.411

506-87

春のゆくへ

長田幹彦著

大正
11. 5. 6
内交

次

目

草

露のいのち

春のゆくへ

笛

.....二四一

.....一二七

.....一



春のゆくへ



薄絹でつくつたやうな柔かい櫻の花びらが吹く風もないのにほろほろと散り落ちる春の眞晝であつた。菊池子爵家のひろびろとした芝庭には、ほつかりした日射しが眞蒼な草葉のうへにかけろふを燃やして、池の面に浮いてゐる水禽の聲も、何處となく静かな春の午後らしい長閑さを響かせてゐた。廻縁になつた座敷は、どの間もどの間も外縁の硝子戸が開けひろけてあるので、なかに置いてある金屏風や、床の間の置物や、柴櫃の大机などが小さく手に取るやうに見えて、いづれも春の日永を屈托らしい、懶うけな様子をしてゐる。そしてさすがに手廣な邸宅だけに何處に家の人達がゐるのやら、此邊はたゞ森閑として何の物音も聞えない。

大立關から廣廊下を右へ入ると、そこは別棟になつた西洋風の應接室になつてゐるので

文士長谷川子爵夫人



芝庭の方からはこんもりした樹立と、今を盛りと咲き誇つた美しい薔薇の花園の向ふに毛織の窓帷を垂らした出床の出入口が見えてゐるばかりである。出床は温室のやうに硝子戸で圍つてあつて、そのなかには名も知れぬ眞紅な花が燃えるやうな色に咲き零れてゐる。ふと耳を澄ますと、應接室のなかには誰れか人がゐると見えて、かすかな笑ひ聲がひそひそと洩れ聞えて来る。そしてその笑ひ聲が時をふつりと途切れると誰れが弾くのか、手馴れたピアノの節調が忍ぶやうにひつそりと響いて来る。その妙なる調べは樹立の蔭から明るい芝庭の面へ流れて、水禽の戯れてゐる池の向岸へすうつと消えてゆく。暫らくすると、出床へ出る硝子戸が、すつと開いた。と、なかからは賑やかな笑聲が聞えて、それと同時に、三人の美しい令嬢が眞紅な花の咲き零れた出床へ現れて来た。いづれも年齢は十五ぐらゐで、お揃ひのお下けに結つて、春丈の高さを違へ、振り合ふ袖のゆかしい縫れを見ても、常から親しいお友達とはひと眼みてそれと合點されるのであつた。

「まあ、綺麗なお花だこと！ 静子さま、これ何んていふお花なの？」

なかでも一番春丈の高い令嬢は、さも吃驚したやうな眼を睨つて聞く。

静子といふのはこの子爵家の愛嬢で細面の眼の大きい愛くるしい顔をした令嬢だった。一番遅れて出て来たが、その聲を聞きつけると、その花の傍へ寄つて、

「このお花の名はそりや難かしいのよ。私、ちよつと思ひ出せないわ。なんでも去年お父様が佛蘭西の方から買いていらして、裏の花圃へ植ゑたら、今年はこのお花に殖えましたの。このお花は春はこんなに丈夫さうに咲いてるますけれど、これで秋になると葉も茎もすつかり枯れてしまつて、根だけしきや残らないんですつて。ちよつとさうは見えないわねえ。」

「さうだわねえ。こんなに綺麗に咲いてる處を見ると、秋になつても冬になつてもこの儘でるさうに見えますわねえ。」

もうひとりの令嬢は、さも花を可愛がるやうに、そつと肩を花びらの方へ持つて行きながらいふ。

「い、匂ひがするでせう。私、この花が一番好きなの。だから私ね、秋になつても冬にな

つても、毎日毎日かうして綺麗に咲いてるて呉れ、ばい、と思ふわ。」

静子はさう云ひながら房々した花を一莖づ、折つてすぐ傍に立つた令嬢達の頭髪へさしてやりながら、

「だりど、どうして花つていふものは一年中咲いてるないんでせうねえ。あんなに綺麗に咲いてる芝庭の櫻だつて、冬になると憎らしい枝ばかりになつてしまつて、ほんとに厭あねえ。」

「ほ、、、、そりや仕方がありませんわ。花にだつて生命があるつて、先生が仰しやつたぢやありませんか。生命のあるものは何んだつて皆死んでしまふんですわ。だけど花だけは今年散つても、又來年の春になると、同じやうに綺麗に咲くからい、わ。」

「だけど、生命のあるものが何故死んでせう。こんなに綺麗に咲いてる花が皆散つて枯れてしまふのかと思ふと、ほんとに可哀相ですわねえ。何故一年中いつまでもいつまでも咲いてるないんでせう。」

静子はちつと花をみつめながら獨語のやうに呟いた。

背丈の高い令嬢はさも可笑しきうに笑ひ出して、

「ほ、、、そりや何故だか判りやしないわ。静子さまも可笑しなことを仰有るわねえ。」
と、いひながら頭髪に挿された花をいちづつ見て、

「それよりもお庭へ出てテニスをいたしませうよ。こない、お天氣に家にはかりるちやつまらないわ。私今日はどうしてもあなたと房子さまを負かしていつかの勝を取つて上げるわ。」

「品子さまはいつもあんなことを仰しやつちや負けてばかりつしやるのねえ。ほ、、、ほ、今日はきつと勝つおつもり？」

房子と呼ばれた賢さうな眼を持つた令嬢は笑ひながらいふ、

「まあ、憎らしい。そんなことを仰しやると今日はもう勝たして上げないことよ。」

三人は顔を見合はせて啼々しく笑つた。

丁度そこへ先刻から云ひつけてあつたと見えて、年老つた乳母と、可愛い、小間使が紅鼻緒の新しい麻裏を持つて出て来た。

静子はそれと見ると、

「ねえ婆や。コートにネットを張つて、テニスをやる支度をして頂戴。今日は品子さまが勝を打つんだつて仰しやるから。」

「まあ、それは面白うございませうね。婆やお助勢に出ませうかしら。」
婆やは顔ちう皺だらけにしながらいふ。

「ほ、、、婆やはね、そりや可笑しいのよ。ラケットのことをランケット、ランケットつて云ふのよ。」

静子は可笑しきうに笑ひながらいつた。

「まあ、厭だ。そんな助勢が来ちや却つて困るわ。」
品子は無邪氣に眉を擡めて、

「だけど、ほんとに私と組になつて下さる人はなくつて？」

「又此間のやうにお父様に來て頂きませうよ。さうして勝つた方の組は御褒美を頂きませう。それがいいわ。」

静子は、さも好い思ひつきのやうに云ふ。

「まあ、嬉しい。ぢや小父様は私の組よ。私嬉しいわ。」

品子は踊り上つて喜びだした。

三人は出床から庭へ下りて、櫻の花のちらちらと散り迷ふ芝庭の上をまるで可愛い、蝶のやうに六つの袂を翻へしながら歩いて行つた。

廻縁の一番奥まつた角を曲ると、茶庭を前にした離座敷があつて、そこが静子の父子爵の書齋になつてゐた。静子は突如その窓際へ歩み寄つて、

「お父様。お父様。」

と、大きな聲で呼んだ。品子も房子も雪見燈籠の蔭にそつと隠れて、くすくす笑ひながら様子を探つてゐた。

書齋のなかからは咳拂ひが聞えて、

「何んだ？」

と、云ふ聲がする。

「お父様。あのね、房子さまや品子さまとテニスをして遊び度いでございますけど、人数がひとり足りませんの。お父様入つて下さらなくつて？」

静子は上の障子を見上げながら云ふ。

「ほう、又テニスのお相手か。」

と、云ふ聲が聞えると一緒に障子はすうつと開いて、そこからは紫檀の大机越しに子爵の笑ひ顔が見えた。

「お父様、御勉強を遊ばしてゐらつしやるのねえ。だけどい、でせう？」

静子は愛くるしい首を傾けながらせがむ。

「うむ、だがお父様は下手だからなあ。」

子爵は葉巻に火を點けながら云ふ。

「ようございますのよ。今日は品子様がどうしても勝を取らなかつて仰しやるから、お父様の力が弱くつて丁度い、のよ。」

静子は到頭子爵を誘ひだしてしまつた。

子爵は静子達と同じやうな麻裏を踏石の上へ出させて、柔らかな春の風に紫色の葉巻の煙を漂はせながらそのまゝ庭へ出て来た。子爵は朝靨の生へた殿い顔であつたが、それでも微笑打時には眼尻に小さな皺が集まつて、何處となく子供の心を引きつける優しい力を持つてゐた。品子も房子も子爵の姿を見ると、丁寧に挨拶をして、きやつきやと聲を立てて笑ひながら嬉しうにテニスコートの方へ駆けて行つた。

土蔵の横手にいた花園の裏には百坪近い空地があつて、そこにはテニスコートやらブラコンコやら、機械體操場やらがこしらへてあつた。

それ等は皆一昨年の冬病氣で亡つた静子の兄の繁雄のために作られたもので、今では亡き子爵の嗣子が在りし昔を偲ぶ徒らなよすがとなつてゐるのであつた。

テニスコートにはもうネットが張られて、婆やと小間使がラケットや球を入れた籠を抱へて待つてゐた。

そしてその傍には獵犬のキムとジョンがつくねんと腰を下ろしてゐるが、子爵や、静子がやつて来るのを見ると、突如すつくと飛んで来て、くんくん鼻を鳴らしながら煩くじや

れて廻つた。

「これ、キム、ジョン。そんなに巫山戯ちや可けません。ぢつとして見ておいで。私達がこれからテニスをして見せてあげるからね。」

静子は籠のなかからラケットを取つて、それで犬の頭をこつこつ叩きながら云つた。よく馴れた犬はその言葉を聞き分けたのか、やがてネットの傍へ行つて、大きな圖體をのそりと横にしなから、温かい春の日射しに美しい毛並を輝かせて、時々羨ましうに此方を眺めた。

静子と房子は一組になつてコートに立つた。品子は、子爵が組になつて呉れたので、嬉しうに喋きながら、きつと勝つといつて、強いことばかりいつてゐた。

ゲームはやがて始まつた。眞白な球はラケットの面で軽い音を立てながら彼方へ飛んだり此方へ飛んだりした。

何處から迷つて来たのか、藤色の蝶と、黄い胡蝶が花園の蔭から飛び出して来て、眩ろしくとぶ球や、令嬢達の袖のまはりへひらひらと絡はりついた。

嬉しうな笑ひ聲や、ゲームをとる聲は絶えず明るい日の光の中に流れて、うつすりと
 切ふ花園の周囲の空気は、その都度に笑ひさめくやうに見えた。

ゲームはどうしたものか五度のうち三度まで品子方の負けになつた。品子はもう躍起と
 なつて、

「ねえ、小父様。しつかり遊ばして下さいな。今度負たらもう私厭でございますわ。」
 と、いひながら、額に汗を滲ませて一心にラケットを振つた。

子爵は笑ひながら、

「さあ、今度こそしつかりしますぞ。さあ、静子、お父様の球を受けて見い。」

と、いつて、折柄直ぐ鼻先でバウンドするい、球を打ち返さうとしたが、どうしたはづみ
 か足に力が入りすぎて、後足がするりと後へすつたので、子爵は折角の球を受け損じた。
 球は空を切つたラケットの尖で、ぼすりと鳴りながら、そのまゝ、花園の方へころころと轉
 がつていつてしまつた。

静子も房子も聲をあけて笑つた。

「まづいお父様！」

静子はとうとうラケットを落としてお腹を抱へて笑ひ出した。

「は、は、は、こりや可かん。とても敵はんど。」

子爵も罪のない聲で笑つて、頻りにラケットを振つてみた。

その時、花園の蔭から短い袴をはいた立廻番の梅本が、銀色の盆に名刺らしい白い紙片
 をのせてつかつか此方へやつて来た。そして腰を屈めて子爵に何やらいつたが、それを聞
 くと子爵は急に眞面目な顔になつて、

「静子、お父様はお客さんだから、ちよつと向ふへ行つて来る。」

と、云つて、そのまゝ、ラケットを置いて、芝庭の方へ姿を隠してしまつた。

後に残つた三人は一緒に固まつて汗を拭きながら勝負の話で夢中になつてゐるが、子爵
 はいつまで経つても歸つて来なかつた。品子は到頭待ちくたびれて、

「つまらないわねえ。」

と、小聲で呟きながらラケットの尖でキムやジョンにからかひだした。

その時、静子はふと、生垣の向ふに見える隣りの邸宅のなかに、或る不思議な人の姿を見出して、思はずそつちへ眼を惹かれた。

柔かい芽をふいた根殻の蔭には隣りの庭の小高い築山が見えて、その斜面に生ひ繁つた櫻や椿や山吹の小咲い花蔭には、いつ來たのか十四五の令嬢が、しよんぼり踏んで、こつちへは美しい横顔だけ見せながら、頻りに白い指を動かしてゐるのである。よく見るとそれは散り落ちた花を縁にぬいて花鎖を編んでゐるので、薄紅や黄いろや真紅な花の鎖は友禊の着物の袂をすべつて、その長さは既に身の丈に餘つてゐるのである。

「婆や、あれはお隣りのお嬢さま？」

静子は婆やの力を顧みて聲をひそめながら聞いた。

婆やはその聲で、ふつとそつちへ眼をやつたが、大きくうなづいて、

「はい。あれが今度お隣りへ引越しておいで遊ばした松山様のお嬢様でございます。お温なしきうなお可愛らしいお嬢様ぢやございませんか。」

さういへばつい十日ばかり前に隣りの邸宅の主が變つたのは静子も薄々知つてゐるが、

日に二度づ、は必ずこの花園へ出てゐながら、静子は今日まで一度もその令嬢の姿を見たことがなかつた。静子は、うつとりそつちへ見入つてゐるが、それが先にも分つたのかして、その令嬢は、やがて繪のやうな静かな様子をしたし、ふつと此方へ振向いた。睫毛の長い寂しきうなその眼、きつと結んだ美しい唇はその瞬間に不思議な力で静子の心を魅してしまつたのであつた。

……末は浮世の仇波に、舞まれもまれて悲しい運命に泣かねばならぬ松崎家の春子と、行く春の短衣に若い生命を吹き散らされてゆく静子とは、これがほんとの初対面なのであつた。運命の女神はその二人を紹介はす爲めに態々こんな美しい春の白晝を選んだのであつた。

二

ひとたび隣邸の築山の美しい花蔭に春子の姿を垣間見た静子は、その翌日から不思議に

もその事がどうしても忘れられなかつた。まだ互に名さへ知り合はぬ間柄でありながら、静子には前の世からの縁が繋がつてゝもゐるやうに思はれて、一日も早く何うにかしてお友達になり度いとそればかりが心に念じられるのであつた。

静子はその翌日から夕方になると定つて花園の裏のテニスコートへ出た。キムやジョンをお伴に連れて花園のなかを歩き廻つたり、木戸を開けて茶園の方をさまよつたりした。そしてそれとなく築山に立つ人の影を求めてゐるが、併し静子の期待はいつもはづれて、どうしたものか隣の令嬢はその後ふつりとも姿を見せなかつた。築山の斜面にはいつも變らぬ紅い椿の花が美しく咲き零れてはゐるが、そこには入陽と、もに漸次と物蔭から湧き上つて来るほの暗い夕闇ばかりが心細けにかけろつてゐるのを見ると、静子は何とも知れずうすら悲しくなつて、長いことそのまま、そこへちつと立ちす盡してゐるやうなことさへあつた。

或日のことである。父子爵はお勤め——その時分彼は貴族院議員の二席を占めてゐるたので——の用で突然關西地方へ出向かれることになつたので、静子は母なる子爵夫人と、妻

やと、執事の黒川とこれだけで新橋の停車場まで送つて行くことになつた。春とはいひながら夜ふけにはまだ肌寒い風が吹きしきるので、静子は駱駝のシヨウルやマントに體を包んで、父子爵の膝に凭れながら馬車で停車場へ連れられて行つた。

停車場へ着くと、夜の急行は時節柄とてひどく込むので、明るい電燈の輝く待合室はもう旅立つ人と見送る人で一杯になつてゐた。父子爵はいつものやうに葉巻を燻らしながら大勢の人々に取巻かれて應揚に彼方此方へ挨拶をしてゐるが、その時、父の後に隠れてゐた静子は、ふとすぐ眞向の長椅子の處に思ひがけない人の姿をみつけた。思はず胸を躍らせた。大きなトランクや、籐籠を積んだ傍に、人に面を見られるのを厭ふやうにしよんぼり首垂れながら立つてゐるのは忘れもせぬ隣邸の松崎家の令嬢であつた。附人と云つても若い女中がたつたひとりゐるきりで、誰れが旅立つのかそこいらにはそれらしい人の姿も見えなかつた。

やがて發車を報らせる呼鈴が方々で消魂しく鳴り出した。静子は子爵と子爵夫人に兩方から手を執られて見送りの人々に取圍まれながらプラットフォームの方へ出て行つた。静

子は松崎家の令嬢のことが氣になつて、頻りに後の方を振りかへらうとしたけれども、後から後から押して来る人波に遮られて、何をすることも出来なかつた。

子爵は執事やその他の人々が前もつて座席を取つて置いて呉れた一等車の前へ來ると、一度車室へ入つて、又再びブラットフォームへ降りて來た。そして静子の肩へ手をかけながら見送りの誰彼と賑やかに笑ひさゝめいてゐたが、愈々發車の信號が出ると、

「ぢや静子、お父様はしばらく留守にしますぞ。そのかはり京都からい、お土産を持つて來るから、温なしく待つとらにや可かんよ。」

と、優しい別れを告げて、子爵夫人にも何事か云ひ残しながらそのまま、車室のなかへ入つてしまつた。何處かで鋭い呼子の聲がすると、吠るやうな汽笛の唸き聲がそれに答へて、長いながい急行列車はやがてすうつと動きたした。

「お父様御機嫌よう。」

静子はやつとそれだけ云つて漸次と遠ざかつてゆく父の姿を見送つたが、その時今までは人込みに遮られて見えなかつたすぐ傍の柱の蔭に、松崎家の令嬢がこれも矢張り子爵と

同じ車室に乗つた緞ら顔の肥つた老紳士と顔を見合はせながら別れを告げてゐる姿がちらりと眼に入つた。あゝ、きつとあの方もお父様を送りに被來つたんだな、と思ふと、静子はその刹那ほつと安心の息をつかすにはゐられなかつた。

改札口を出て、大立關の處で馬車を待つてゐると、そこへ松崎家の令嬢は女中を後に連れてひよつくり出て來た。二人は一間と距らぬ間近でふと顔を合はせた。二人は思はず顔を緞らめたが、いづれからともなく眼顔で丁寧に挨拶をしあつた。そして松崎家の令嬢も女中が車を呼びに行く間、そのまゝそこに立つて待つてゐた。

「そこにおいで遊ばすのが、お隣りのお嬢様で被居いますよ。」

と、こつそり囁いた。

それを聞きつけると子爵夫人は令嬢の姿を今更のやうにぢつと見てゐるが、

「ほんとにお可愛らしいことねえ。」

と、呟いて、何と思つたかそのまゝ、靜かにそつちへ歩を移して行つた。そして令嬢の傍へ

寄つて手を執らんばかりにしながら、

「あなたが松崎様のお嬢様で被居いますか。私はお隣りの菊池でございますが、……」

「宅の静子もひとりて寂しがつて居りますから、どうか少しお遊びに被來つて下さいましな。ねえ、静子。あなたもこれからお友達にして頂くのですよ。」

と、云つて静子が衆々から望んでゐることを何の苦もなく成し遂げて下すつた。

静子は餘りの嬉しさに舌が結ばれて、丁寧にお辭儀をしたゞけで顔を赧くしながら令嬢の姿をまじく見まもつてゐた。そして馬車で麹町の邸宅へ歸る途すがらも、これから先どんな風にして令嬢とお友達になつて行かうかとそればかりを心に描いてゐた。

その翌日の夕暮、丁度眞紅な入陽が高臺の彼方に沈む頃、静子はいつものやうにキムとジョンを連れて花のなかをさまよひ歩いてゐた。と、その時ふと隣邸の築山の蔭で、美しい歌聲がしてゐるのを聞きつけた。透き徹るやうなそのソプラノの内聲の美しさは何に譬へたらよからう、まだ春を知らぬ小禽がその小さな胸一杯に息を吸ひ入れて、縁に輝く

朝またきの野に、紫や紅や黄いろの花の夢を呼び醒まさうとしてゐるやうなその聲は絶えつ續きつ綿々として麗しい歌を唄つてゐるのである。

夕陽の郷國よ、思ひ出の

涙の色のなつかしや、

過ぎにし月日數ふれば

我が世はらけき夢路かな。……

静子は聲音を忍びながらこつそり生垣のそばへ寄つて行つた。その枝葉の隙間からそつと覗くと椿の花の咲き零れた築山の蔭に松崎の令嬢はたつたひとりて庭石のうへへ腰を下ろして、両手を胸のうへで組み合はせながら我を忘れて一心に歌ひつゞけてゐるのである。宵闇はほんのりとその體を引包んで、美しい顔だけがくつきりと黄昏の底に浮き出して見える。静子はその姿をみると何かなしに庭の池の面に咲く澤瀉の花を思ひ起さずにはゐられなかつた。眼盲ひたやうに眠つた暗い池水に浮ぶその花の姿はどんなに氣高く、淨

らかにみえたらう。ものいはぬ聖女をそのまゝの白い花を静子は年毎に懐かしまぬ譯にはいかなかつた。静子は澤潟の咲く夏を待つまでもなく、今年は更に美しい生ける花を自分のお友達のなかに見出したのであつた。

静子は歌のきれめを窺つて餘程聲をかけようかと思つたが、どうしてもそれほど大膽にはなれなかつた。宵闇にほのめく唄聲にうつとり心を奪はれてそのまゝ、いつまでもいつまでも身動きもせずに生垣の傍へ立ち盡くしてゐた。そして婆やが心配して捜しに來た頃にはもうそこらはすつかり夜の闇に包まれて、いつとも知らぬ間に唄聲もふつりと止んでゐた。

それから日は一日と經つにつれて松崎家の様子が漸次と分つて來た。なかでも婆やは裏の茶園でよく隣の車夫と出逢はす馬丁から聞いたと云つて、いろいろなことを知つてゐるのであつた。令嬢の名が春子と呼ばれることも、春子のお父様が有名な銀行家であることも、それから又春子にはお母様のないことも、静子はみんな婆やから聞かされて知つたのであつた。

それから四五日たつた或日曜は丁度静子が生れてから十五回目の誕生日に當つた。

お誕生日には毎年きまつてお友達やら親類の方々を招んで晩餐會をひらくのが菊池家の定例になつてゐたので、その日は十五六人のお客様がもうお午過には續々集まつて來た。仲の善い房子や子も無論招ばれて、そのお友達から贈られたさまざまの美しい贈物は應接室の卓子を華紋のやうに華やかに飾つた。顔形は毎年さして變らないので、静子には唯旅路にゐる父子爵の顔の見えないのがひどく寂しかつた。

日の高いうちは皆庭へ出てテニスをしたり、水禽の夢を驚かしたりしながら面白く遊んだが、それにも飽きてくると、園子といふ静子の従姉に當る令嬢の壽讀で皆は又應接室へ上つた。そしてピアノやヴァイオリンを合はせて、各自自分の好きな歌をうたふことになつた。

その時、静子はふと隣の春子のことを思ひ出して、今日こそふたりがお友達になるのに絶好の機會だと思つた。

で、早速子爵婦人のところへ行つてそれとなく願つてみると、お母様も大層喜んで、そ

れならば早くからお招びするのだつたと云つてすぐさま松崎家へ婆やお使ひに立てられた。

この幾日の間、夢寐にも忘れなかつた春子はやがて友禪の振袖をひるがへしながら婆やに連れられてつ、ましやかに接室へ入つて来た。漆のやうなお下髪には眞赤な薇薔の花一輪指して、少し賑らめた頬を恥かしげに背けた姿はいつにも増して愛らしく見えた。

静子は夢でもみてるやうな嬉しさを覺えずにはゐられなかつた。

ひとわたり紹介がすむと、皆は又ピアノの傍へ集まつて美しい歌をうたひはじめた。園子は音楽界で有名なマリア・グレイス夫人に就いて聲樂の稽古をやつてゐたので、いろいろ面白い歌をうたつては皆を羨ませた。

静子はどうにかして春子と話をしようと思つてゐたが、遂に我慢が出来なくなつて、その傍へ歩み寄つて、

「ねえ、松崎様。あなたも何かひとつおうたひ遊ばせな。」
と、やつとそれだけ云つた。

春子はそれを聞くと顔を赧らめて、

「まあ、私なんか……」

「い、え、そんなにお隠し遊ばしても駄目ですわ。私先達あの築山のところで歌つて被居るのを伺つたんですもの。そりあほんとに松崎様はい、お聲なのよ。」

静子は自分も顔を染めながら園子の方を向いていつた。園子はすぐさまピアノの前に坐つて、しなやかな指先でDの鍵盤を打ちながら春子を促がした。

春子は皆にすゝめられて到頭「思ひ出」の歌の一節をうたつた。初めのうちはさすがに恥かしがつて聲をふるはせてゐたが、やがて漸次と聲も姿勢も落着いて来て、をはりの一節へ来たときには誰れも彼れももうその美聲に魅せられて、咳拂ひひとつする者はなかつた。

歌ひ終ると園子は突如起ちあがつて、

「ほんとにい、お聲ですわねえ。」

と、つくづく感じ入つたやうにいつて、

「失禮ですけど、あなたは何處でお稽古を遊ばして、被居るんでございますの。」

と、訊いた。

「い、え、別にお稽古なんか致しては居りませんの。」

春子は静かに答へて、自分の聲の行方を追ふやうにうつとり虚空へ眼をさまよはせた。園子はその横顔をちつと瞻もつてゐたが、マドンナのやうな不思議な美しさを持つた眼が妙に嫉ましくさへ覺えられるのであつた。

楽しい晩餐の済む頃にはもう夜もそろそろ更けて來たので一人歸り二人歸りして、到頭あとには親類の大人連れだけが残つた。

静子はいつこのまにか春子連れ出して、出床の葉蔭に据ゑられた籐椅子の上へ竝んで腰をかけてゐた。春の夜はあるかなきかの薄霧にほんのり煙つて、折柄の月光が樹立の影や庭石の影をまるで水の底にでも沈んでゐるやうに蒼白く照らし出してゐる。しづ心なく散り落ちる櫻の花は芝庭の處々を雪のやうに埋めて、一鳥啼かず、木の葉さへ戦がぬ静かな夜氣の底から毒を吐くやうに芳烈な花の香がひそひそと湧き上つて來る。

静子も春子ももう先刻から一時間あまりも語り續けてゐたので、お互ひの心持ちもすつ

かり分つて、その時分にはもう打融けた幸福に酔つてゐた。その幸福はをとめ心に却つて甘い悲しみを誘ひ出して、春子は悲しうな聲でついこんなことを言ひ出してしまつた。

「でも、静子様はお父様もお母様も生きて被居るんですからほんとにお羨ましいわい。私母様がお亡くなりになつたのが何よりも悲しいんですの。」

「ほんとにねえ、お母様は御病氣だつたんですの？」

「え、もう私が五つ位の時から脊髄病とかでお寐みになつたきりで、到頭一昨年の秋お亡くなりになつてしまひましたの。母様さへ生きてゐて下さつたなら、私……。」

春子はそこまで云ふと涙に遮られてか、ふいに口を噤んでしまつた。

静子はさう云ふ春子が可哀相に思はれてならなかつた。よくお話に聞く親のない憐な孤兒のことなどがその時急に思ひ起されて、彼女は、

「ねえ、あなた。ほんとに私達はいつまでもいつまでも變らないお友達になつてゐませうねえ。」

と、云つて、心の底からそれを神に誓つたのであつた。そしてその誓ひが堅かつただけに

そのなごやかな春のひと夜を空の彼方で嘆く緑の星がやがては、二人の運命を語る悲しい謎にならなければならなかつたのであつた。

三

その春も過ぎて、世はいつのまにか緑に薫る初夏の頃となつた。お庭の櫻も花びらは地に埋んで、もう今では眞蒼な若葉が明るい日の光を受けて、きらきら輝いてゐる。芝草のうへへあがつて遊ぶ水禽の羽色もどうやら夏らしくひかつてきた。

菊池家では二箇月の豫定で旅に出てゐられた父子爵もやつと今朝歸つて來られる。京都奈良、伊勢、さうした諸國からのお土産は鞆に餘つて、殊にいろいろな古代の人形の數々は静子のお部屋の飾棚に溢れた。

「お父様。こんなに人形ばかり澤山買つて來つて、どう遊ばすの？」静子は久しぶりで父子爵の膝にまつはりながら嬉しさに訊ねた。

「は、。、。餘り數が多いんでびつくりしたと見えるな。これは玩弄具ではないのだ。みんなどれもこれも珍しい美術品で、彼地でわざわざ人に頼んで集めて買つたんぢや。お父様はこれからお前のために人形の博物館をたててやる。厭か？」父子爵の顔には子を思ふ親の眞身の愛情が表はれてゐた。

「お人形の博物館？まあ、嬉しい。静子は手を打つて喜んで、「ですけれどお父様。ここにゐるお内裏様のやうなのは、あの、春子様にかけてもい、でせう。春子様もそりやお人形がお好きなのよ。こんな綺麗なのを上げたらどんなにお喜びなさるでせう。」

「そりや上げて悪くはないが、しかし折角お父様がかうして買つて來たものだから、一つも散らさずに大切にしまつて置いてはどうだね？」

「でもね、お父様。春子様は私の親友なんですもの。それに春子様のお父様が旅行から歸つて被來つた時にも私、お土産を頂いたんですもの。静子は父の顔を下から見上げながら哀願するやうに云つた。星のやうなつぶらな双眸は父の心を動かさずにはゐなかつた。

父子爵はほ、笑みながら、

「親友か、は、は、。一體その春子さんといふのは何處のお嬢さんだね？今迄聞いたことのない名ぢやが。」

「まあ、お父様。春子様を御存知ないの？いやなお父様ですわねえ。」静子は父の膝を軽く打ちながら、

「春子様はね、お隣りの松崎様のお嬢様ぢやありませんか。お美しくつて、歌がお上手でそりやい、方なのよ。私、ほんとに好きになつてしまひましたのよ。」

「うむ、松崎さんのお嬢さんか。そりやい、お友達が出来たねえ。」父子爵はその静子の居間から土蔵の棟越しにみえる松崎家のお庭の樹立をちつと眺めやりながら、「さう云へばお父様も今度の旅行でその春子さんのお父様とお友達になつたよ。實は彼地へたつ時、同じ列車に乗り合はせたものだから京都まで御一緒に行つてねえ。京都へ泊つた時などは澤文でお隣り同志の座敷に泊りあはせたくらゐるもの。それまでにも始終あの方の名前は聞いとつたけど、お話しをしたのは今度が初めてだつた。あのお父様もい、方らしいねえ。」

「まあ、ぢやお父様もやつばしお友達におんなすつたのねえ。私、嬉しい。そんなら私

これから春子様とどんなにお仲好しになつてもいいでせう。」

さういふ途端に縁端に人影がみえて障子がすらりとあいたと思ふと、引なる子爵夫人が今外から歸つて来たばかりとみえて、脱いだコートやバッグを小間使に持たせて、模様をついた紋付のま、静子の居間へ入つてきた。

まゝ

「只今歸りまして御座います。」父子爵の前で丁寧に挨拶をすると、夫人はすぐに静子の方を向いて「まあ静子さん。あなたは又お父様に甘えてゐますね。お父様はお歸りになつた直ぐで、お忙がしくつて被居るから、お邪魔をしては可けませんよ。」

「まあ、え、さ。今お隣りの何んとか云つたな、さう、さう、春子さんの話を聞いたつたところだ。」子爵は髪を撫でながら笑つた。

「ほんとに、此頃静子はもう春子さんで夢中なんで御座いますよ。又あちらのお嬢さんはほんとに静かない、方だねえ。餘程氣が合ひましたものと見えまして、この頃はあんなに一時やかましく云つてゐた房子さんのことなんかまるで忘れてしまつたやうなんで御座います。さうして學校が違ふのが厭だから、來年になつたら是非春子さんに轉校して頂く

んだなんて、そんな無理なことまで申して居りますの。」
 「は、は、。子供はほんとに單純でい、なあ。一度氣が合ふとすぐに親友となつてしまふのだからねえ。殊に女の子はさうだ。嘘いつはりがなくてい、。」子爵は静子の肩へ手をかけながら立ち上つて、「静子、それではお父さんは書齋へ行つてお母さんと川事を済まして来るから、又あとで来るのだよ。そして夕飯の時には父京都や奈良のお話しをしてやらうね。」

子爵と夫人とが縁端づたひに出て行つてしまふと、静子は急につまらなさうな顔つきになつて、四邊に取散らされた土産の包みや、飾棚のうへの人形などをとみかうみしてゐたが、やがてさつき子爵と約束をした十二一重の人形をとり出して、大切さうに小脇に抱へながらついと立ち上つた。そしてさも嬉しげに縁端へ出て、その敷石の上に揃へてあつた庭草履を突懸けて、土藏の裏のテニスコートの方へいそいそ歩いて行つた。

お隣りとの地境にある生垣には静子の願ひによつてひとつきほど前から小さな柴折戸が設けられてゐて、二人の交情はそのひとつの門によつて一層親しみを増したのであつた。

静子は自分で柴折戸の門をぬいて、お隣りの庭へ入つていつた。そこから眞直にみえる角座敷の隣りが春子の居間になつてゐて、その前の小庭には石疊の上に大きな水盤が置いてある。昔はつき井戸の水をひいてそのなかからは玉の様な水が勢よく溢れてゐたが、今はもう蒼く濁つた雨水が朽ちか、つた枯葉を汚ならしく浮かしてゐるばかりであつた。静子はこつそり水盤の傍から竹縁になつた春子の居間の縁先へ忍び寄つた。そして小さな聲で、

「春子さま、春子さま。」と、二度ほどつゞけさまに呼んだ。

なかからは何の返事もない。

不思議に思つて、今度は角座敷を廻つて、裏の茶の間の方へ行かうとすると、その時、お庭の向ふの樹立の陰に春子がいつも着馴れた御所車の友禪の着物裾の方だけちよつぴりと見えたので、静子はやつと安心しながら築山の裏を廻つてそつちへ歩いていつた。

そばへ寄つてみると、そこは樹立のなかでもこんもりした小高い吾妻屋になつてゐて、丸木の榻の据ゑてある上には春子が袂で顔を掩ひながらしよんぼり腰をかけてゐる。春子

ひとりかと思ふと、そこから少し離れた早子のところには春子のお父様が妙に嚴かな顔をして胸のところへ腕を組んだまゝ、立つてゐられる。どうしたのか春子の袂の下からは齒をくひしばつて啜り泣く聲が聞えてきた。

静子にはッとして築山の太石の蔭へ立ち止まつた。立ち聞きなどしてはいけないとは思ひながらも、その場の様子が變なので悪い處へ來合はせたと思ひながら、聲音をたてるのを恐れて、そのまゝ、そこへ佇みながら様子を窺つてゐた。

向ふからはやがてお父様の重々しい聲が聞えて來た。

「春子。もう泣くんぢやない。お父様にはお前の心はよく分つとる。お前がさうして何もかも自分で罪を着て、辛抱してゐてくれるのはお父様にとつてはどんなに嬉しいか知れん。お父様は唯一日も早くお前が年頃になつて呉れるのを待つてゐるばかりぢや。お前さへ大きくなつて呉れ、ば、わしの家庭はいくらでも平和にやつていけるんぢや。なあ、春子。もうしばらくの辛抱だ。どうかお父様の身にもなつて我慢の出来る處までは我慢をしてくれ。」

「お父様。そんなに仰しやられると私、なんて申上げてい、か分りませんわ。ですけれど私、お母様のことを思ひ出すと、ほんとに悲しくつて、……春子は悲しさうにしゃくりあげながら云つてゐる。

「もうそれは云ふな。お前や私がいくら嘆いたつて死んだ人は歸つて來やあせん。」

二人は又深い無言に落ちてしまつた。

静子はその話を聞いてゐるうちになんだか自分までが悲しくなつてきて、思はず双眼を濕ませてしまつた。衆々から聞いてゐる事を思ひ集めてみると、今二人が語り合つてゐることがそれとなく静子にも分るのであつた。春子の今の母様は丁度亡き母様が病氣の最中にお手傳として召抱へられ、母様がお亡りになると、今度新しく奥様に引直された人だつた。然し餘り素性のよくない生れで、顔は美しかつたが、心はよくない人だと云ふ噂が聞えてゐた。殊にその母様は、どうしたものか春子には辛く當つた。人に愛せられこそすれ、憎むところなどは露ほどもない春子をこのうへもなく憎んだ。春子の涙はいつもそこから生れて來たのであつた。

静子はしばらくして又顔をあげてみた。もうその時には春子のお父様の姿はみえなくて春子だけがたつた一人で袂を顔から放して、涙ぐんだ眼を足もとに咲いた山躑躅の花のうへへさまよはせてゐた。

静子はつつと吾妻屋の方へ歩み寄つて、今来たやうな風をしながら、

「春子さま。昨日は。今日ね、お父様が旅行から歸つて被來つて、こんない、お土産を澤山頂いたのよ。中でもこのお人形が一番あなたのお氣に入りさうでしたから、差し上げようと思つて、持つて参りましたのよ。」

春子は静子の姿をみると吃驚して顔をあげたが、やがて嬉しさうに笑つて、

「まあ、綺麗なお人形さまですこと。ほんとに有難う。」と云つて、人形を手にとつて飽かず眺め入つてゐるが、その時静子はふと春子の頬のところには紅く腫れあがつた創傷のあるのを見出した。

「まあ、春子さま。頬つぺたをどう遊ばしたの。大きな創傷になつてゐるぢやありませんか。」

春子は痛さうに頬のところをちよつと觸つてみたが、「どうもしないのよ。」と、消え入るやうな聲で呟いて、顔をそむけながらほろほろと涙を零した。

静子はその様子をみると、又母様におぶたれになつたんだなと感づいたが、その先訊ねるのも却つて心ないわざだと思つて、そのまゝ、口をつぐんでしまつた。同情の涙は静子の眼にもいつかしら一杯に溢れてきた。

二人はそれからこつそり登音を忍ぶやうに庭先をまはつて、春子の居間へ上つた。そこは茶座敷風の薄暗い四疊半で、小机と琴が置いてあるきりではかにこれといふ裝飾もなかつた。油繪の額や人形の棚や、花籠などの一面に飾つてある静子の居間にくらべるとまるで日のあたらぬ國のやうな寂しさが間うちに漲つてゐた。

二人は持つて来た人形を床の間へ飾つて、そのまへで罪のない話に時を過ぎた。春子もだんだんと氣が紛れてか、時々嬉しさうに聲をたて、笑つたりした。

そこへ突然縁端を踏む荒々しい登音がして、

「春子ッ、春子ッ。」と嗚鳴る鋭い聲が聞えたかと思ふと、入口の紙襖ががらりと開いて、

そこからは丸髷に結つた色の蒼い険相な顔をした春子の母様が顔だけ出して、
 「春子ッ一寸お出でッ」と、嚇すやうにいつた。

春子は又どうされることかといふやうに憎えた眼つきをしてそつちを振顧つたが、やがて素直に立上つて出て行つた。と、やがて廊下のところで、

「春子ッ、お前は何かつていふとお父さんに云つけぐちをして、ほんとに憎らしい子だ。いつ母さんがお前をいぢめたい。さあ、いつ母さんがお前を虐待した。どうするか覚えておいで。」といふ母様の罵る聲が聞えて、つゞいて春子の啜り泣く聲と一緒に平手でびびりし何處かを打つ音がきこえて来た。

両親から叱られたことさへ殆んどない静子は呆氣にとられて、はらはらしながら起つたり坐つたりしてゐるが、やがて紙襖のところで突飛ばされたやうな音がしたかと思ふと、春子は轉け込むやうにばたばたと居間へ遁け込んで来て、いきなり静子の膝にとり縋つてわつと聲をあけて泣きだした。

「あ、静子さま、私もうこのまゝ死んで、早くほんとうの母様のところへ行き度い。」

春子は狂氣のやうに泣きつゞけながら亡き母様の名を呼びつゞけた。

静子は途方にくれて、唯春子の肩へ手をかけたまゝ、黙つて涙ぐんでゐた。

それから半時ばかりたつと、今度は家ぢうが俄かに騒々しくざわめいて来た。何事が起つたのかと思つて聞き耳を立て、ゐると、そこへ突然年の若いお近といふ女中がとび込んで来て、

「お嬢さま、春子様。た、大變で御座いますよ、あの只今、旦那様が卒倒遊ばしたんで御座いますよ。早く被來つて下さいまし。早く……」さう云ふ慌たしい聲は殆んど前後を轉倒してゐた。

春子は電氣にでも打たれたやうに顔をあげたが、きつと振るたその眼は氣狂のやうに光つて、顔色はみるみる眞蒼になつてきた。

いつぞや紅い花の咲きこぼれた出床で、静子が品子や房子を相手に短かい花の命を悲しんだことがあつたが、それよりも果敢ないものは人の身の行末であつた。昨日は生々と輝く瞳をうるませて笑ひさいめいてゐた人も、今日はもうふとしたことから冷たい死の手の囚はれとなつてしまふ。けに曉に置く露の身よと昔の人は云つたが、それがいつの世にも變らぬ人生の姿なのである。春子のお父様もつひにその數に洩れなかつた。

それ卒倒なすつた、お醫者よ、薬よと家ぢうのものが騒ぎたてた甲斐もなく、お父様はそれから二時間ばかりの後はもう思ひもかけぬ冷たい屍骸になつてゐられた。平常からお好きだつたお酒が崇つて、春子のごことでお母様と何やら争論ひをしてゐられる最中に、憤怒のあまりぐつとせきあけてものを云はうとなすつたのが原因で到頭腦卒中を起され、書齋のお机の前に仰向けに倒れたきりこの世の息を引取られたのであつた。春子のお部屋でおろおろしながら待つてゐた静子はその報らせを聞くと、はッとしてそのまゝ、睫毛の長い双眼に一杯涙をた、へながら裏の柴折戸から大急ぎで子爵家へ歸つて行つた。

その晩、静子は父子爵の膝に凭れて、人の世を暗くする死といふことのお話を聞きなが

らしきりに泣いた。一度死んだものはもう二度と再びこの世に歸つて來ないのかと思ふとその悲しさは何にも譬へられぬ程だつたが、併しお父様のお話しをよく聞いてゐるうちに人が死んでからさき行くと云ふ浄土の姿などがいつかしらぼんやり心に映つてきて、此世で汚れた罪さへ犯さなければいつでも永遠に變らぬその浄土へ行くことが出来るのだと合點がいくと、静子はやつと初めて自分でも安心することが出来たのであつた。そしてあの優しい春子のお父様が夕陽の沈む空の彼方の遠い遠い國へ行かれる様を夢のやうに空想しながら、その夜は寂しい夢を結んだのであつた。

お葬式はそれから一日置いて二日目の午後に執行はれた。さすが大家のこととして、行列を飾る生花や放鳥の美しさはそこらの邸宅町でも滅多に見られぬほどだつた。静子もその日はお午から學校を休んで行列が門前を通り過ぎる時には道端まで出て、婆やや執事の黒川に護られながら春子のお父様の柩を見送つた。そして白無垢を着て下髪にした春子がハシカチで頬を抑へながら泣いてゆく姿を馬車の窓硝子越しにちらりと見た時には、もう耐へきれなくなつて婆やの袂に縋りながらはふり落ちる涙に咽んだのであつた。

初七日もいつしか過ぎて常からひつそりしてゐた松崎家はまるで人住まぬ家のやうに涙に閉ざされてみえた。静子は毎日夕暮れになると裏のテニスコートへ出て長いこと姿をみぬ春子の様子をそれとなく氣遣かつてゐたが、樹立の蔭にみえる二階座敷には明るい燈の光が折々ゆらめいても、春子の咳聲ひとつそこからは聞えて來なかつた。涙に浸りながらぢつとたれこめてゐる春子の姿を思ひやると、静子は何んだか自分までがその悲しみの底へ引込まれてゆくやうだつた。

ある日のこと、静子はとうとう我慢が出来なくなつて、お母様のお許しを得て、そつと裏の柴折戸からお隣へ行つてみた。いつものやうに春子のお部屋の前縁先へ立つて訪ふと、なかからは、

「あら、静子さま。」と、しづかな聲が答へて、「おあがり遊ばせよ。」

絶えて久しい懐かしいその聲を聞いて、いそいそしながら上つてゆくと春子はその時機の前にしよんぼり坐つて、今まで泣いてゐるものとみえて眼を眞紅にしながらかつちを振顧つて寂しい笑顔をみせた。静子はその顔をひと眼みるともうびつくりしてしまつた。

たつた十日ばかりの間にかうまで變はるものと驚かれるばかりに春子の様子は變つてゐた。まるくふくよかだつた頬は肉瘦せて鼻筋も大人のやうに鋭く、そして美しい眼だけが大きく大きく輝いてゐた。

静子はいふべき言葉も口へ出なくなつて、

「ねえ、春子さま。私。毎日々々あなたのことばかり心配してゐましたわ。お體でも悪くはなさらなくつて？」と、やつとこれだけ呟いた。

「え、有難う。……別に……」と、いひかけたが、さうした静子の優しい言葉が胸にしみて、春子はまたほろほろと涙を流しながら傍を向いてしまつた。

二人はしばらくの間妙に押黙つて顔を伏せてゐたが、やがて春子は耐らなくなつたやうに兩袖で顔を掩ひながら、

「ねえ、静子さま。私、どうしてかうふしあはせなんでせう。ほんとお母様はお亡くなりになる、そのうへこんどは又お父様までがあんな思ひがけないことでお亡くなりになつてしまふんですもの、私ほんとにどうしたらいいかと思つて、それが悲しくつて悲しくつ

て仕様がないうですわ。こんな時に姉様か兄様でも被居つて下さればいい、んですけど、頼みにする方は一人もゐないし、これから先今のお母様の仰しやるとほりになつて暮らして行かなければならないのかと思ふと、私、ほんとにもうこのま、お父様のおあとを追ひかけて死んでしまひたいやうな気がしますわ。」

「ほんとにさうですわねえ。私もそれを考へるとお氣の毒で……」と、いひかけて静子も袂で頬を抑へながら思ひ遣りの深い心から到頭しくしく嘔りあけて泣いてしまつた。

二人はいひ度いこともいへずに唯泣くばかりでそのま、別れてしまはなければならなかつた。心にありあまる思ひをいはうとしても、まだ年端のゆかぬ身にはそれにふさはしい言葉をみつけ出すことが出来ないであつた。唯血をわけた姉妹のやうな心持ちで涙のきり泣くよりほかはなかつた。

静子が涙ながらに裏の柴折戸をくゞる頃にはもう日もとつぷりと暮れて、若菜の蒸すやうな匂ひと一緒にそこいらには暗い宵暗が一面にひろがつてゐた。花園の蔭まで来ると、小暗い中からムキとジョンがすうつと歩み出て来て、嬉しさうにいそいそしながら静子の

裾をくくん嗅いで廻つたが、やがてもと来た方へ駈けて歸りながらつゞけさまに二聲ほど高く吠えた。と、その途端に花園の彼方から思ひがけない父子爵の聲が、

「おい、静子か？ お前はまあ何處へ行つとつたんだ。」と叫んだが、その聲と一緒にお父様は薔薇の花蔭からついで出て来られて、

「あんまり歸りが遅いからお父様がお迎ひに来てやつたぞ。こんなに遅くまで戸外にゐるは體にさはる。さあ、早く家へお入んなさい。」

静子は何か御返事をしようと思つたが、胸が結ばれてゐて何ひとつ口へは出て来なかつた。黙つてお父様に肩を押されて、薔薇の花の息づまるやうな匂ひを分けながら明るい電燈の光の溢れ出た母家の方へ歸つて行つた。

お茶の間の十疊にはもう定紋つきの高脚のお膳が並べられて、お給仕をする婆やと小間使が間際へきちんと手を支へて待つてゐた。お母様と並んで座に就く時、お父様は初めて静子の眼に輝く涙をみつけられて、

「静子は泣いとるぢやないか。どうしたのだ？」

さう云はれると静子は今まで耐へてゐた悲しさが急に胸に込みあけて来て、思はず父子爵の傍へ身を投げ伏しながら、

「私、春子さまがお可哀相で、……」

と云つて又しくしく泣きはじめた。かうした明るい平和な家庭で、慈愛に充ちた父母に取圍まれながら楽しい晩餐をとることの出来る自分のことを思ふと今更のやうに春子の不運な身の上が悲しまれて、静子はその時どうしても泣かずにはゐられなかつたのであつた。

父子爵も子爵夫人も初めて人の世に存在する不幸といふものを知つた静子をば哀れに思はずにはゐられなかつたが、それと一緒に何と云つてその傷いた小さな心を慰めてい、かさすがに感はずにはゐられなかつた。神様はこの人の世に幸福と云ふものを與へられると一緒に、又心の穢い、罪の多い人間を試すためにさまざまな悲しみや不幸といふものを與へられるのだと云つて、父子爵はその譯を諄々と説いて聞かせた。春子さんが立派な人間になつてこの世に立つてゆくにはどうしてもその不幸を切りぬけて行かなければならぬ。神様はそれをさせるために、わざわざ春子さんをえらばれたのだ、父子爵は到頭そんなこ

とまで静子に云つて聞かせたのであつた。

そのことがあつてから丁度五日ばかりたつた或日のことである。

静子はその日もあんまり春子から音沙汰がないので又こつそり此方から訪ねて行つてみた。と、その日はどうしたものか、見も知らぬ男の人などがざわざわお廊下を行つたり來たりしてゐて何となく家ちうがざわつてゐるが、しばらくするとやつと春子は此間より一層變れた悲しげな顔をしながら入つて来て、いきなり静子の傍へ坐りながら、

「ねえ、静子さま。私大變なことになつてしまひましたわ。」と、云つたきりしばらくの間は口もきけないやうに涙を呑んでゐるが、やがて消え入るやうな聲になつて、

「私ね、折角かうして仲善くして頂いたんですけど、もうお別れしなけりやならなくなりましたの。明日私の家はお引越しをしますのよ。」

「えッ、お引越し？」静子はぎよツとして、「まあ、どうして？」

「どうしてだか知りませんが、私、今朝母様から聞きましたの。」

「まあ厭だわねえ。だけどそんな遠い處へいらつしやるんぢやないんでせう？」

「い、え、それがねえ、ほんとに遠い遠い處なの。」「何處？ どつちの方？」子爵家の令嬢として、風にも當てずに育てあげられた静子には自分の住んでゐる麹町の一區さへ方角がつかないので、俄かに不安な氣になりながら息をつめて訊いた。

春子は幾度か云ひそびれてゐたが、やつと思ひ切つたといふ風に、

「それがこの東京うちならい、んですけれど、實は横濱なんですの。母様のほんとお家があすこにあるとかで、私達はこれからそこへ行つて住まはなければならんださうですわ。私あなたにお別れしてあんな遠いところへ行くのは厭なんですけれど、私はもうお母様の仰しやるとほりにならなけりやならないんですの……今朝もどうかして東京にゐて下さいつてお願いしたんですけれど、母様は、そんなこと云ふなら、もうお前は家に置かないからこのまゝ、出ておいでつて仰しやるんですもの。私あんまりだと思つて……」

春子はそのまゝ、そこへ泣き伏してしまつた。

横濱といへば葉山の別荘へ行く時に通るあの町である。東京からはさして遠い處ではな

いと云つてもあそこまでは汽車に乗らなければ行かれぬ。ついお隣り同志で、朝に晩に懐かしい訪れをしあつてゐた二人にはその距離が幾百千里にも増して悲しかつた。一度別れたらもう二人は容易なことでは出逢ふことはあるまい。たとひ逢へるには逢へるとしてもそれはもう幾月、幾歳の後であるかもしれぬ。それを思ふと、静子の眼には熱い涙がとめどもなく湧いて來た。

春子はやつと顔をあげて、

「だけど、静子さま。もう私いくら泣いたつて駄目なんですわ。お引越しをすることはきまつて、今日もそのお支度で家ちうこんな大騒ぎをしてゐるんですもの。今更私かなんと云つたつて、どうせもうあなたにはお別れしなけりやならないんです。ですから今お別れしてもどうか後生ですから私のことはお忘れにならないでね。お近くにはゐなくつてもいつまでもあなたのお友達にして置いて下さらなけりや厭ですわ。ねえ、静子さま、きつとで御座いますよ。」

静子は涙ながらにうなづいて、首を垂れてしまつた。さう云はれてみると、静子は悲し

さが喉もとまで込み上げて来て、言葉もなにも出ないのであつた。

「横濱といへば遠いやうですけれど、私これからちきつと始終お眼にかゝれると思ひますわ。あなたもお休暇にはよく別荘へいらつしやるんですし、私もまた月に一度や二度は東京へ出て来られるだらうと思ひますの。ですからなにもそんなに大袈裟に云ふことはないんですわねえ。」

春子はさう云ひながらもしくしく聲をたて、泣いてゐた。静子にしても、逢へないやうなことは無論あるまいとは思ひながら、春子が邪慳な母様の膝下で、しかも親身なものと云つては唯のひとりもゐない見ず知らずの土地で、これから先どんなに悲しい、傷はしい月日を送ることであらうと思ふと、それが何よりも惘れであつた。どうかして別れ度くない、どうかして一緒にゐたい。しかしもうそれは世にも果敢ない仇な願ひなのであつた。何かしんななことを云つて慰めて上げ度いと思ひ惑つてゐるうちにそこへ母様がいきなり入つて来て、いつものやうにがみがみ嗚りまはしながら春子を茶の間の方へ連れて行つてしまつた。静子は詮すべもなく其儘すこすこ家へ歸らなければならなかつた。

その翌日、静子が學校から歸つて来ない前に松崎家はもうすつかり荷物を引拂つて移轉をしてしまつてゐた。もう一度逢つて篤とお別れをしようと思つてゐた静子はしんとしたお隣りの邸内をみると何とも云へない悲しい失望を覺えたのであつた。

春の夜の短かい戯れにも似た二人の逢遇は、かうした果敢ないことで又破られてしまつた。運命はこれからさきどんな悲しい道にこの二人を導いて行くことであらうか。

五

春子に別れた後の静子はまるで翼をもちがれた鳥のやうな思ひでその日その日を送らなければならなかつた。横濱と云へば近い處、電車で行けば一時間もかゝらない處なので今迄のやうに日々の逢瀬は叶はずとも一週間に一二度は逢ふことも出来るだらうと楽しみにしてゐたことは仇となつて、さて別れて見ると再び逢ふ日はなかなか来なかつた。繪はがきなどの取りやりも初めのうちこそ繁かつたが、それもだんだんと春子の方から遠のいて、

毎日毎日裏庭のテニスコートへ立つて、静子は涙ぐましいやうな寂しさに胸を包まれずにはゐられなかつた。あの時はかうであつた、あの時はあゝであつた、と遊び暮らした一つ一つの思ひ出を繰返すと、椿の花のしづかに散り落ちるお庭の築山や、じめじめしたやうな春子のお部屋が今みるやうに眼の前に浮んで来て、その春ならぬ青々とした草木のしげみが、丁度その小暗い木下闇のやうに静子の心を悲しませた。

別れてから一度も逢ふことのない間に、夏は漸う開けて、いつの間にか楽しい暑中休暇が来てしまつた。

七月の末になると菊池子爵家は例年のとほり留守番の執事ひとりを残して、一家擧つて暹子の別荘へ避暑することになつた。子供の時から年毎に楽しんでゐたその避暑も、その年は静子にとつて何となく面白くないやうにさへ思はれた。もし春子が一緒に来て呉れるのだつたら、どんなに嬉しいことであらう。そんな頼りにもならぬ事を思つて静子はしばしの旅に出る支度もつい怠りがちだつたのであつた。

愈々、東京をたつと云ふ日は、近い處ながら人数が多いのもう邸ぢうまるで大旅行で

もするやうな騒ぎだつた。書生も執事も馬丁も血眼になつて、荷づくりをした行李やら、トランクやらを擔ぎ出す、そしてやつと八時になつて皆揃つて新橋の停車場へ驅けつけることが出来た。

列車の車窓から見ると沿道はもう幾度となく見馴れた處ではあるが、久しく郊外の景色に親しまなかつた静子には常にもなく心持ちよく映つた。眞蒼に大地を包んだ稻の葉、そのうへにぎらきら輝く眞夏の日射し、そんなものを見てゐると静子は胸の中がせいせいして来るやうに思はれた。そして東海道筋の松並樹を越して紫色にひろがつた海のうへを眞帆片帆がまるで鷗のやうにすべつてゆく様を眺めた時には思はず手を拍つて喜んだ。

横濱へ近づくと、静子は何よりも眞先に春子のことを思ひ出した。白い横木をさした踏切や、線路に沿つて連つてゐる道路をみても、若しかひよつとしてそこいらを春子が歩いてゐるやしまいかなどと思はれて、一刻の間も車窓から眼を離すのが惜しかつた。そして列車が長い汽笛を吹き鳴らしながら横濱の停車場へ入つて行くと、静子はちつとしてゐられないやうな氣になつて、お母様が危いと云つてお止めなさるのも構はずに、窓の硝子戸を

カ一杯に落としてそつと廣いプラットフォームを眺めた。しかし乗り降りする旅客の渦巻くそこいらには、固より春子に似た人の姿さへ見出すことは出来ないものであつた。菊池家の別荘は返子の濱を西にゆきつくして、不動岬を鎌倉の方へ越えてゆく間道のすぐ傍にあつた。そこらは殆ど別荘村と云つてもいい、ほど、別荘が澤山建ちついでいて、西洋づくりの二階家や、瀟洒とした萱葺屋根などが磯吹く風のなかに明るく日の光を受け、小松原の間にちらちら見えてゐる。廣い芝庭をとりまはしたその別荘のひとつで静子は懈い幾日かの日を送つた。そして雨の日のつれづれなどには名所繪はがきなどを買つて來させて、横濱の春子の許へ日に二通も書き送つたりした。併し春子からはどうしたものかその後杳として返事が來なかつた。

もう八月へ入つてからの或日のことである。片瀬の別荘へ來てゐる房子からは是非遊びに來て呉れといふ案内があつたので、静子はお母様のお許しを得て婆やお伴につれて、その日の二番の汽車で片瀬の方へ出かけた。鎌倉で汽車を降りて、そこからは電車で極樂寺の切通しの方へ出たが、その日は土用らしい晴ればれとした日和だつたので、七里ヶ濱へ

來ると一點の雲影もない蒼空には富士をはじめ、箱根尼柄の連山が紫色に浮き上つて、眞蒼な波の彼方には水のうへに漂つてゐるやうな江之島の姿が繪にでも描いたやうに美しく見えてゐる。静子は車窓に片腕をもたせかけながらうつとりの景色に見惚れてゐた。

電車が立合川の停留場ちかくへ來懸ると、静子はふと線路端の砂山の下の處に或不思議な人影を見出して、はつと胸をとろろかした。それは白い前髪をかけて、小さな束髪に結つた十三四の少女で、両手で輕けに造られた美しい乳母車を押してゐる。その乳母車のなかに、桃色の幌の蔭に金髪の可愛らしい西洋人の赤兒が眠つてゐた。

電車が行過ぎやうとする時、少女は乳母車を押す手をやめて、ちらりと車窓の方を見上げた。とみると、その顔は忘れもしない松崎の春子に寸分違はぬ生寫しだつた。風姿こそ變つてをれ、確かに春子だと思ふと、静子は思はず車窓から顔をだして、

「春子さまッ。」

と、大きな聲で呼んだ。

向ふの少女もぎよつとしたやうに又顔をあげたが、その間に電車は砂山の角を曲つて遠

まじい勢で小山の裾を駆け過ぎながらふたりの間を懸け隔て、しまった。

「ねえ、婆や。今のは確かに春子さまだったわねえ。此處で電車を留めて貰つて、一寸降りてみませうよ。」静子は座席から立ち上りながらいつた。

「まあ、お嬢様。お危ぶなうございますよ。お静かに遊ばせ。今頃、こんな處に春子様がお出で遊ばす道理がないぢやございませんか。何かのお見違ひでござりますよ。」婆やは後から静子の肩を押へながら、まはりの乗客に氣を兼ねて、たしなめるやうに、こつそりいつた。

「い、え、確かに春子様だったわよ。私が春子様つてお呼び申した時に、こつちを御覽なすつて顔を赧くなすつたもの。」

「でも、まさか……」婆やはまだ半信半疑でゐた。

立合川の停留場へ着くと、静子は煩さく婆やにせがんで、到頭そこで電車を降りた。そして今来た道を砂原に照りかへす曇り日の光に惱まされながら前の砂山の方へ歩み返つていつた。

此處と見覚えのある砂山の陰までやつとの思ひで辿つて来たが、もうその時には春子らしい少女は何處へ行つてしまつたものか、そこらには影も形もみえなかつた。砂の上には乳母車のわたちの跡が薄く残つて、電車の線路のところまで来て、再び引返して行つた様子がそれとなく見えてゐるが、それからさきは荷車や馬車の車輪にかき亂されて、乳母車の行方は遂に當てさへつかなかつた。

静子は口には言ひつくせぬ失望を覚えながら、再びその次の電車に乗つてすぐ片瀬の方へ向つて行つた。そしてその日一日房子に連れられて江の島へ行つたり腰越の方へ行つたりしながら、引留められる儘に眞紅な夕陽が富士山の肩へ春く頃まで遊び暮らしたが房子とも久振りで逢つてゐながら、何となく氣が浮かなくて、不思議と春子らしい人の姿ばかりが胸にしみついて離れなかつた。

その歸途電車がまた立合川のほとりを通り過ぎるとき静子は車窓から顔を出して、もうそろそろ薄暗くなつてゆく砂山や松林や、砂濱に碎ける白い波を打眺めたが、そこらには涼しい磯松風がひそひそと吹いてゐるばかりで、晝みた春子らしい姿は幻にさへ浮ばな

かつた。とある西洋人の別荘の前を駛り過ぎる時、其家の窓からは明るい電燈の光が美しく流れ出して、轟々と響く電車の鐵輪の音の合間にそこから洩れてくる甘いピアノの音が、かすかに聞えて来た。静子はそれを聞くと譯もなく悲しくなつて、今はもう未知の境に隠されてしまつた春子の身の上を思ひ案じながら思はず涙くむでしまつたのであつた。

そのことがあつてから丁度三日目の朝、静子はふとある不思議な手紙を受取つた。差出人は誰れとも知れず、封筒の裏には唯七里ヶ濱よりと稚ない文字でしるしてあつた。封を切つてみると、なかからは洋野紙にペンで書いた一枚の手紙が出て来た。

静子さま。あなたとおわかれ申してからもう四つきあまりになります。あなたはきつと私のことをおぼえてゐて下さるだらうと思ひます。あれからも度々お手紙をいただいたりいたしましたけれど、あたくしの方からは御返事をさしあけることが出来ませんでした。あたくしはあなたにおわかれしてからすぐ母上様のおさともゐられなくなつて、今ではほんとにほんとにおはづかしい身のうへになつてしまひました。せんじつ七里ヶ濱で御めもじ致しました時にはもうどうしようかと存じましたわ。なにをおかしく致し

ませう。あたくしは今横濱で宣教師をしてゐる英國人のうちへまるつてをりますの、どういふわけでそんなところへやられたかは申しあげますまい。私はもうこれからさきあなたにお目にかゝれまいと存じます。どうかあたくしをかわいさうとおぼしめしてくださいませ。さうしてあたくしが立派なものになつたときにはまた「の春子」と思つておつきあひ下さいませ。それまではどんなことがあつてもお目にかゝれません。どうかおからだをお大事に。御機嫌ようお暮らし遊ばしませ。さよなら。

いやしき

はる子より

おなつかしき

静子様

その手紙を読んだ静子の心のなかはどんなであつたらう。静子はすぐさまその手紙を持つてお父様のお居間へとんで行つた。そしてお父様のお膝へすがりながら、

「お父様、春子様がお可哀さうですわ。どうか遊ばして下さいませ。」と、言つて泣きくづれた。

しかしお父様もさうなり果てた松崎家の春子を今が今どうすると云ふ譯にもいかなかつた。よく事情を聞ききたゞしたうへで何とかしてやらうと仰しやつて、静子にも承知がいくやうに慰めて下さつた。

それから幾日かの後、静子はお父様に連れられて三橋に来てゐる伯父様をお訪ねしたがその歸るさ、又鎌倉の停車場でふと春子の姿をみかけた。丁度向ふ側のブラットフォームへ来て停車してゐた列車の二等室に、彼女は横濱へ歸ると見えて春の高いたがつた顔つきをした西洋人夫婦につれられて、しよんぼり此方の車窓を眺めてゐた。静子が慌て、聲をかけようとした時にはもうふたつの列車は汽笛の聲と一緒に右と左へ別れて、眞白な煙だけはその間を足早に流れていつた。

六

九月に入ると静子はまた學校がはじまるので、名残りの惜しい暹子の濱邊に思ひをのこ

してふた、び東京の邸宅へ歸つて來た。彗星のやうに、ふと姿を現はしたかと思ふと、すぐに又何處へともなく消え去つてしまつた松崎家の春子のゆくへは始終氣には懸つてゐたが、その後も唯横濱のさる宣教師の許と云ふだけで、詳しいことは少しも分らず、それに先頃の消息でも、當分はとも逢へさうな見込みもないので静子ももうその頃はさすがに二人の仲を幸薄い縁と思ひあきらめるよりほかはなかつたのであつた。

燃えつくやうな烈々とした日射しは日に日に衰へて庭の樹立で鳴きしきる蟬の聲々も漸ううら寂しく、吹く風の底には何處となく秋の色がほのめいて來た。晩になると殊更月が美しく輝いて、芝草に置く露の色を見ても何となくうすら悲しい思ひに引入られるやうな時節になつて來た。

或晩のこと、その日は學校で記念祭が行はれたので、静子も常になく浮き立つて、夕暮れに學校から歸つて來るとすぐさま父子爵のお居間へ入つて、晚餐をたべる間も惜しみをしり學校の講堂であつた假裝舞踏や、活人畫などのお話で夢中になつてゐた。静子等の好きな先生達の噂、房子や品子がやつた英語の朗讀、話はそれからそれへと枝をさして、い

つ盡きるとも覺えなかつた。

そこへ突然婆やが慌たしく入つて来て、

「御免遊ばせ。お嬢様、あのお珍らしいお方がおみえになりましたんで御座いますよ。どちらへお通し申し上げませう。」さういふ婆やは聲までいそいそと彈ませてゐた。

それを聞くと静子よりも子爵夫人の方が訝つて、

「お珍らしい方つて、何誰だい？」

「い、え奥様。實はあの松崎様のお嬢様がおみえになりましたんで御座います。私、あんまり思ひ懸けませんもんで、ほんとに吃驚いたしましたしてしまひまして。」

「えッ、春子様が？」静子はもう腰を浮かして、「まあ、婆や、ほんとなの？」

「ほんとで御座いますとも、嘘と思召すならお立關へおいで遊ばして御覽なさいまし。」静子は母夫人が留めるのも聞かずに夢中になつて廊下へ飛だして行つた。

「まあ、お嬢様。お待ち遊ばせ。只今應接間へお通し申し上げますから、ほ、ほ、ほ、ほんとにお嬉しさうな。」婆やはこれも心から嬉しさうに笑ひながらその後を追つて行つた。

廣い立關へ出てみると式臺の隅のところにはの暗い月影に顔をそむけながら束髪に結つた小さな人影がしよんぼり佇んでゐる。見馴れぬ人を警める氣でか、キムは低い聲で呻めきながらその傍に突立つてゐる。

「まあ、春子様。しばらく。」静子は我慢しきれなくなつて式臺の端まで走り寄りながら叫んだ。

その聲でびつくりして春子はいきなり此方へ顔を振向けたが、しばらくは言葉も出ないかして、黙つてお辭儀をするばかりであつた。

「さあ、早くおあがり遊ばせよ。ほんとにお珍らしい、私どうして被居るかと思つて、そりや毎日々々心配してましたのよ。」と云つて、静子は折柄出て來た婆やに應接間の方へ電燈を點けるやうに命じた。

春子は病み疲れた人のやうに首垂れながらやがて静子の後に隨いて長い廊下を應接間の方へ導かれて行つた。輝やかなしい電燈は油繪の大額や、毛織の窓帷や、浮彫をした安樂椅子を隅の隅まで美しく照らして、眼に映るものは皆昔に變らぬ姿をみせてゐながら、

そのなかに立つ春子の姿だけは見違へる程佻びしさうであつた。

「さあ、お懸け遊ばせ。なんだつてあなたそんなに遠慮なさるの。」さういつて静子は妙におつおつしてゐる春子を安樂椅子へ坐らせ、自分もその隣りに座を占めてさも嬉しさうな顔色でちつと春子の姿形に見入つた。

その時になつてはじめて静子は春子の様子がひどく變つてゐるのに氣がついた。この薄寒い初秋の夜に春子はどうしたのか色の褪めた格子縞の單衣を重ね着にして、ところどころ糸のほつれたメリンスの細帯をしめたまゝ、のみすばらしい姿をしてゐる。髪の毛も妙にそつけて、眼だけは昔ながらに美しくても、頬や唇には生々とした血の氣がすつかり消えてしまつてゐる。それを見ると静子は譯は分らずに唯春子が可哀相に思はれて、一途に涙ぐまれて来たのであつた。

「ねえ、春子様。あなたあれからすうつと横濱に被居つたの。」
静子はやがてしんみりした聲で訊いた。

「え、春子は言葉少なに答へて、そのまゝ、又俯向いてしまふ。

「私、是非一度お目にかゝらうと思つてゐたんですけど、お處は分らないし、ほんとに心配しましたわ。お母様も矢張り御一緒？」

春子はそれを聞かれると何が悲しくなつたのか返事もしらずに袂を顔に押當てしくしく泣きだしてしまつた。嘔り泣く聲はやがて喰ひしぼつた齒を洩れて、まるで絶え入るやうに悲しげに聞えてくる。静子は途方に暮れて、自分も涙ぐみながらちつと春子の様子を眺めてゐるより外はなかつた。

そこへ母なる子爵夫人が出て來られた。扉をあけて入るなり春子の様子がたゞならぬのを見て取つてか、いつもの情深い眼を据ゑてそつちを見てゐられたが、やがて卓子の向ふへ座を占めて、

「春子様。しばらくでした。」と言つて静かに聲をかけられた。

子爵夫人の情ある言葉に誘はれて、春子はやがて涙ながらに今日菊池家を訪ねた譯を語りだした。一句々々途切れとぎれに物語るその憐な聲は薄寒い應接間の空氣さへ涙ぐませるやうにみえた。

春子は父に別れてからは實に以前の身の上と比較べたらまるで嘘のやうな悲しいなりゆきに落ちて行つたのであつた。つれない運命はかよい春子連れてもう抜き差しのないやうな恐ろしい運命に陥れてしまつた。親しい親類といつてはこの廣い世の中には一人もない彼女は唯繼しい母ばかりを頼りにして、今日までは漸う苦難に耐へて来たが、今日といふ今日こそ彼女はもう到底我慢がしきれなくなつて、思ひ迫つた末到頭横濱の家を出奔して東京へ遁けて来たのであつた。家出！ 聞くも恐ろしいその言葉を彼女は我れとわが身に負はせなければならぬほど、今日此頃は突きつめた思ひに貴められてゐたのであつた。

話せば長いことながら春子は先頃の手紙にもあつたとほりいぬる春の頃横濱へ落着くとすぐにそこでもう七八年間も耶蘇教の傳道をしてゐる老英國宣教師の許へ預けられたのであつた。それも初めは英語を學習させるといふ名儀で兎も角にも客分として取扱はれ、その宣教師の夫人が教鞭を執つてゐたミツシヨン・スタイルにも入れられたのであつたが、併しいつの間にかだんだんとその待遇は變つて夏頃からはもう全くの學僕のやうにその家で

追ひ付けられる身の上になつてしまつた。

それには深い仔細のあることであるが、もとを言へば皆繼母の胸から生れた悪計なのであつた。松崎家も父の存生中はあんな立派な邸宅を構へて極めて贅澤にその日々をくらしてはゐるが、その實、父の經營してゐた銀行は或事業に失敗して、その頃はもう帳簿のうへにも、預金のうへにも可成激しい缺損を來たしてゐたのであつた。従つて松崎家の資産といふものも高に積つたら何十萬とあつたのだが、父が生前残して行つた責任のある借金を引くと餘すところは僅かに跡に残つた遺族達の生活費と、それに春子の未來の結婚費ぐらゐるものであつた。繼母といふ人はもと横濱の居留地の下仕をしてゐた家の娘なので一旦實家へ歸つてはみたもの、これと言つて思はしいこともないので、到頭春子がまだ年弱なのを勿怪の幸ひに、跡に残された遺産の全部を實家の父親と共謀して自分の名儀に書き換へ、松崎家のすべてを横領してしまはうと企らんだのであつた。それゆゑ春子は宣教師の家にもても學資が來ないために漸次とそんな情けない身の上落ちてゆかなければならなかつたのであつた。

そんなこと、は露知らぬ春子は日々厳格な主人の云ひつけに従つて乳母車を押したり町に買ひものに出たりした。身には習はぬ水仕事などをさせられたりする場合には、いくら我慢しようと思つても熱い涙がぼろぼろと頬へ流れてきた。居留地の夜はしんと更け静まつて、何處からともなく聞えて来るピアノの音は過ぎ去つた楽しい昔を思ひ起させ、彼女にはさうした晩には亡き父母の名を呼びながら幾度か泣き崩れた。そして行末のことを思ふと、いつも眞暗な淵のうへに立たされてゐるやうな氣ばかりして、言ひ甲斐のない身を恐れずにはゐられなかつた。

今月になつてその宣教師は傳道本部からの命令に依つて遠い遠い南洋の絶海にある孤島へ轉任しなければならなくなつた。さすがに長い馴染を重ねてみれば、子供達も懐いてゐるし、宣教師夫婦も何となく手離したくなかつたので、春子を一緒に任地へ伴れて行くといつて正式に繼母にその話を申入れた。

胸に一物のある繼母はひどく喜んで一も二もなくそれを承諾した。もう出發の期も四五日うちに迫つた今日、春子は聞くさへ恐ろしい南洋へやられると聞かされて死ねと云はれ

るより恐ろしい恐怖の念に打たれた。小さい胸にはどうすると云ふ手段も思ひ浮べられないので、到頭人の混雑する夕間にまぎれて横濱から東京までの電車賃を持つたなりほんの着のみ着のまゝの姿でそのまゝ、姿を隠してしまつたのであつた。そして東京へ着くと、何よりも先に青山の墓地にある亡き父母の墓所へ行つて、暗い夜の迫つてくる恐ろしさも打忘れながら泣いて泣いて訴へたのであつた……

それまで聞いてくる間にも子爵夫人は幾度かハンケチを取出して涙を拭いてゐられた。静子はもう耐らなくなつて、春子と一緒に顔を掩ひながらしくしく泣いてゐた。

「ほんとにお可哀想にねえ。そんならさうと何故私どもの處へお手紙でも仰しやつて下さらなかつたのです。どうせお力にはなれないとしても、あなたがそんな目に逢つて被居るのを見捨て、置くやうな私ぢや御座いません。」子爵夫人はやがて涙を呑みながら言つて「もう此家まで被居れば大丈夫ですから、何も心配なさらないで、安心してゐらしつて下さい。此方でよく事を分けてお母様の方へも御相談しませうし、あなたのお體もきつと譯のたつやうにして上げますから。……でもほんとにお可哀想にねえ……。」子爵夫人は病み

寝られたやうな春子の顔をぢつとみつめながら又ははらはらと涙を流した。

折柄お庭の方のテレースの扉がすうつと開いて、そこから子爵が入つて來られたが、今迄立聞きでもしてゐられたのか、その眼にも涙が一杯に輝いてゐた。

七

その夜は菊池家の人々の厚い情にいたはられて、春子は嬉しい、なつかしい一夜を過ごした。單衣では寒からうといつては、仕立おろしたばかりの靜子の袷を着せてくださる。お腹が空いたらうといつては夜更けにもか、はらず温かい食物の數々をつくつて下さる。そしてひとりでは寂しからうといふので、臥床も離れ座敷に靜子のと並べて敷かれ、ふたりは久しぶりで枕のうへに起きあがりながら長い間さまさまの涙物語に時を過ぎした。そして、

「もう寝ませう。」と、云つて枕には就いてみたが、春子はかうした情厚い菊池家の人々の

ことや、よにも幸福な靜子の上を思ふと、今更わが身の不運が情なく胸を責め萬感交々湧き起つて、涙ばかりが留途もなく枕紙を濡らすのであつた。そしていつの間にかすやすやと安らかな眠りに落ちた靜子のかすかな寢息を聞いてゐると身もよもあらぬやうな悲しさが迫つて來て、雙眼は益々冴えて來るばかりであつた。

その翌日から春子は菊池家の奥のひと間で靜子と一緒に平安な日を送ることが出來た。事のなりゆきを思ふと横濱の方の家のことや、どうきまるか分らぬ行末のことなどが氣に懸つて耐らなくなることもあつたが、その都度、子爵や子爵夫人に慰められて、唯々涙と感謝とを繰返へさせられるばかりであつた。

春子が菊池家へ落着いてから丁度五日目のこと、春子の繼母の従弟とかに當る中山と云ふ男が菊池家へ訪ねて來た。横濱でよからぬ汽船相手の雜貨商をやつてゐる男で、子爵家へ來るといふので威儀をつくらふつもりか、今日は寸の合はぬ紋付に袴まで穿いてゐる。訪ねてきた目的は云はずと知れた春子のこと、はじめはどうしても春子に逢はせろといつて聲音まで荒だて、ゐたが、子爵は物馴れた執事の黒川に旨を含めて應接室へ通させ、

そこで殆んど二時間あまりも何事かこそと云ひ合ひをやつてゐた。結局どう事がきまつたのか、中山はその儘穩なしく引上げては行つたが、黒川はそれから後で子爵のお居間へ行つてよそへ聲が洩れないやうに逐一の様子を子爵へ傳へてゐたやうであつた。春子は氣が、りて耐らないので、幾度か様子を窺ひに行つたが、その度毎に子爵夫人は、「心配するんぢやありません。黒川が何もかもうまく片づけて呉れますから、あなたは彼方へ行つていらつしやい。」と、云はれてすこゝ自分の居間と定められた静子の室へ引返した。

又四五日の日数は事もなく過ぎ去つた。黒川の話でちらりと聞くと横濱の方では老宣教師の手が切れると、今度はその頃娘の唱歌者を買出しに来てゐた上海のさる興行師の許へ春子の體を六年の契約で少なからぬ金にかへる約定が出来てゐたのであつた。丁度宣教師のところへ厄介になつてゐた頃、春子は外國人ばかり集る教會で、屢々唱歌者となつて讚美歌をうたつたので、彼女の美聲はホテルにゐる外國人のなかなぞでいつの間にか話題となつてゐたのであつた。身について生れた藝が身を助けるのではなくて、そのために却

つて行末の不幸を生まうとは今の今迄神ならぬ身の知る由もなかつた。春子はその話をきくと身を慄はせて泣いた。

十月も末になつた或日のこと、——その頃は中山と黒川との間にどんな談判が進んでゐるか少しも知らなかつたので、春子も少しづつ、不安な心持から救はれやうとしてゐた。——その日は小春日和のいかにもほつかりとした晴天で、空ゆく雁の聲も長閑に、郊外散歩などに出るには至極い、日だつたので、静子は散勞々春子を誘つて目黒から遊谷の方へ遊びに行つた。お供には婆やと書生の橋本が随いて、お辨當のサンドウキツチもコツクにこらへさせて、四人は十時頃から樂しさに笑ひさやめきながら邸宅を出ていつた。

電車で郊外へ出てみると武藏野の秋色は今が酣で、雑木林の黄褐色に枯れ落ちた景色も美しく、田圃道になよなよと風を招く薄尾花も眼馴れぬ静子達には殊の外うれしかつた。遠く平原の彼方にみえる富士や秩父の眞紫に澄む連峯をみては手を拍ちはやし、野川の堤から群立つ小禽をみては雀躍りしてよろこんだ。そしてその日一日楽しく遊び暮らして、疲れ果てた體を再び電車に預けて歸途に就く頃には、もう暮れをいそぐ秋の夕陽が灯の

瞬く郊はづれの町を紅くうるませせてゐた。

渋谷で市内電車に乗りかへる時、春子は歡びの後に起る何とも云へない悲しみに胸をふさがれて、急に亡き親達の墓所へお詣りに行きたくなつた。道筋から云つてもほんの少しの廻りになるばかりなので静子達も春子の心根を推量つて皆で一緒に青山の墓地へまはることにした。

増田屋と云ふ茶屋へ寄つて、春子はそこで香花をと、のへ、夕陽のうす明るく残つた墓と墓との間の小徑を親達の終の住處の方へ入つて行つた。人知れぬ悲嘆の涙とある限りの胸の思ひをば冷たい石になつた親達の前で訴へようと思ふので、彼女は人に見られるのも恥かしく、静子達が一緒に行かうと云ふのを強つて茶屋へ残つてゐて貰つて、墓掃除の老爺ひとりをつれて寂しさうな後影をみせながらやがて墓地の樹立の向ふへ姿を隠してしまつた。……その時丁度彼女の二十間ばかり後から一人の怪しげな車夫がまるで運命の悪魔のやうに見え隠れについて行くのを、春子自身はもとより茶屋の奥座敷で遊茶をのみながら待つてゐた静子も婆やも書生の橋本もまるで氣づかなかつたのであつた。

しばらくすると阿伽の汲みかへも終つたのか、墓掃除の老爺だけが空になつた阿伽桶をぶらさけてしよんぼり歸つて來た。そして奥座敷にゐる婆やの姿を見ると誰れに云ふともなく、

「ほんとに感心なお嬢様だ。俺もう二十年も墓掃除をしてるんだけど、あんな親孝行な方見たことがねえ。かうして両手を合はせて、お父様、お母様つて拜んでらつしやる姿をみると俺いつでも涙が出るなあ。ほんとにお年の若えのに感心なお嬢様だ。」

その言葉は到頭婆やまでも涙ぐませてしまつた。

そのうちに、時間はだんだんと過ぎ去つて、春子が出て行つてから彼れ是れ一時間にもならうといふ頃ほひになつた。四邊はとつぷりと暮れて、兵營の方では練兵をする喇叭の音も途絶えてしまつた。皆はあんまり長くかゝり過ぎるので邸宅へかへる道も氣遣はしく、判頭橋本にいひつけて墓の方へ春子を迎ひにやつた。もの、十分も過ぎたと思ふ頃、橋本は袴の裾をばたつかせながら慌たしく馳せ歸つて來た。そして婆やの顔をみるといきなり、

「婆やさん。大變だ、お嬢様はるらつしやいませんぜ。」
 「まあ、さう。どうなすつたんだらう。」婆やはつとめて静かにいつたが、その時何かしらひやりと胸の底にひらめくものがあつて、思はず腰を浮した。その顔には安からぬ色が浮んでゐた。

「まさかお獨りて先へお歸りになる筈もないし……。」橋本は眞蒼になりながらまだ息を弾ませてゐる。

皆はそれから妙に壓しつけられるやうな氣持に襲はれて、墓掃除の老爺に提灯をつけさせて、松崎家の墓所へ行つてみた。そこには暗がりのなかに古いのと新しいのと二基の墓碑が見えてゐて、新しく手向けた香煙が薄くたなびいてはゐるが、開いたまゝの鐵門の中には春子の影も形もみえない。

「まあ、ほんとにゐらつしやらないわ。何處へいらしつたんだらう。」静子はもうその様子をひと眼みるとおろおろ聲になりながらいつた。

それから方々と手分けをして廣い墓地のなかを隈なく捜してみたが、徒らに樹立を吹く

風の聲ばかりが物騒がしくて、春子は何處へ姿を消してしまつたのか、かいくれ當てさへつかつた。

皆はもう途方に暮れて、しばらくすると若しやひよつとかしたら一足先に邸宅へ歸つてゐるやしまいかといふのを唯ひとつの頼みに、そのまゝ、茶屋を引上げて、大急ぎで邸宅へ歸つて行つた。そして立關へ上がるといきなり黒川や婢達に様子を訊ねてみたが、彼等は静子達の歸りが遅いので今にも迎ひを出さうかと思つてゐるところだといふだけで、春子が歸つたなどとは以つての外だといふやうな顔つきをした。

静子は立關から直ぐさま父子爵のお居間へとんで行つて事の一伍仔什を慄へながらお話をした。それから邸宅ぢう上を下へかへしての大騒ぎになつて黒川などは蒼くなつて嘆息をつきだした。黒川の推察では、まだ横濱の方とも話しがつき兼ねてゐる今日のことゆゑ、きつと先方から廻し者を出して春子の動靜を窺はせ、たつたひとりて墓地にゐた機を見はからつて、有無もいはさず連れ去つてしまつたのだらうといふのであつた。それは座に居合はせた皆の胸にも浮んだ考へで、さうと見當がつくと、馬丁や橋本や、出入の車夫なぞ

で春子の顔を見知つたものは残らず搜索のために八方へ馳せてみたが、夜の十時過ぎになつて一同方々から歸り集まつて来たところをみると、そのなかで誰れひとりとして吉報を齎したものはなかつた。

その夜は何ともいひやうのない不安のうちに更けた。一時は警察の手をわづらはして搜索してみようかといふ評議も出たが、さうすれば菊池家の名譽に關はるやうなことが萬が一起らないとも限らぬし、それにむづかしく詮議だてをすれば春子はもともと菊池家のいひ分でどうなるといふやうな位置にあるでもないので、事を荒だて、は却つて不利益だといふことにきまつて到頭その話も沙汰やみになつてしまつた。

その翌日黒川は子爵の命によつて、春子の様子を捜るために態々横濱へ行つた。そして中山にも逢つてさまざまに詰問してみたが、先方では知らぬ存せぬときつぱり云ひきつて、しまひには却つて大事な預りもの、春子を人手に渡したといつてあべこべに喰つてかゝるので、さすがに物馴れた黒川も根をきらしてさすがに歸つて来た。

ふとしたことでまるつきり行方の知れなくなつた春子から思ひがけない消息のといいた

のはそれから二週間の後のことであつた。それはたゞ一片の葉書で、しかも消印は門司の郵便局で、よほど急いで書いたものと見え、鉛筆で走り書きしたその字體は讀むのに難澁した。それによると、果たして彼女は青山で後をつけて来た廻はしもの、手に捕へられ、その晩に横濱へ連れて来られ、その翌夜はもう遠い神戸へ行つてゐた。そして今唱歌者を買ひ出しに来た西洋人夫婦につれられ千里の波濤を越えて異國の空へ送られるべく乗船するところだと書いてあつた。そしてもう生命のあるうちには到底お眼に懸ることも出来まいから、このはがきを形見として貰ひたい、又厚い御恩は死すとも決して忘れぬと涙ながらに書き添へてあつた。

それをみた菊池家の人々は誰も彼もわが子を失つたやうな悲嘆にくれた。憐れな唱歌者に身を賣られて、見も知らぬ異國の空へかどわかされて行つた春子の身の上はこの後どうなることであらうか？

讀者諸嬢よ。作者は今迄前後七回に亙つて、菊池家の静子と、松崎家の春子とが薄い縁の糸に繰られて、思ひも染めぬ悲しい別離に逢ふまでのなりゆきを書きつゞけて来た。春子を失つた静子の悲嘆や、菊池家の憂慮もさることながら、それはもう當然避く可からざる運命として思ひあきらめなければならぬ時機が来たのであつた。静子はその後も子爵家の愛嬢として、春子に對する哀憐、同情の念は常に胸の底に燃えながらも、その日その日は何ひとつ不自由もなく、學校へも通へば思ひのまゝに振舞ふことも出来て、幸福な月日のもとに歳月を過ぎして行つた。それゆゑ作者は静子の上には何事も起らぬ平和な生涯を置き、それから幾とせの後、かりそめの病ひにとらはれ、到頭彼女が年若うして花の命を吹き散らされてしまふまでは、しばらく幸運の女神の手に話の筋道を預けて置いて今回からは筆を改めて、唱歌者に身を賣られ、遠い異國の空にさすらつて行つた春子の憐れな身

の上を物語らうと思ふのである。一度別れたものが再び逢ひ得るとしても、それはどんな悲しい運命の手引きによつてゝあらうか？ 春子が幾年の後、名唱歌者に立身して身には錦繡をまとひながら血を吐くやうな「春のゆくへ」の悲曲を歌ふのは、果たして静子の病床に於てゝあらうか、それとも一片の煙と化した無言の墓碑の前であらうか、「春のゆくへ」の一篇の題意はこれからが本題に入るのである。

蒼ざめた利鎌のやうな弦月が雲の間から見えがくれに下界をさしのぞいてゐる晩であつた。四邊には吹く風の聲も途絶えて、巨大な汽船の船腹を打つ波浪の音だけが減入るやうに聞えてくる。

丁度日本を出てから二日目の晩である。なつかしい故郷の鳥山も悉く水平線の彼方に沈んで、今はもう夢寐にのみ通ふ幻となつてしまつた。生きて再び故郷の土を踏む望みも絶えてた今、春子は同じく横濱から買ひ出されて来た他の二人の娘達と一緒に日光丸の第一三艙にある三等船室の隅で、穢るしい匂ひのする毛布にくるまりながら丸くなつて寝てゐる

た。いくら眠らうと思つても、疲れ果てた身には眼がますます冴えてゆくばかりで、ともすると故郷の思ひ出が云ひ甲斐のない涙を絞らせる。もういくら泣いても喚いても及ぬこととは思ひあきらめながらも、涙ばかりはとめどもなく溢れてくるのであつた。

彼女達のまはりには怪しげな風體をした労働者や南洋へでも送られてゆくらしい出稼ぎ人のやうな支那人やらがまるで獸のやうな姿をしながらぐつぐつと寝入つてゐる。薄暗い電燈の光はその恐ろしげな顔をぼんやり照らしだして、ちつと眺めてゐると春子は恐ろしさにもぶるぶると身慄ひが出てくるやうだつた。こんな人達の間に取り囲まれながら、この幾年月の間、苦勞に苦勞を重ねなければならぬのかと思ふと、なまじ生命の糸の断れないのが恨めしく、過ぐる月日を思ふにつけても、身の不運ばかりが嘆かれてならなかつた。彼女は亡き父を思ひ、母を思ひ、姉妹とも馴れ睦んだ菊池家の静子を思ひつゞけると、又新たな涙は頬をつたうて冷たい毛布のうへにしとしとと滴り落ちた。

と、みると、舷窓の丸硝子を越して彼方には朦朧と月色に煙つた果てしもない大海が夢のやうにひろがつてゐる。支那海の曉はもうそろそろ破れそめやうとするのか、曉の明星

は東の空にぎらぎらと輝いて、海の面には名も知れぬ海鳥が高く低くむれとんでゐる。そして何を合圖するのか上甲板の方では突然汽笛がひと聲ながく呻めいて、その悲しみは遠いとほい沖の方まで尾をひきながら流れてゆく。

春子はもう耐らなくなつて、いきなり半身起き上りながら、両方の手を固く合掌をして「お父様、お母様。」と、泣き聲で呟きながら、今はもう東方千里の海山を隔てたなつかしい父母の墳墓の地を拜した。それと一緒に胸は張り裂けんばかりに込みあけて来て、いくら耐へやうと思つても嗚咽は喰ひしばつた齒の間を洩れて来た。

その時、すぐ隣りに寝てゐた娘の毛布はむくむくと動いて、そのなかからも悲しげな嘔り泣きの聲がひそやかに洩れ聞えてくる。そしていつか温かい手がすつと毛布の間から出て来て、顔を掩ひながら突俯してゐる春子の腕を握と握りしめた。

「あ、われも人も矢張り同じ運命なのだ？」と、思ふと、春子は急に百千の味方を得たやうな氣がして、いきなりその娘の方へ顔を寄り寄せながら、薄暗い電燈の光をたよりにその顔をちつと見入つた。その娘も殆んどひと晩まんぢりともしなかつたものと見えて、

雙の眼瞼を眞紅に泣き膨らしてゐる。

二人は他の人には聞えぬやうに顔を近々と寄せていろいろな打明けた身の上ばなしをはじめた。その娘は矢島きぬ子といつて、春子よりは二つほど年上ではあつたが、生れは矢張東京だつた。神田の裏町にある小間物屋の娘と生れ、貧困のうちに育つた女ではあつたが、見るから情の厚さうな、賢さうな女だつた。彼女も家の近所の小さな音楽學校へ通つてゐるうちに、その先生にすゝめられて、唱歌者として身を賣られ、今遠い異國の旅路に出る道すがらなのであつた。そして彼女には春子と違つて、大酒飲みの碌でなしの父親と、年中醫藥の助けを離れ得ぬ病身の母親とがあつた。わが體を年期の金に代へなければならなくなつたのも、全くその親達ゆゑで、飲んだくれの父には責めさいなまれ、病の床にある母には泣かされながら始終涙のうちに過して來た日のことを細かく物語る時、きぬ子は言葉が出なくなつて幾度かよゝと泣き崩れた。

春子はその話を聞くと、世の中に不幸なものは自分ばかりではなかつたとつくづく憐れになつて、これから先はお互に力になつたり、なられたりしようと思つて、行末のことど

もを堅く契つたのであつた。そして異域の海波に漂ひながら、故郷を同うした憐れな二人がちつと眼を見合せて微笑んだ時、悲しみに充ちた夜はほのぼのと明けはなれて、第一の曉の光は涙にぬれた枕に落ちて來たのであつた。

その日の午後日光丸は眞黄な揚子江の濁水に洗はれながら上海の港に錨を投げた。春子やきぬ子等は荷物とてもない殆んど着のみ着のまゝの姿で棧橋へ下りて、飢ゑたやうな顔をしながらうろろして歩く穢らしい苦力等の間を海岸通りから英國の租界へつれてゆかれた。そしてとある小路の角にあるその歌劇團の事務所へ入れられて、その二階でいよいよ物懶い幾年かの月日を送らなければならぬことになつたのであつた。

その事務所には各國人の間に立混つて、春日千鳥といふたつた一人の日本人の女優がゐた。もとは奇術師の一座にゐた唱歌者で、今ではもう聲を傷めて、女優等の衣裳方のやうなことをしてゐた。その女は顔には似合ぬ親切者で、二人がまだ旅馴れぬ初心者なのを知るとひどく同情して、何くれとなく氣骨を折つて世話をしてくれた。

春子やきぬ子達の日課と云ふのは極めて苛酷なものであつた。朝六時に起きると一杯の

牛乳とパンで貧しい食事を済まして、それから自分達の居まはりから姐分に當る唱歌者達の部屋々々の掃除をして、すぐに舞踏のお稽古がはじまる。意地の悪い英國人の師匠はただ體の馴れぬ彼等をば、ちよいと足の上けやうが悪かつたりするとまるで犬猫のやうに鞭打つた。春子達はその痛さに耐へ兼ねて、泣きながら薄寒い舞踏室を踊つて廻つた。

それがすむとそれよりも亦一層辛い唱歌の稽古がはじまる。外國語の一節さへ分らぬ歌を日に幾度となくさらはせられるので、假令今迄に多少の練習は經て來てゐても、まだ年の若い春子等には到底うまく唄ひこなせる筈がなかつた。その師匠は伊太利人の女で、舞踏の師匠のやうに激しく鞭を用ゐることはなかつたが、そのかはり自分の思ふ通りにならなと狂氣のやうにぢれにぢれて、ピアノを弾く指をきつと噛みながら皆と一緒にひひい聲をあけて泣いたりした。それがまた春子達には鞭で打たれるより却つて悲しかった。

すべてのお稽古が済む頃にはもう日も西に沈んでそろそろ劇場へ出てゆく藝人達の支度をしてやらなければならぬ時が來る。彼方へ行つては嗚鳴られこつちへ行つては嗚鳴ら

れしながらやつとのことで皆を送り出してしまふと、それから漸う夕飯になるのである。

ひつそりと靜まつた事務所の二階にはやがて春子等と同じ見習ひの女達ばかりが残る。伊太利人もれば、佛蘭西人もるし、なかには遠い露西亞から買はれた來た少女もゐた。それ等は皆書間の疲れで、めいめい木製の椅子に腰を打懸けたまゝ、何事も打忘れてうとうとと假眠の夢をむさぼる。青い布をかけた電燈はその無心な顔にいとしい影を描いて、いづこ如何なる人々の子とも知れないが、いづれも年若うして人生の悲愴な波路に沈んだ悲しみを宿してゐる。さういふ晩、春子達は窓際へ椅子を寄せて、肌ぬくみも運ぶほど近々と體を摺りよせ、異境の夜をまもる賑はしい灯の瞬くさまを見下ろしながら故郷の思ひ出を語り合つてはいつも涙に暮れたのであつた。

今頃はお父さんやお母さんがどうして被居るだらうと一人がいひだすと、春子はいつも和兒の身の非しさ、心細さに胸を塞がれて、身も世もあらぬほど泣きに泣いた。

遠い東の空の彼方に住む菊池家の静子のことは晝となく夜となく眼の前に髣髴して、その幸運を羨やむと同時に、菊池家の情厚い人々のことを思ひ出すと、翼があらば飛んでも

ゆき度いほど逢ひ度くて耐らなくなつた。

春子は夜、人の寢静まつた頃を見計らつて、月に一度は必ず静子に當て、長い手紙を書いては今の情けない境遇を訴へた。そしてきぬ子と同じベットに眠る夜ごとに、彼女は菊池家のことをこまごまと話して、きぬ子にも一緒に泣いて貰ふのを樂しみとした。

二年の月日はさながら大江の水のやうにいつ流れ去るともなく過ぎ去つてしまつた。春子もきぬ子も鞭を負ふ日數が重なるにつれ技藝は日一日に上達して、いつともなく同じ見習ひの外國人達を遠く凌いでしまつた。

殊に春子の生れついた美聲は玉と磨かれて、歌の韻律も漸次と整ひ伊太利人の師匠などは來るべき一座の明星はこの春子だといつて雀躍りして喜んだ。そしてその美聲を愛する餘りに、まだ初舞臺も踏まない彼女をば交際社會の會合の折などには方々へ連れ出して、松崎春子なる少女の天才の名はそれとなく各居留地の外國人の間にひろがつて行つたのであつた。

上海の賑やかな大通りにあるヴェライエテイ座でその春子が空前の成功を以つて満場の

聴衆を魅し去る初舞臺の日は漸次と近づいて來た。そしてまた彼女が一生に一度の災厄を生む危難の日もそれと一緒に一步一步春子の身に近づいて來たのであつた。

九

上海の賑やかな大街道にあるヴェライエテイ座で春子が空前の成功を収めた初舞臺の日の光景はどんなに華々しかつたらう。その日の出しものは「ジュリアノオ」といふ伊太利のオペラで、春子はその悲劇の女主人公たる少女ジュリアノオをつとめた。もう開場の夕には座席は悉く賣り切れてしまつて、劇場の前には切符を買ひそこねた観客がわいわい云つて群れ騒いでゐた。

午後の七時に愈々第一幕は開いた。悲劇の筋は父母を失つた牧夫の娘のジュリアノオが或日のこと城址へ登つて花を摘んでゐると、そこへ不思議な白鳥が現はれて彼女に幸福の鍵をくれる。その鳥はずつと昔、さる獵師の矢に射られて傷いたまゝ、その城址の石崖のう

へに倒れてゐたのをジュリアノオが助け歸つて親切に傷をいたはつてやつたあとで又森へ放してやつたことがあるので、その禮に幸福の鍵を持つて来てくれたのである。幸福の鍵をもつたジュリアノオはそれからいろいろな幸運に出逢つて、到頭貧乏な牧夫の娘から一躍してその土地の領主の娘になる。そして榮耀榮華のある限りを盡したが、しかし金銀をちりばめた寢床にねる夜な夜なまだ懐かしい父母が生きてゐた頃、親子三人で月のさしこむ荒家で楽しく眠つたその時分の幸福ばかりが思ひ出されてならないので、ならうことならもう一度さうした境涯へ歸り度いと思ふ。と、ある月のい、晩、突然白羊をひいた牧童に扮した悪魔が現はれて、彼女をその父母に逢はせてやると云つて、領主の邸から誘きだす、ジュリアノオはもとより悪魔とは知らないで、たゞ亡き父母に逢ひ度さの一念で野越え山越えその牧童の云ふがまゝにあとをついてゆく。そして到頭恐ろしい地獄まで連れて來られてしまふ。その地獄の劫火燃ゆる死の谷で彼女が過ぎ去つた幸多き世を偲びながら血に泣く思ひで父母を慕ふ一節がこの悲劇の最も妙處なのである。そしてさまざまの危難を遇れて、彼女はやがて神の救ひを受け、以前の白鳥の翼にのせられながら天國へゆく。そ

こで神の恵みの花園で懐かしい父母に逢ふと云ふのが、その悲劇の終曲なのである。死の谷の場は何とも云ひやうのない感銘を観客の胸に與へた。じき父母を思ふ心は春子の眞實の心である。死の谷の苦痛は彼女の現在の境遇である。蒼ざめた薄絹の衣を着て、いろいろな魔もののひそむ恐ろしい死の谷の暗闇に立ちながら歌ひつ泣きつ心の底にある限りの悲しみを訴へる春子の姿は、どんなに観客の涙を絞つたらう。さすがに雑沓した場内もその一節になると水を打つた様に静まり返つて、大方の人は皆手巾で顔を掩つた。そして幕が落ちると一緒に大波のやうな拍手喝采の聲が劇場の丸天井をどよめかして、春子はジュリアノオの着附のまゝ、幾度となく幕外へ呼びだされた。春子は面には微笑みを浮べながらも心では泣きながら夢中になつて拍手する観客達に挨拶をした。ジュリアノオの興行は非常な成功を以つて二週間打ちつゞけた。毎夜毎夜春子の樂屋には押し合ふやうな訪問客が溢れて、観客達から贈られた花筒や花束は廊下まで塞ぐほどだつた。さうした憐れな境遇に落ちた春子にも、自分の天才によつてこれほどの成功を得たことがせめてもの歡びだつた。どうせ陋巷に朽ちるとしても、なることなら人に名を知られるほどのものに

なつて、どうかしてもう一度日本へ歸り度い。着て歸る錦はどんなものであつても、立派な心をもつた松崎春子としてもう一度懐かしい故郷の人々に逢ひ度いと云ふのが彼女の一心の願ひであつた。それを思ふとたとひ一度は成功を得てもそれに氣を許すことはなく、彼女は自分から一生懸命になつて技藝を磨く決心をきめたのであつた。

併し好事魔多しとは世の諺、成功が大きければ大きいほどそれにつけ込む悪魔の爪も鋭いと云ふことは覺悟しなければならなかつた。春子の人氣が日一日にあがつてゆくにつれ平らかならぬのは一座にゐる他の藝人達であつた。その一座にはアンネットオと云ふ若い伊太利人の女優がゐて、年はまだ二十歳ばかりではあつたが、春子が出場するまでは一座の花形としてすばらしい人氣を呼んでゐた。春子が出場するやうになつても、彼女は常に春子よりもい、役をふられて二人は二つの明星となつて互に技藝を競つてゐたが、かうした舞臺の上のならひで、その二つの明星は決して同じ光で観客達を數ばす譯にはいかなかつた。新らしく出て來た春子の人氣が高くなればなるほどアンネットオの方は下り坂になつて行つた。それは自然の勢で、春子は自分でも氣がついてゐながらどうすることも出來な

いのであつた。

アンネットオはもともと日本人を馬鹿にしてゐた。多くの外國人が云ふやうに、彼女も時々「猿」などといつて春子や、きぬ子を罵つてゐた。その日本人がいつの間にか自分の位置を奪ひ、自分の人氣を奪つていかうとするのであるから、アンネットオの胸は激しい嫉妬と憤怒に燃えずにはゐなかつた。その嫉妬は忽ち恐ろしい悪計に變つた。どうしても春子を蹴落さなければならぬといふ決心が強くなればなるほど賤しいアンネットオは大膽になつて行つた。たうとうその悪だくみは恐ろしい事實となつてやがて春子の面前へ現れて來た。

丁度もうあと二日でその興行も千秋樂にならうといふ日のことである。ヴェライエテイ座の樂屋では大變な騒動が起つた。それはアンネットオがいつも首へ懸けて出る高價な寶石入りの首環が突然何者にか盜まれたものと見えて、行方が知れなくなつたといふのである。劇場の支配人も劇團の取締も眞蒼になつて樂屋から樂屋をうろたへまはる。アンネットオは我を忘れたやうに泣いたり喚いたりして氣狂のやうに樂屋番の見習ひの子を責めた

てた。騒動は漸次大きくなつて、到頭警戒に來てゐた英國巡査の耳に入つた。

樂屋では恐ろしい搜索がはじまつた。出入りの多い劇場のこととして、樂屋に關係のある人々は誰れも彼れも厳しい詮議を受けた。そして二階から三階までの樂屋も衣裳部屋も道具師の溜りも悉く取調べられたが、何處にもその首環の影は見えない。最後にまさかとは思つたが春子の部屋を捜してみると、こは如何に彼女の化粧臺の下にある手文庫のなかにその首環が新聞紙に包まれたまゝ、隠してあつた。それを發見すると、騒ぎは又新たになつて、今度は急に春子の賤しい心根を呪ふ聲が劇場の人々の口々に傳へられた。

丁度その時春子はジュリアノオの役をつとめて死の谷の場破れるやうな喝采を博してゐたが、幕が下りて樂屋へ歸つてくると、彼女はそここの廊下でいきなり英風巡査の手に捕へられ、厳しい取調べを受けた。餘りに思ひがけないことなので、春子は眞若になつて辯解してみたが、なにしろ現物が手文庫のなかに入つてゐたのであれば、その儘には濟まされなかつた。で、劇場支配人の嘆願に依つてその日の役だけは終りまでつとめることにして、劇場がはねてから改めて警察へ拘引されてそこで取調べを受けることになつた。

身には覺えのない濡衣を着せられた春子の心持はどんなであつたらう。天國の場で美しい天使に扮したアンネットオと一緒に陽光花の如き天の樂園をば舞ひ遊びながら天國の讚歌を燕のやうなほがらな聲で唱ふ時、春子は悲しさのあまり到頭泣きながらばつたり咲き亂れた花のうへに卒倒してしまつた。舞臺指揮者は慌て、幕を落す、観客達は何の譯とは知らずにたゞ同情の餘り大聲をあけて春子の健康を祈る。劇場は忽ちにして潮のやうに湧きたつた。

春子がやつと正氣ついた時には、もう誰れの手でか樂屋の長椅子の上へ運ばれて來てゐた。醫師は頻りに彼女の容體を氣遣つて警官達に拘引の猶豫を迫つたが、その願ひはどうしても聞き入れられなかつた。春子自身もかうなつたからは唯亡き父母の靈にすがつて一刻も早く身のあかりの立つやうに辯明したくて耐らなかつたので、自分から勇氣をふるひ起こして警官達の云ふかまゝ、に馬車で警察へ引かれていつた。

取調べはその翌日まで續いた。もとより身に寸分たりとも引けめのない春子のこととして涙ながらに答へる一言一句はさすがに異國の警官達の胸にも眞實の響きを傳へた。で、今

度はアンネットオの方を調べてみると、劇場の年老つた番人が金を貰つて彼女の首環をこつそり春子の手文庫の中へ隠したことを白状したので、それから端なくも彼女の悪計が現はれて、彼女は警察の手厳しい叱りを受け、支配人の嘆願によつて、やつとその儘放免になつたのであつた。そしてそのことが間もなく新聞にまで出たので、アンネットオの人氣は却つて人を呪はうとしたが爲めに益々落ちて行つた。舞臺へ出てゐる折にも「悪魔」などと云ふ聲が観客達の中からか、つたりした。しかしそれほどの賤しい女であつてみれば、唯一度の失策によつて、春子に對する呪ひを思ひとまるやうなことがあらうとは思はれない。その恨みは必ず何日の日にか、恐ろしい復讐となつて現はれて來なければならなかつた。

春子はそれからなるべく身を慎んでアンネットオの恨みを買はないやうにつとめた。しかし自分の技藝によつて得る人氣だけはどうすることも出來ず、そのためにアンネットオが春子に對して怒りを高めるとすれば、それこそもう彼女の力には及ばぬことなのであつた。そしてともすると「猿」などと云つては衆人の眼の前で自分に侮辱を與へるのをみる

と、さすがにおとなしい春子も口惜しくなつて、それが却つて身の勵みとなり、春子の技藝は日に月にめきめきと上達していつた。

初舞臺を踏んでから半歳ばかりの月日は夢のやうに過ぎ去つていつた。春子達の劇團はその年の末に香港から新嘉坡の方へ旅興行に出ることになつた。四十人ばかりの一座は嘗て四年の昔春子が涙に暮れながら渡つた上海の棧橋から舢舨に乗つて利鎌のやうな寒月が揚子江の水に映る夕に、さまざまの幸運を夢みながら船出して行つた。

劇團は行く土地々々で成功を収めて、椰子の檣の熱風にそよぐ新嘉坡へ着いた頃には、誰れも彼れも重い財囊を抱いて面白可笑しくその日の興行をつけてゐた。殊に春子は至るところで一座の花形として持て囃され、贈られる花束の數よりも幸福な夢に酔ふ日の方が多いからであつた、そして故國の人々に出逢ふ度に海外千里の波濤にさすらふ身の情なさも覺えられたが、舞臺に上る夜毎に観客から與へられる喝采はその悲しみを幾分づつ、でも薄らけていつた。そして愈々歸航の船に乗るまで、彼女は平和な水面の底に餌食をねらふ恐ろしい鰐魚が牙をあけて待つてゐるやうな危難がやがては自分の身に迫つて來やう

としてゐるのを少しも知らなかつたのであつた。

一〇

春子達の一座の乗つた歸航の汽船が新嘉坡を出帆して、香港の方へ向ふ針路に入つてから間もなくのことであつた。一座には突然思ひも懸けぬ不祥事が突發した。

それは一座の支配人であつた英國人が急病で頓死したことであつた。その支配人といふのは平常から非常に丈夫な男で、殆んど醫者の厄介になつたことなどはないやうな體をしてゐるが、どうしたものが死ぬ朝までピン／＼してゐてこれから先の興行の心配などをしてゐながら快活に戯談をいつたり、笑つたりしてゐたのが、その夜突然心臓に異常を來たして船醫がやつた注射も遂にきゝめがなく、到頭島影も見えぬ大洋の唯中で敢なく最期の息を引取つてしまつたのであつた。

思はぬ不幸に出逢つた一座の驚ろきはどんなであつたらう。その支配人は上海から香港

附近へかけての有名な興行主で、その腕きゝの名が響いてゐただけに一座のものはいづれもこれから先の自分達の身の上を案じた。あの支配人を失つた後の一座はどうなるであらう。果たして今迄のやうな當りをつけて利益をあけてゆくことが出来るだらうかといふことは皆の心に深い憂慮の影を與へたのであつた。

兎も角も亡き支配人の椅子は當時副支配人であつたもうひとりの英國人によつと繼承がれ、一座は葬式やその他萬端の跡始末は上海の根城へ歸つたうへで整理をつけることにして、その儘すつと航海をつけていつた。旅興行で當つた歡びは日一日に消えて何となくうら寂しいやうな色が誰れ彼れの顔にも現はれて來た。

一座のなかでも支配人の死によつて一番激しい打撃を受けたのは女優のアンネットオであつた。それまで人氣の落ちた彼女が曲りないにも一座の花形とたてられて興行をつけて來ることの出來たのは全くその支配人のお庇護で、春子びいきの副支配人が代つて一座の實權を握るとなると、彼女は或は一座から首切られてしまはねばならないかも知れなかつた。薄情なのはかうした藝人仲間のならひで、藝が落ち人氣が落ちたとなれば、どんな

情誼があらうともまるで石塊のやうに人間を捨てゆく。その間には義理もなければ、憐れみもない。長い間さうした境涯に育つて来たアンネットオはそれをよく知つてゐた。自分の運命が日に日にせまつて来るのを悟ると、奸悪な彼女は どうしてそれを黙つてゐるやう。自分の競争者たる春子に對して何かまた悪計を企らんで、どうにかしてその春子を二座から追出し、自分の位置をば安全にしようとせずにはゐなかつた。

丁度汽船が香港へ入港する日の曉のことであつた。航路を監視する運轉士の室へ突然慌たしく駆け込んで来たふたりの男がある。と、みるとそれは穢らしい支那人の勞働者で南洋の方へ出稼ぎにでも行つてゐたらしい最下等の船客であつた。彼等は運轉士の姿をみると、さも苦しげに息を切らしながら、今彼等が後部甲板を通ると二人の女がいきなり身を躍らして海中へ身を投げたと告げた。怪しげな英語でとぎれとぎれに語るその言葉はどんなに運轉士を驚かしたらう。

春の行方

その驚く可き出来事は忽ちそれからそれへ電話で傳へられて、非常汽笛が消魂しく曉の空に吹き鳴らされると同時に汽船はたと進行を停止した。満船の客は何事が起つたのか

と思つて寢衣のまま、色を變へて甲板へ飛び出して来る。甲板では水夫達がボートを卸す仕度をして舷燈を振り照らしながら今来た航路の方へ大急ぎで捜索に出てゆく。汽船のうへは瞬く間に戦のやうな騒ぎになつてしまつた。

そのうちに誰れいふともなく、投身したのは歌劇團のなかにゐる日本人の女優だといふことが傳へられた。日本人の女優といへば疑ひもなく春子ときぬ子の兩人である。それを聞いた劇團の支配人は吃驚していきなり中甲板へとつて返し、そこにある二等の船室へ入つてみたが、室の中には何の異状はなくても、その寢臺のうへには二人の影も形も見えなかつた。

それまでも汽船で演藝會の催しなどがあると、春子はよくその舞臺にたつては絶妙な技藝で船客達の無聊を慰めてゐたので船客は誰れも彼も一船のマドンナとして彼女を愛し懐かしんでゐた。その春子が突然寂しいその明方南支那海の恐ろしい波間に身を投じたといふので、船客といふ船客はいづれの國人を問はず深い疑ひと同情の念とを持つて甲板上へ集まつてきて、船尾の欄干から捜索に出たボートのあとを見つめてゐた。

一時間ばかりの間、広い海上を彼方此方と搜索した揚句、ボートはいづれも絶望したやうに權の聲をさめて歸つて來た。なにをいつても茫漠とした大海の真中ではあるし、それに夜がまだ明けきらないので、たとひ彼等の體が波間に浮いてゐたとしても容易に發見されやう筈がなかつた。遠く今來た航路の方を眺めると、推進機によつて掻き亂された一條の水尾だけが暗い海波の面に漂つて、水平線と空と接するあたりには誰れの運命を呪ふのか猫の眼のやうな物凄しい星がたつたひとつぎらりと輝いてゐた。船のものはもう二人の生命が到底助からぬのを知つて、なかには船尾の甲板へ膝まづいて熱心に祈禱を捧げるものなどもゐた。

船が香港へ入るまでは、食堂も喫煙室も春子達の投身の噂で持ち切つてゐた。餘り突然の出來事なので、何うした事情で彼等が自殺をしたか、その理由に對しては誰れしも疑ひを抱かすにはゐられなかつた。或者は突然發狂したのだらうと云ひ、また或者は餘り聲が美しいので海の魔に呪はれたのだらうなどと取とめのない想像を下した。しかし劇團の内部分から出た噂によると誰れが云ひ觸らしたのか、春子は亡き支配人の死を悲しみ、これか

らさきの身のなりゆきを憂ひて、到頭同胞のきぬ子を誘つて身を投げたのだと云ふやうなことが語られた。そして春子はそれまでも劇團に對して數々のよからぬ所業があつたので、支配人の死と一緒にそれがすべて暴露するのを恐れて死んだのだと云ふやうな思はずいことまで附け加へられた。

香港へ入ると、そこで碇泊してゐた間に起つた一大慘事のために端なくも總ての事實は明白になつた。入港した晩、一座は兼ねてからひいきになつてゐた或る交際社會の宴會に招かれて、そこで彼等が得意とする伊太利の古劇の一幕を演じた。春子を失つた一座は何かにつけて不便を感じたが、それでもアンネットオがその女主人公を勤めて、喝采のうちにとにかく無事に演じ了つた。そしていろいろ響應に預つたうへ一同馬車をつらねて艇船の出る棧橋の方へ歸つて來たが、アンネットオだけはまたそれから別席へ招かれていつたのでその夜もう曉方ぢかくなつてからやつと棧橋へ歸り着いたのであつた。

本船から特別に出してあつた艇船へ乗らうとすると、その時突然積荷の蔭から還ましい二人の男がぬつと出て來て、怪けな英語で二言三言いひ争つた末、アンネットオはその儘

その男達に寄せられて何處かへ姿を隠してしまつた。十分経つても二十分たつても、歸つて來ない。解船の水夫は餘り様子が変わるので、それとなく四邊へ眼を配つてみると、やがてすぐ間近な倉庫の蔭から突然時ならぬ銃聲がずどんと一發聞えて來た。それに驚かされて、おどおどしながら駈けつけてみると、アンネットオはどうしたものか、そこに積んである煉瓦の山の後で、顎の處を撃ち貫かれて犬のやうに地面に倒れてゐた。その時はまだ息があつたと見えて、苦しげに手足を蕩掻きながら呻めいてゐたが水夫達が慌て、巡査を呼んで來た頃にはもう全く冷たい死骸になつてゐた。

加害者はなんでも棧橋から直さま海へ飛び込んで沖の方へ向つて遁けたらしかつたが、それから二時間ばかりたつて、とあるジャンクの船腹に潜んでゐるところを警官の手に押へられた。それはさきの日春子が投身した時に、運轉手の室へ報らせにやつて來たあの支那人の勞働者で、よく調べてみると、南洋邊を荒らして歩いた瘠惡な破戸漢であつた。初めのうちは中々實を吐かなかつたが、判頭包み切れなくなつて、警官の面前で恐るべき事實を自白した。

春子もきぬ子も實は投身したのではなかつた。此等の破戸漢達はふと船中で知り合ひになつたアンネットオに頼まれて憐れ二人を自殺のやうにみせかけて、むざむざと海中へ投げ落してしまつたのであつた。丁度あの曉、彼等がそれとなく甲板の様子をうかがつてゐると、それとも知らない春子ときぬ子は眠られぬまゝに戀しい故郷のことなどをしみじみと打語らひながら朧ろけな星の光をたよりに甲板を散歩してゐた。そして、思はず人氣のない後部甲板の方まで出て行つたのをい、しほに、二人は猫のやうにその後をつけて行つて、いきなり後から用意の猿ぐつわをはませ、先づ最初に春子の方を推進機 蹴られる海波のなかへざんぶと投げ込んだが、きぬ子の方は破戸漢の手に隙があるのをみて無我夢中でそこにありあふ救命具の麻繩をしつかり握りしめたので、春子と同じやうに暗い海中へ投げ込まれる時には、その大きな救命具も一緒にするすると落ちて行つた。破戸漢達はしまつたと思つて慌て、その繩を取らうとしたが、なにしろ船は非常な高速力で駛つてゐるので、その咄嗟手を下す餘裕がなかつた。しかしたとひその救命具に縋りついたとて、どうせ大海の真中のことの為助からう筈がなく、凍えて死ぬか、魚の餌食になるか、早かれ

遅かれ二人の生命は底の藻屑となるのだと獨りできめて、彼等はそれから一時間ばかり経つてから素知らぬ顔をして運轉士の室へ二人の投身を報らせに行つたのであつた。

アンネットオの悪計は圖に當たつて兎に角春子の生命はうまうまと大海の祕密の底に失はれてしまつたが、しかし神のしろしめすこの世界にはそんな悪逆がいつまでも許されてゐるやう道理がない。アンネットオは春子を亡きものにした禮として、香港へ着くとすぐ莫大な金をその破戸漢にやる約束をしたが、事が成遂げられると彼女は急に素氣なくなつて約束を實行しないのみか、ともすると彼等まで警察へ密告して同じ死の牢獄へ投げ込まうと計つたので破戸漢達は到頭怒つて、彼女をそんな慘たらしい仕方て殺してしまつたのであつた。天罰ほど恐ろしいものはない。

そんなこんなであれほど人氣の高かつた歌劇團もそれから間もなく丸つぶれになつてしまつた。上海へ歸つてから一族あけようと力を盡してみたが、一旦運命に呪はれたものはどうにも取返しがつかなかつた。

それにしても悪逆人の犠牲となつて海へ投げられた憐れな春子ときぬ子はどうなつたら

う。——悪事に馴れたさすがの破戸漢も、二人を海に投じたその朝仕澄ましたりと北叟笑みながら彼等の船室へ歸つていつた時、それから十海里ほどの沖合を歐羅巴への歸航の途にある佛蘭西の巨船バトリ―號が同じ航路を西へ向つて進航しつゝ、あつたのを少しも知らなかつたのであつた。

一一

……何處か遠いところから鼻へかゝる柔らかな佛蘭西語で呼ぶやうな氣がするので、ふつと氣づいて眼を睜くと、春子はいつの間にもやら應接間のやうな立派な室の片隅に置かれた安樂椅子のうへに寝せられてゐた。夜とみえて天井には飾電燈が眩ぶしいほど明るく輝いてすぐ傍には品のいい、外國人の老夫人と頗鬚の生へた立派な紳士が立つてゐた。春子は惺乎として思はず四邊をきよきよ見まはした。

先づ最初に聞いた言葉は流暢な佛蘭西語で話される、

「お、やつと正氣づいた。神様よ。この憐れな日本の娘に幸を垂れ給へ。」
 といふ短かい一句だった。それはその老夫婦の唇から洩れたもので、やがてその夫人はさ
 も嬉しうに微笑みながら春子の方へ顔を寄せて、矢張り佛蘭西語で、
 「あなたは佛蘭西語が話せますか？」と、訊ねた。

春子はそれを聞くとたい浮の空で、

「ウイ、マダム」と、答へた。それまでに彼女は伊太利語と佛蘭西語と英語だけは可成
 達者に話せるやうになつてゐたので、こんな際にも立派に返事をする事が出来たのであ
 った。

老夫婦はそれを聞くと嬉しげに打ち合點いて、

「それは結構です。もう口も利ける。あなたの生命は神様のお恵によつてたしかに助かり
 ました。私は一時非常に心配しました。」

老夫婦は立つて呼鈴を鳴らした。と、扉のところからはボーイやら、制服を着た高級船
 員やらが三人ほどつながつて入つて來たので、春子はその時になつてはじめて自分の體が

汽船に乗せられてゐるのだといふことに氣がついた。

鬚鬚の生へた紳士は船醫とみえて、やがて一應彼女の體を丁寧に診察したうへ、これで
 安心だと呟いて、皆の方へ兩手をひろげてみせた。皆はそれと一緒に小さな銀の聖像を捧
 げた老夫婦の方を向いて再生の歡びの祈禱を捧げた。

春子は皆の口から語られる話を聞いてゐるうちにやつと自分の生命が危機一髪の危難か
 ら救はれた事實を知つたのであつた。さういへば誰れかの退ましい手でいきなり抱へられ
 て海の中へ投げ込まれたことも臆ろけに思ひ出される。船員達の話によると、丁度昨日の
 晩方、その船が香港を出帆して遠い沖合を航行してゐると、甲板の見張りの者が突然海上
 に漂流してゐる怪しげな物體を認めた。近寄つた望遠鏡でしらべてみるとどうも人間の體
 らしい。で、すぐさま停船して、ボートを卸して引上げてみると、こは如何にそれは一つ
 の救命具に獅噛みついた二人の若い女の死骸であつた。一人の方は全く凍えきつて到底蘇
 生の見込みはなかつたが、他のひとり——即ち春子の方は或は息を吹き返すかも知れない
 と云ふので、船醫は我を忘れて看護につとめた。その甲斐があつて三十分ばかりたつと漸

う脈も出て来て、それから二日一晩の間昏睡したまゝ、時を過ぎた。そして今に至つてやつと正氣づいたのだと云ふ。そして件の老夫人といふのは巴里にあるさる大社會社の持主の夫人で長らく東洋へ遊びに来てゐたのが、今度急に歸國することになつて、その船路でこの汽船に乗り合はせたのである。そして丁度その老夫人がこの夏上海へ滞在在中ひと夜ヴェライエテイ座へ觀劇にいつて、その時春子の藝に酔はせられたので、それからよく顔を覚えてゐて、船中でも誰れよりも早く春子だと云ふことを見抜き、彼女が昏睡してゐた間殆ど夜の目も眠らずに看病してくれたのだといふ。

春子はかうした人々の身に餘る情に對して唯涙を以つて感謝を繰り返した。そして丁度その日の曉船規によつて大海の底に水葬されてしまつた憐れなきぬ子のうへを思ふと、自分がかうして再び生きることの出來たのが眞實奇蹟のやうに思はれ、いくら神様の存在を信じまいとしても到底信じずにはゐられなかつた。漂渺たる大海原の面に浮ぶ一粟のやうな自分の體が思ひがけなくもこの佛蘭西の郵船パトリー號に出逢はしたのも不思議である。そして又一度死んだものが蘇生したのも猶更不思議である。春子は思はず手を合はせ

て大空の彼方にゐます神に對して泣きながら感謝のいのりを捧げた。

皆に問はれるまゝに彼女はそれから自分の身の上を包まず隠さず物語つた。幼くして父母に別れ異國の空に身を賣られたこと、長い年月の修業で成功は得たものゝ、忽ち人の嫉みを買つてさまざまの困苦と闘つたこと、それからアンネットオに計られて到頭海へ投ぜられたことまで細々と物語つた。聞くものは皆泣いた。殊に老夫人ジャンヌは手巾を絞りながら、

「憐れな日本の娘よ」と、云つて、いきなり春子の體を抱いてその額に熱い熱い接吻を與へてくれた。

春子がジャンヌ夫人の情で遠い佛蘭西へ連れてゆかれることとなつたのはパトリー號が新嘉坡へ碇泊してゐる間のことであつた。こんな恐ろしい目に逢つた上は、もはや今では恩もゆかりもない上海の歌劇團へ歸つてゆく氣はしない。——その歌劇團ではあんな大騒動が起つてゐることを春子は少しも知らなかつたので憎いアンネットオに對してはその時燃えるやうな憤怒を持つてゐたのであつた。——と、云つて、今更日本の空へ歸つてゆく

べきよすがもない。そこで彼女に對して非常に同情をもつたジャンヌ夫人がどうしても佛蘭西へ渡れと云つて熱心にすゝめてくれたので春子も到頭その親切にほだされて心を動かさずにはゐられなかつた。どうせ一度は支那海の藻屑と消える筈であつた身、いつそ佛蘭西へ渡つて、もう一度生れ變つた氣になつて十分に技藝を磨き、ひとつにはジャンヌ夫人の好誼に報い、ひとつにはまた自分の名を世の人に記憶させるやうな身に立身したいと思ひ立つて、到頭ジャンヌ夫人の言葉に従ふことに堅く決心したのであつた。

パトリール號はその月の初めにスエズを過ぎて謝肉祭の前三日といふ日に目出度くマルセイユの港に入つた。そこから汽車で佛蘭西の中部を横切つて明日からは賑かな大街衢が飾り花で燃えやうと云ふ日にやつと巴里の都に着いたのであつた。

ジャンヌ夫人の邸宅はルキゼンブールの街にあつて、前庭を手廣くとつた四層樓の宏壯な邸であつた。主人といふ人も極めて温厚な親切な人で、着いた日から「ハルコ」「ハルコ」と云つて彼女を自分の娘のやうに可愛がつてくれた。そして彼女は當分外國の事物に馴れる間、夫人の化粧室附きの侍女といふ名義で、その邸の善美を盡くした生活のなかで起き

臥しすることになつた。

その年の末から彼女は有名を唱歌者マルグリット嬢の門に入つて、一心に技藝を研鑽した。たとひ唱歌者として舞臺へ立つたことはあつても、それはどうせ東洋の片隅へ流れて行つてゐるやうな貧しい一座のことなので表立つた本場の舞臺へ立つてみると恥かしくてとても演じられぬやうな賤しい技藝ばかりしきや仕込まれてはゐなかつた。春子はもう一度子供の時代に歸つたやうな氣になつて一心になつて勉強した。その結果は遂に空しからずで三年の後には佛蘭西の各地の新聞で「驚ろくべき聲をもてる日本の女聲樂家」と云ふやうなすばらしい評判を取るやうな名唱歌者に出世したのであつた。その三年の間の辛勞は今到底口では云ひ盡せない。その間には重い病氣にも罹れば、死ぬほど悲しい、切ない思ひもした。しかし情の厚いジャンヌ夫人は常に隣になり、日向になり彼女を庇護つてくれたので、かうした成功も全くその大部分はジャンヌ夫人の賜ものと云つてよかつた。

春子が丁度二十五歳の春、巴里のオペラ座で初めて初舞臺の大役を演じた。師匠のマルグリットは態々彼女を聴衆に紹介するために幕外へ出て一場の挨拶をした。初日には巴里

でも有名な批評家達が皆劇場へ集まつて彼女の豊富な聲量と、日本人にしては珍らしい節廻はしの巧みさを激賞した。その日はサツプオーの難曲であつたが、彼女は實にその曲によつて熱狂したやうな喝采を博したのであつた。舞臺から降りてくると、彼女はいきなりジャンヌ夫人にかき抱かれて、我れながら我が聲の力に驚く涙のうちに夥多たびの歡びの接吻を受けたのであつた。

初舞臺がすむと、春子はマルゲリートの一座に加はつて大陸の各地へ旅興行に出た。何處へ行つても、マダムハルコの名は不思議な人氣となつて持て囃された。そしてその年のクリスマスには倫敦の劇場へかゝつてゐるが、そこで彼女は不思議な縁で或日本の婦人に

出逢つた。

或晩のこと彼女は自分の持ち役を済ましたので、樂屋へ歸つてそろ／＼化粧をなほさうとしてゐると、そこへ樂屋番の老爺がやつて来て、一通の手紙を置いて行つた。派手な劇場の生活に浸つてゐるものには讚美者の觀客から寄越す手紙の數も日に幾通となく來るもので、彼女は何氣なく封を切つて見ると、なかからは絶えて久しく見なかつた日本文字の水

墨の跡もゆかしい手紙が現れて來た。懐かしさに思はず息を弾ませて讀み下すと、それは少しお話ししたいことがある故、若し體があいてゐたらどうかアスターホテルまでお越しを願ひ度いと極めて簡單にしるしてあつた。そして差出人は井谷房子とあるきりで、春子には何處の誰れともまるで分らなかつた。

鬼に角逢つてみなければ分らないので、春子は劇場がはねるとすぐさま馬車を飛ばしてアスターホテルへ行つた。案内のボーイに連れられて三階の隅にある小さな食堂へ行つてみると、そこにはあかあかと照り輝く電燈の光の下に夜會服を着た一人の日本の婦人らしい人がしよんぼり待ちあぐねたやうな風をして坐つてゐた。扉をあけたその刹那春子は、「ま、房子様！」と、叫んで、いきなりその傍へ走り寄つていつた。長の年月は過ぎ去つても、その人の面影には昔に變らぬ心の色が動いてゐた。その人こそもう十有四年の昔菊池子爵家の芝庭で幼ない夢に遊びつ酔ひつしたそのかみの房子なのであつた。今は大使館附の武官井行少佐の夫人となつて、去年の春からこの倫敦へ來てゐたのであつた。

二人は何を語るにも先づさきだつものは涙であつた。春子が起伏の多かつた過去の生涯

を語る時、房子は耐らなくなつて手巾で顔を掩つてしまつた。そして思ひ出したやうにふと語りだしたのは春子にとつて夢寐にも忘れ得ぬ菊池家の静子のことであつた。佛蘭西へ渡つてからは心勞に氣を奪はれ、ひとつには絶望して全く捨て鉢な心になつてゐたために長い間まるで消息もしなかつたが、静子のことばかりは常に思ひ出の種になつてゐたのであつた。房子の語るところによると、その静子は今遠い日本の空で不治の病ひに冒され、命旦夕に迫つてゐると云ふ。それを聞いた時、春子は餘りの悲しさに口が利けなくなつて、房子の膝に倚つたま、聲も立てず泣き伏してしまつた。生命のあるうちには到底逢はれぬことと諦めてはゐながら、春子には異國の空にさすらふ身の心細さがその時ほどしみじみと覺えられたことはなかつたのであつた。

二

歐羅巴大陸ですばらしい人氣になつた松崎春子のマダムハルコがふと歸朝を思ひたつた

のは、丁度マルゲリートの一座が大雪に降りこめられた露西亞の都市を巡業して歩いてゐる時のことであつた。莫斯科の劇場を打上げたその日、春子は師匠のマルゲリートの許へ行つて突然その願ひを打明けた。師匠は餘り唐突な申出なので、一時はその眞意を疑つて許さなかつたが、春子が涙を流して事の一寸十寸を語りだしたので、判頭一座の方はうまく都合して快くその願ひを許してくれた。

愈々莫斯科をたつ日は恐ろしい吹雪で、見送りに来てくれた數多い人々の離情はそれが爲に更に深められた。國を異にし、人種を異にしてゐれど、さすがに長い馴染みを重ねてみると今更に別れが辛く、師匠が眞黒な外套に體をくるんで車窓の外から健康を祈つてくれた時には春子も耐らなくなつて泣きだした。そして又もう一度近いうちに是非佛蘭西へ渡ることを堅く約束して、一聲の汽笛とともに懐かしい一座と袂を分つてしまつた。

幸ひ大使館の書記官のなかに公川で日本へ歸る人があつたので、その人と一緒に彼女は雪に掩はれた寂しいシベリアの大野を放していつた。旅路には何の恙もなく、一週間の日数は降りしきる雪とともに暮れて、列車は無事に浦鹽斯德へ着いた。そこからはもう日本

人によつて運轉される汽船に乗ることが出来るので、彼女はもう日本へ歸つたやうな氣がして、見聞くもの毎に胸を躍らせた。そして敦賀へ着く日の朝、日本海の朝霧の間からはるかに雪を頂いた故郷の島山を眺めた時には、嬉しさに胸が塞がつて幾ら泣くまいと思つても、涙がとめどもなく流れて来た。十有餘年ぶりに再會する懐かしい故郷の姿は實に彼女にとつては天國よりも美しく、輝やかしく見えたのであつた。

敦賀へ着くと、何處からどう傳はつていつたものか、春子の歸朝の噂がもう遠い日本までも聞えてゐて、彼女はそこで上陸するとすぐさま新聞の特派員やら、劇場の支配人などに包圍された。「名唱歌者の歸朝」などと書きたてた新聞をさしつけて、彼等は滯歐中の感想談をうながしたり、劇場の関係者達は先を争つて興行の約束を取結ばうとしたりした。故國を去る時には賤しい賤業婦にも尊しい姿をして泣きながら船に乗つた自分が今はかうした衆人の歓迎を受け、光榮に包まれる日に際會したことを思ふと、春子は何ともいへない力強い胸のときめきを覺えずにはゐられなかつた。

懐かしい日本の土を踏むと、何よりも先に心に浮ぶのは菊池家の静子のことであつた。

ベルリンの興行の折、絶えて久しいおとづれをして、その末に近々歸朝して是非十一年ぶりでお目にかゝりたいと書いてやつたので、今頃は新聞に出た歸朝の噂をみて、どんなに自分を待つてゐて呉れることであらう。あの時には病氣も大分い、やうな返事が来たが、今頃はどんなにして暮らしてゐらつしやることだらう。さう思ふともうたつたひと夜の旅路を距てただけなので、戀しさ懐かしさはいやまさり、ゐても立つても耐らないやうな氣になつて、彼女は列車中で返事を受取るやうにして、至急報の電報で病態を尋ねてやつた。そしてその儘、疲れ果てた體を數多い荷物と一緒に、東京ゆきの列車に托したのであつた。

沿道いづれの都市を見ても、彼女が故國を去つた時代とはまるで違つた文明の空氣が流れてゐた。どんな小さな町へ行つても電燈がともつたり、電車が駛つたりしてゐる。殊に茅葺屋根のつゞいた村落からさして来る紅黄いいかにも日本らしいしつとりした灯の色をみると、春子はつい四五日前に通つて来たシベリアの大野も思ひ出されて、嬉しさにいくたびか、涙を拭つた。

米原から二三驛手前まで來懸かると、列車のボーイがさつききの電報の返事を持つて慌ただしく車室へ駆け込んで來た。とる手遅しと開けてみるとなかには唯「シヅコキトクスダコイ」としてある。春子はそれを見るとはつとして思はずぶるぶると體を慄はした。もう愈々静子は危篤なのであらうか、折角此處まで歸つて來てゐながら、ひよつとして息のあるうちに逢へないとしたらこれほど悲しいことはない。さう思ふと春子には汽車の進みが急にもどかしくて耐らなくなつて來た。

東海道の本線へ乗換へるとさすがに氣苦勞と旅疲れで春子は一等の寢臺車でしばしの間休息しようと思つて横になつたが、そのまゝ、いつの間にかトランクを枕にして寢入つてしまつた。その假寢の夢に彼女は不思議な幻影をみた。夢のなかには嘗て巴里の舞臺で演じた古曲の花崗の場が現はれて來た。遠山の霞も長閑に煙る春の野邊には千種の花が紅紫とりどりに咲き亂れて、朝の勤行をあける寺院の鐘の聲とともに雲雀がらちよと樂しげに舞ひたつてゐる。そしていさゝ小川の水の呟きを傳へるやうなゆるやかな管絃樂の音がひとしきり何處からとなく聞えて來たが、それがふつりとやむと、その花園の眞中へ、幻の

やうな姿をして立現はれて來たのは静子であつた。病み呆けたやうに色蒼ざめて、ものをもいはず立つてゐるその寂しげな姿。大きく睨いた雙眼には悲しみの色が一杯に充ち溢れて時々銀のやうな涙をぼろぼろとした、らせながら静子はぢつと此方を眺めてゐる。春子ははつとしていきなり我にもなく、

「静子さま!」と、呼びかけたが、その幻はたゞ招くやうな眼色をするだけで、返事もしない。そしてしばらくすると漸次に影が薄くなつて、いつのまにかそれは大きな蝸牛の姿になつてしまつた。……

ふと眼が覺めて見ると列車はもういつかしら白々と明けそめた箱根の山中へ來か、つてゐた。夢占がどう考へてもよくないので、春子はぢつとしてゐられないほど静子のうへが心配になつて來た。若しもう息を引取つてゐたらどうしよう。それを思ふさへ春子には涙の種であつた。

大船まで來ると、春子は一切の荷物をすつかり先へ送る手配りをして、自分は殆んど着のみ着の儘の姿で静子が病を養つてゐる返子の方へ行く列車に乗り換へた。そして丁度午

少し前に運子の停車場を着くと、すぐさま乗り馴れぬ人力車を備つて、今はもう少しの見覚えもない松林や、百姓家や、別荘の間を菊池家の別荘へと驅けつけていった。

別荘の玄関へ立つた時、春子は何となく家のなかさがさわめいてゐるので、先づ胸つぶるやうな思ひをした。案内につれて奥から小間使ひのやうな娘が出て来たが、その時春子は牛僧歸朝勿々のこととて日本文字の名刺を持ち合はせてゐなかつたので、巴里のマルゲリート一座の名刺を出すと、もう象々からそんな下々の者達も噂を聞いてゐたものとみえて、その娘は慌て、奥へ驅け込んで行つた。ついで出て来たのは、忘れもしない子爵夫人であつた。

「まあ春子さま。ようこそ……。」と、夫人は餘りに變り果てた春子の洋服姿をさも吃驚したやうにまじまじ打眺めながら、しばらくは口も利けないやうな様子だつたが、やがて眼をふせて急に人目も恥ぢずはらはらと涙を流した。

春子は使ひ馴れぬ日本語で久しぶりの挨拶をしてすぐさま静子の様子をたづねると、夫人は聲をふるはして、

「あの折角で御座いますけど、貴女から電報を頂きますと三時間ばかりして到頭いけなくなつてしまひました。」と、いつて、そのまゝ、手巾で顔を掩つてしまつた。

やがて通されたところは静子がこの三年の間涙とともに起き臥し、た病室だつた。北向きの臥床にはもう白二羽重の布に掩はれた静子の亡骸が見えて、その周圍には悲しげな顔をした老子爵をはじめ近親の方々が肅然と座をたゞして坐つてゐられた。

春子は一座の方々に禮を濟ますと、耐らなくなつたやうに静子の死の床に居坐りよつて戦く指先で懸帛をとつてみた。これが十一年の昔、果敢なく別れたあの懐かしい静子かと思はれるほどその死顔は變りはて、ゐた。春子は身も世もあられぬ絶望と悲嘆とを覺えて「静子さま、静子さま。」と、つゞけさまに叫びながらいきなりその臥床のうへに泣き伏してしまつた。

なつかしい静子、この十一年の間、遠い異境の空で生涯浮沈の瀬戸にさすらひながらも遂に忘れることの出来なかつた幼馴染の静子、その人はもう自分の光榮ある歸朝の日を待つことなく空しい亡骸となつてゐたのであつた。死の國の道遠くして、芳魂呼べども返ら

す、叫べども答へず、唯涙のかぎり悲しめとばかりにその亡骸の唇は堅くかたく黙してゐたのであつた。

その日は一日、亡き人の枕邊で涙に濕る物語りに暮らした。さすがに老子爵も、

「せめてもう一日早かつたら。」などと云つて頻りに春子が臨終に逢はなかつたことを惜しんでゐられたが、あとで聞くと、静子はもう毎日のやうに春子の歸る日を待ちあぐねて、熱の高い日などには謔言にまで春子の名を呼んでゐたといふ。そして春子から電報の届いた時にはもう殆んど人事を辨じなかつたが、それでも心に通じてか、弱々しい手を動かして春子の手を握るやうな様子をしたさうである。汽車中でみた不思議な夢を思ひ合はせると、春子は静子の靈が悉く永遠の別れを惜しむためにあの時示現して来たやうな気がして又新しい涙が一時に湧き上つてくるのであつた。そして老子爵が長々の行前を忘れぬ自分の心を喜んで下すつたり、またそんな世路の艱難にもめげず立派に成功して歸つて来た自分の將來を祝福して下さるのを聞いてゐると、眞實親の膝もとへ歸つて来たやうな気がして、せぐり来る涙を抑へながらしみじみ感謝の辭を述べたのであつた。

静子の葬式はそれから二日たつた日の午後、東京の本邸で執行はれて、亡骸は松吹く風の寂しい谷中の墓地に葬られた。年若うして一片の白木の墓標と化した静子の運命を思ふと、春子はつくづく世の果敢なきが悟られて、それにしてもまあよく今まで生き存へて來られた自分の身が不思議に思はれ、神の恵によつて救はれた過去をば基礎として、これから清い一生を藝術の神に捧げやうと更らに深い心を堅めたのであつた。

静子の葬式が済んでから一箇月の後、春子は愈々新しく歸朝した歌劇壇の明星として、日本での初舞台に立つことになつた。數々の演奏曲目のなかに彼女は静子の死を記念するために精利をこめて作曲した自分の名曲「春のゆくへ」を加へることにした。

いづぞや汽車のなかでみた怪しげな幻の花園の場面をそのまゝ、舞臺にとつて、やさしい胡蝶に扮した彼女はその花の匂ひをとめ歩みながら悲しい美しい聲で過ぎにし少女の時代の思出をば行く春の悲しみになぞらへて歌つた。聴衆はその美聲と曲の力に酔はされて熱狂したやうに拍手喝采した。その凄じい喝采に送られて舞臺を下りるとき前の方の座席に

ゐた聴衆達は春子が化粧した頬をばしとくに濡らして眞實囁り泣きしながら演じてゐたのを見た。あゝ、その名曲「春のゆくへ」それは名唱歌者松崎春子の光榮ある將來を祝福すると同時に、彼女にとつては實に一生忘れぬ思ひ出の悲しみを湧かせるきづなとならなければならぬのであつた。

露のいのち

師走の寒い寒い空ツ風が街から街を横なぐりにさツさツと吹きとよもしてゆく晩のことであつた。もうその年もあと幾日、氣の早い家では門松の支度も出来て餅屋の小屋が済えた双音をたてながら得意先廻はりに忙がしい頃である。暮の明荷を積んだ店をも賑はしく、八百屋には輪飾りやら昆布やら羊歯の葉、裏白などが堆くつまれ、何處をみても人々の顔には氣忙はしい春を待つばかりの色が輝いてゐるのであつた。

此處は山の手のお屋敷町、麹町の大通から上六番町の方へ入る薄暗い町の四辻のところ、煉瓦塀を手廣くとりまはした間宮といふ邸宅がある。庭もこの邊でも贅澤にとつてあつて、塀越しにみえる樹立もこんもりと小暗く、その樹の間に二階造りの宏壯な洋館と、避雷針を仕掛けた母屋の瓦屋根が天氣のい、日には明るい日の光を斜に受けながらちらちら見えてゐる。主人は有名な製麻會社の社長で、實業界でも昔から名を知られた分限者、

殊に成金のなりあがりものと違つて、中國のさる立派な大名の藩中から出た由緒正しい家柄なので、その家庭は人も羨むほど清く、美しく全家こぞつて和氣懇々としてゐるので名高かつた。嚴めしい鐵門で浮世と縁は切れてゐるやうに見えても、御門内の芝生で獵犬を相手に面白さうに遊び戯れてゐるお家の人々を見ると、出入の牛乳屋までが箱車を止めてうつとり見惚れてゆくくらゐ、暮らし向の質素なのが又この界限でも評判であつた。

併しこの間宮家には外に何と云つて不足のない中にたつたひとつ他に及ばぬ不幸があつた。それは世継ぎとなるべき長男の正雄がつい去年の秋に、かりそめの病から果敢かく世を去つたことであつた。正雄のほかには今年とつて十五の歌子と、十四の八重子、この二人の美しい令嬢があるきりで、男の子はひとりもなかつた。正雄が世にある間は分けても面白可笑しいその日／＼が間宮家の明るい家庭に明け暮れてゐるが、彼が早世した後は何となく妙な影が家のなかの何處かに射し添つてゐるやうで、それとは口へ出して云はなくても人々の頬には涙の匂ひが残つてゐた。中でも一番正雄の死を悲しまれたのは、お母様で、そのことのあつた後はあれでも殆んど半歳ばかりの間うつらくと病の床に就かれて

その悲しみのあとは今だに癒えないのであつた。寂しい月の射し渡る宵々、さては又落花に思ひを誘はれる夕べには亡きいとし子のことをば思ひ出でてお母様は涙に時を過ごされることも珍らしくないのであつた。老少不定は世のならひ、燃ゆるがごとく春光に生命を増はれる三月の白晝でも、ひとたび諸行無常、是生滅法の鐘の聲ひいき渡れば、線爛と咲き亂れた花の唇も敢なく散る。ましてや朝露にもひとしい人の身の行末、先だつものも、先だつる、者もいづれは同じ道芝に置く露のいのち。さうした断念はありながら思ひ絶ち難きは親子の情である。いつでも御命日の日などにはこの子さへ生きて来てくれたらばどんなに世の中が明るく楽しく暮らされるだらうなどと、つい愚痴らしいお言葉がお父様の口からまで出るのもまことに無理のないことであつた……。

今しも上六番町の薄暗い坂路には三人の人影が、冴えた下駄の音を吹く風の合間々々に響かせながら間宮の邸の方へ歩いてくる。ほんのりともる軒燈の光で見ると、それは間宮家の令嬢歌子と八重子で、お琴のお稽古の歸りとみえ、小間使のお糸に小さな爪箱を持たせて、二人とも睦まじけに友禊の袂を縫い合せながら頻りに何事か物語りつ、歩いて來

る。

だつて姉様。そりや小督はむづかしいんで御座いますよ。浦田さんは是非あれをお正月の校友會の時に遊ばすつて仰しやるんですけど、私どうかと思ひますわ。先生は私にも御一緒に出来る様につてさう仰しやいますけれど、私とてもあんなむづかしいものは駄目で御座いますわ。さういふのは妹の八重子であつた。丸顔の眼のくるくつとした如何にも愛くるしい顔容で、眼の下に泣き黒子の出来てるのまでが無邪氣な美しさをみせてゐる。姉の歌子の方は何方かと云ふと寂しい顔だちで、大きなその眼はさも思ひやりが深さうに濡れ輝いてゐる。學校でも淑やかで、涙もろいのが評判で、級中誰ひとりとしてこの歌子を慕はぬものはなかつたのであつた。歌子はさう云ふ八重子の言葉を黙つて聞いてゐたが、やがて、

『でも、さうでもないかも知れないわ。八重子さんは私よりお琴の性がいいつて云ふから、先生に少しお復習をして頂いたら弾けるかも知れませんかねえ。』

『あら、姉様。姉様までが先生の方のお味方におなり遊ばしちや厭ですわ。私校友會なん

ぞへ出るのが厭なんぞで御座いますもの。」

「い、ぢやないの。先生が折角す、めて下さるものを、お断りしちや却つて失禮に當るわ。お家へ歸つてお母様によく御相談してみても、それからお定めなさい。」

「さう致しませう。浦田さんもお家へいつて御相談遊ばしてからに遊ばすつて云ふから私もさう御返事しときましたの。浦田さんてほんとにい、方ね。私大好きですのよ。」

浦田と云ふのは名を葉子といつて、四谷のさる病院長の愛嬢なのである。學校も同じ級で、この仲のい、二人の友達は學校が退けてからも琴の先生の家で落合ふのをこの上もな、い樂しみにしてゐるのである。そのお琴の先生はもと學校の方へも出てゐた人で、今度日本音樂の代りにピアノやヴァイオリンが置かれるやうになつてからは、もとの生徒達に出稽古をしてやつたり、家へ弟子を入れたりして、安らかなその日を送つてゐる品のい、未亡人なのであつた。家も間宮の屋敷から五六町のところにあつて、その人の亡き良人は内務省の事務官をしてゐた人とのみ聞いてゐる。

お糸は漸次と邸へ近くなつて來たので、少しづつ、足を早めながら歩いてゐたが、角を曲

るときにふと立止まつて、空を仰ぎながら、

「あら、お嬢様。雪が降つて参りました御座いますよ。ほら御覽遊ばせ。あんなに白いものが、……」と、手をひろけたま、吃驚したやうにいつた。

「え、雪？」と、いつて、歌子も八重子も思はず顔を振りあげたが、とみると、眞闇に曇つた大空からはいつの間にか切斑のやうな大きな雪がちらり／＼と降つてゐる。吹く風に漂はされてその雪片はまるで鵝毛のやうになつて、薄闇のなかを彼方此方へさまよひ歩いてゆく。

「まあ、ほんとに降つて來ましたわねえ。これぢやまた今夜きつと積もりますわねえ。」歌子は嬉しさにいつて、急に寒さうに肩をすぼめながら「ねえ、八重子さん。急いで歸りませうよ。又母様が心配していらつしやるといけないから。」

三人は一層冴えた下駄の音を屋敷町の靜かな夜にひゞかせながらわが家へと急いでいつたが、もう邸の煉瓦塀がみえる處までやつて來ると、ふと今度は降る雪の彼方から寒さうな、いたいけな物賣りの聲が流れてくるのが耳にとまつた。

「辻占、つじうら。花の便り、つじうら。」

その聲にはまだ商賣に馴れぬ子の悲しさうな調子があつて、「つじうら」と云ふ言葉が妙におどくした響を傳へて来る。

「おや、又あの辻占賣りが参りましたよ。お嬢様。今夜はようく御覽遊ばしませ。それはほんとに可愛らしい子で御座いますよ。」お糸はその聲を聞きつけると、一寸立止つて向角の方をみながらいつた。

「あ、この頃毎晩来るあの辻占賣りなの？」歌子はさういひながら、ついこの頃になつて毎晩のやうに邸の外を流れてゆく憐れな辻占賣りの聲を思ひ出しながら、同じく立止まつたが、その時向邸の塀の蔭からふいに小さな提灯の影が紅黄く闇にじみついてまるで零落はてた魂が闇夜をもとめてさまよひ歩くやうにふらくくと現はれて来た。降る雪はほの白く四邊に流れて、その提灯の火はともすると消えさうにはためく。

漸次と傍へ近寄つて来るのを見ると、それはまだやつと十二か十三の男の子だつた。何人の遺子か、身には久留米餅の薄い袴をきて、小學生のやうにきちんと袴を着けて、微

章のない大黒帽子をさも人目を恥ぢるやうに眼深に被ぶつてゐる。提灯の火で透かしてみると、丸顔の眼鼻だちのと、のつた見るから品のい、顔で、人がゐるのに氣付くと、さも恥かしさうに道を避けながら賣り聲もいつの間にか細々と言葉尻を消してしまふ。

歌子はその様子をちつと見てゐるが、

「まあ、この寒いのに可哀さうに。」と、呟いて、やがてお糸の方を振顧りながら、「ねえ、糸。お前あの子にさう云つて、辻占を買つて上げるからつて家へ連れて来てお呉れ。この寒いにあんな拾一枚で可哀想だわ。」さういふ言葉は持ち前の思ひやりに濕んでゐた。

歌子はさういひ置くとすぐさま八重子を促がしてわが家の大きな鐵門を入つて行つた。

そして内玄関から長廊下を奥まつた母様のお居間へ駈けて行つてその障子を開けると、

「母様。唯今。あの今可哀想な子が家へ來てゐますから、母様何か上げて下さいましな。

そりや可愛らしい辻占賣りなの。」

母様はその時明るい電燈の下へお机を持つて行つて、手紙を書いてゐられたが、餘り突如なので、

「なんですわねえ、足元から鳥が立つやうに。」と云つて、歌子達の方を振顧りながら笑はれた。そして此頃毎晩来る辻占賣りだと聞かれると、急に起ち上つて、歌子達の後からすぐさま臺所の方へ出て來られた。

廣い臺所の上口のところには辻占賣りの子がお糸に連れられて、雪に塗れた肩を寒さうにすくめながら、しよんぼり俯向いて立つてゐた。思ひがけない大家へ呼び込まれたので、彼はおどろしなからどうなることかと慄へてゐるのであつた。

母様はちつとその子の顔をみてるらしつたが、やがて聲をうるませて、

「さ、お前そこへ腰をおかけ。辻占でも何でも買つてあけるから。」

と、いつて、いひ遊るやうに、

「お前家は何處なの？」

辻占賣りの子は少時の間返事をしかねて黙つてゐたが、やがて細い聲で、

「僕は芝の愛宕下です。」

と、呟いた。

「芝？ 遠い處から來るんだねえ。そして家にはお父さんもお母さんもゐるの？」

「い、え、お父さんは戦争で死んぢまつたんです。母さんはゐるけれど、病氣で働けないの、……」

と、いひながらその子は何故か急に涙聲になつた。そして聲をときらせながら鼻をす、つてゐるが、やがてつと筒袖で顔を掩つて、

「お婆さん。母さんはもう近いうちに死んでしまふんです。僕、學校もなにもよしてしまつて、新聞の夕刊を賣つてゐただけど、他の子達がいぢめるから、お隣りのおぢさんに頼んで辻占を賣らして貰つてゐるんです。……僕は學校へいきたいんだけど、母さんが病氣で行かれないんです。……」

憐れな泣聲はやがて筒袖を洩れて悲しげに聞えてくる。

漸次宥め憐れして聞いてみるとそれは世にも憐れな軍人の遺子なのであつた。雪の降る夜に、こんな商賣にもならぬ人氣のない屋敷町をばさまよひ歩く子のいたいけさ。これも人の子樹拾ひの類に洩れず氏も素性も揃つた家に生れた身を世の悲運の波に揉まれもまる

る悲しい身の上なのであつた。

二

戸外では切斑のやうな雪がちらり／＼と降りしきる晩、間宮家の大臺所で、憐な辻占賣の子が泣いて語つた身の上語りは、聞く人の心に口には云ひ盡くせぬ深い／＼悲しみを與へた。何が悲しいといつて、世の中に零落れてゆく人の身ほど悲しいものは又とあるまい。世の辛酸を嘗めつくした人ならばいざ知らず、年端もゆかないたいけざかりの子が、何にも知らずに唯浮世のさがをば嘆き訴へるほど眞實な聲は又とあるまい。それを聞いて涙ぐまぬものは、それこそ人間の姿に生れて人間の心を持たぬ憎むべき人なのである。辻占賣の子が涙ながらに語つたところはかうである。

その子の名は須藤松雄といつて、年はとつて十三であつた。父は須藤大尉といつて、今はもう昔語りとなつた日露戦争の折、旅順の要塞で「鬼大尉」といふ綽名まで取つて到頭

二龍山の砲臺が陥落する間際に、敢なく敵弾に胸を貫かれて戦歿した人なのであつた。その當時の新聞や戦争實記はいづれも筆を揃へて大尉の諱名を傳へ、論功行賞の時には大尉としては破格の高勲を授けられたほどの人であつた。假にも軍人として國家に大功のあつた人、その遺子がどうして辻占賣にまで零落れ果てなければならなかつたか、そこにいふにははれぬ浮世の辛酸があつたのである。

須藤大尉には松雄の外に二人の子があつた。一人は松雄には姉に當る藤子、もう一人は松雄の弟の俊雄であつた。無論大尉ぐらゐの位置では贅澤な生活の出来る譯はなかつたがそれでも大尉はそんな勇猛な人にも似ず、家にある時には實に柔和な、子煩悩ない、お父さんだつたので、三人の子達はいづれも荒い風にも當てられず、まるで厚い壁に圍まれた室咲きの花のやうに、何とつ不自由もなくはぐくみ育てられたのであつた。

その時分家は赤坂の聯隊のすぐ近くにあつて、そこらは靜かな屋敷町なので、彼等は近邊のいゝ家の子達と一緒に學校へ通つた、庭も割りに広い芝庭だつたので、そこへぶらんこをつくつて貰つたり、戦ごつこをする廣場を作つて貰つたりした。そして學校から歸つ

て来ると、近まはりの友達を集めて、松雄はまだ足もとさへ定まらぬ弟の俊雄と一緒に
つて毎日々々日の暮れるのも忘れて遊び暮らした。

姉の藤子は松雄よりも二つ年上で、溫和しい、實に品のいいお嬢さんだつた。たつた一人の娘なのでお父さんは分けてもこの藤子を可愛がられ、色白のぼつちやりとした美しいその顔は近邊でも須藤さんのお嬢さんといつて評判だつた。大尉が戦死したのは丁度松雄が九歳の冬だつた。勇ましい功名を樹て、戦場の露と消えたのであつてみれば、軍人としては本分を盡くしたものであつて、決して泣いたり悲しんだりする女々しい別れではなかつたが、それでもあの懐しいお父様は見も知らぬ遠い異國で曉の霜とともに敢なくこの世を去つておしまひなすつたのかと思ふと、御遺骨の着いた日などには誰も涙の乾く隙もなかつたのであつた。そしてその後、母なる大尉夫人の唯一つの慰めは後に残つたその三人の遺子で、その成人の日を樂しみに、家も郊外のこぢんまりした家へ引移つて、質素な生活を営みながら三人の子の教育に寢食を忘れてゐたのであつた。無論軍人のこととして財産などは少しもなかつたが、それでも戦功によつて政府から下賜されるいろ／＼な賜金は

一家の生活向きには有り餘るほどであつた。そのおかげで彼等は父親の生前と少しも變らぬ不自由のないその日々を送つて、日に月に彼等を立派に育つていつたのであつた。

その儘で今まで續いてくれれば、今日今夜松雄が薄暗い提灯をさけて雪の巷に辻占を賣つて歩く必要はなかつたのである。今夜あたりは明るい電燈の下で、姉弟机を並べて學校の復習をしたり、又家族合せに夜の更けるのも忘れたりすることが出来たのである。併し意地の悪い運命の神は決してこの美しい家族に幸ひばかりを下さなかつた。

松雄にはたつたひとりの父方の伯父があつた。親類といつては天にも地にもこの人ひとりで、母は大尉の死後この人にばかり頼つてゐた。伯父は松雄のお父さんと違つて、横濱で相當な貿易商を営んでゐた。戦後商業が賑やかになるにつれ、伯父さんも随分派手に仕事をしてゐたが、ふとしたことから不正な營業の内幕が露顯して、伯父さんはそれほど手廣くやつてゐた商賣をすつかり止めてしまはなければならぬやうな事になつてしまつた。

根が大尉と違つて心の悪い伯父さんのこととして自分の方が落ちめになると、今度は松雄

の家へ喰ひついて来た。人のい、母親は初めのうちはちつとも伯父さんが悪いことをしようとは思はないので、松雄の父に對するやうにそれはく親切に世話をした。誰れしも身の落ちめになるときは、唯一本の薬屑にでもすがり度いが世のならひ、それを考へると母親は心から氣の毒になつて自分で出来るだけのことはして伯父を助けた。

それがいつの間にか仇になつて身に報つてきた。人情も恩義も知らない獸のやうな伯父は僅かの月日の間に松雄の家を散々にしてしまつた。つまり生活の費用になるものはすつかり母親を欺いて自分の懐へ入れてしまふ。大尉が愛國の血を以つて購つた名譽の品までも滅茶々々にしてしまつて、母親がどうにかしなければと思ひついた時にはもう一家は離散しなければならぬやうな目に逢はされてゐた。その間のことは詳しく書くには餘りに悲惨で、さすがに羞恥が來て私の筆から力を奪つてしまふ。

兎に角そんなこんなで、僅か二年ばかりの間に松雄の家は見る影もなく淪落してしまつた。もう今迄の家にもゐられなくなつたので、一家は此處彼處と萍のやうに移り歩いた。そして到頭落着いたのが今の愛宕下の家である。そこは今迄の家と違つて、三間にも足ら

ぬ棟割長屋であつた。

母親は人のい、人ではあつたが、移り變る境遇のために氣丈になつて、その棟割長屋でお針をしたり内職をしたりして、一生懸命になつて松雄達を學校へやつてくれた、そのうちに不幸はそれだけで済まないで、運命の悪魔はこの一家の人達の骨の髄までも貪り喰らはうとするのか、その貧苦の中で、昔から脾弱かつた松雄の弟の俊雄はその頃流行つた悪い病氣に冒されて突然死んでしまふ。そればかりか姉の藤子も同じ病で散々母親を苦しめた揚句、それが癒つて外出が出来るやうになると、或日のことまるで神隠しにでも逢つたやうにふつと何處かへ姿を消してしまつた。芝公園の中を白髮の老爺と一緒に歩いてゐたとか、四十格好の洋服を着た男に連れられていつたとか、噂は噂を生んでまるで取留めがなかつたが、警察へも頼み、手を廻すところへは残らず廻してみたにも拘らず、藤子の行方は到頭分らなかつた。警察では餘程性の悪い人買ひの手にさらはれて行つたのだらうと云つて、横濱から神戸、神戸から上海、香港の方まで搜索の手を延ばしてくれたが、今に何のたよりもないのであつた。

*I am sure that chat
that you gentlemen*

愛子を失ひ、そのうへ藤子にまで思ひがけない恐ろしい生別れをした母親は積もる悲歎でそれから間もなくどつと病の床に就いてしまった。しかし寢てはるても何か生活のたつきになるやうな事をしなければ跡に残つた母子はその日の食にも困るので、氣丈な母は病を推して、矢張り針仕事や内職をしつゝけた。それがひどく體に障つて、母は日にく瘦せ衰へ、醫藥のたつきも思ふに任せないので、到頭今日此頃はもう再生の見込みがないまでの危篤に陥つてしまつたのであつた。

松雄は學校もなにも止してしまつて、櫻田本郷町の辻に立つて夕刊を賣つたり、かうして霜降ゆるこの頃の夜に辻占を賣つて歩いたりしながら辛うじて母子ふたりの露のいのちを繋いでゐるのであつた。

そこまで聞くと、間宮家の夫人も、歌子も、八重子も、立聞きしてゐた女中達も皆泣いた。たどくしい言葉でとぎれくりに語るその憐れな物語は眞實聞く人の腸を煮くつた。母様はそつと手巾で眼を拭きながら、

「ほんとに可哀想にねえ、それであんたの姉さんのその藤子さんとか云ふ娘さんはどうしたの、まだ何處にゐるとも分らないの？」と低い聲で訊かれた。

辻占賣りの子はそれを聞くと、大きな、賢さうな眼から又ぼろ／＼涙をこぼして、
「僕、姉さんに逢ひ度くて耐らないんですけれど、どうしても居る處が分らないんです。母さんも死ぬ前にどうかして一眼でもい、から姉さんに逢ひたいつて毎日々々泣いてゐるんですけど、姉さんは歸つて来てくれないんです。今頃は何處で何をしてゐらつしやるんだか。……人の噂に聞くと人買ひの手から支那人に賣られて生贖を取られてしまつたんぢやないかと云ひますけれど、もしそんなとで死んでゐるんだつたら僕どうしませう。あ、逢ひ度い。母さんが死んでしまへば僕たつたひとりぼつちになつてしまふんだ。……あ、姉さんに逢ひ度い。」

「もうそんなことを云ふのはおよしなさい。姉さんはきつと歸つて來ます。」母様は耐らなくなつて手巾で顔を掩ひながら聲を呑んで頻りに泣かれた。歌子達には兄に當る正雄を失はれた經驗のある母様はまたその時の悲しさを思ひだして、しかも辻占賣りの袴をはいた格好と云ひ、顔つきと云ひ、丁度亡き正雄を偲ばせる面影があつたのでその悲しみは一層

深くなつていくのであつた。

臺所の柱時計が寢呆けたやうな聲で九時を打つのを聞くと、辻占賣の子は、はつとしたやうにゐすまひをなほして、

「僕もう歸ります。早く商賣をしまつて家へ歸らないと、母さんがたつたひとり寂しがつてゐますから……。」と、云つて、辻占を入れた小箱を心細さうに見ながら起ち上つた。母様はそれを呼び留めて、お金やお菓子を澤山に下すつて、

「さ、これの上けますから、今夜はもうこの徳村さんの傍へお歸んなさい。こんなに雪が降るのに戸外を歩いてゐると又あんたまでが病氣になる。」

辻占賣はこんな物に物を頂いてはと云ふやうにきよとりとしてゐたが、やがてそれでも嬉しさうに帽子をとつて幾度か禮を云ひながらそのまゝ、間宮家へ別れを告げて臺所口から暗い戸外の暗闇へ出ていつた。戸外ではいつの間にかもう大地の面にも、が、白に積もつて、小粒になつた雪は續のやうになつてさつくと横様に吹雪いてゆく。

紅黄い提灯はその雪のなかをとぼくと歩いていつた。その影が門の彼方へ消えるとや

がて、

「つじうら、辻占、花の便り、辻占。」と云ふ寂しい聲が遠くきれぐりに聞えて來た。

三

楽しいお正月はまるで夢のやうに過ぎ去つてしまつて、寒い霜枯の二月ももうそろ／＼、百花の芽ぐむ春の方へ浮き足に通り過ぎて行かうと云ふ頃である。辻占賣りの須藤松雄は師走以來、麴町の間宮家の知遇を得て、夜毎日毎にその邸へ出入りを請されてゐたが、それが或晩からどうしたものかふつと姿を見せなくなつて、それから後は長い間、影も形もみえなくなつてしまつたのであつた。

間宮家ではいつとなくそれが噂になつて、誰も彼も松雄の安否を氣遣つた。なかでも人一倍情の深い歌子は晩になると、いつも凍えたやうな夜寒のなかを、

「花の便り、辻占。」といふ聲が湧きあがるやうに聞えて來るのをさも待ちあぐねてゐるや

うな顔をしながら、

「ねえ、母様。ほんとにあの辻占賣りの子はどうしたんでございませうねえ。来なくなつてからもう七日ほどになりますわねえ。」などと云つて母様に迫るのであつた。

母様もそれを氣に懸けてゐられるので、

「さうねえ、どうしたんでせう。ひよつとしたらお母さんが死にでもしたんぢやないだらうかねえ。此の間来た時にも大分悪いやうなことを云つてゐたから。」

「もしさうとすれば可哀想ですわねえ。今頃は食べるものもなくなつて、さぞ困つてゐることとせう。居どころさへ分れば、ほんとにどうかして助けて遣り度いもんで御座いますわ。」

「ほんとにねえ。あの子もお母さんに死なれてしまへば、それこそ孤兒になつて、路頭に迷はなければならぬんだからねえ。」

さうした會話は日に幾度となく繰返されるのであつた。

或日のこと、歌子と八重子は學校から歸つて來るとその日も辻占賣りの子のことを話ひ

出しながらお琴の復習をやつてゐるが、そこへ小間使の初やが慌たゞしく駆け込んで來て、「お嬢様。あの辻占賣りの子のごことが新聞に出てゐるさうでございますよ。今女關の村瀬さんがその新聞を持つて來てくれましたから。」といつて、歌子の手へ一葉の新聞紙を渡した。

歌子は琴爪をとりながら大急ぎでそれを讀んでみた。その記事は丁度三面の下のところに出てゐて、「憐れな孤兒」と云ふ標題がついてゐた。漸次と行から行へ眼へ動かしてゆくうちに、歌子の顔は悲しげにひきしまつて來て、やがて

「まあ、ほんとに可哀想な兒ねえ」と、聲を慄はしながら呟いて、その儘顔を掩つてしまつた。それを見た八重子は

「姉様、あの子がどうかしましたの？　どうか私にも聞かして下さいませう。」といつて、姉の方へ摺り寄つて行つた。

歌子はやがて今新聞で讀んだところをときれときれに話した。涙に濕る物語は新聞の記事を通じて、今死にまさる悲境に沈淪してゐる憐れな辻占賣りの兒の姿をば二人の眼

の前に髣髴させたのであつた。

間宮家の人々がそれとなく想像してゐたとほり松雄の母親は積る辛苦と、養生さへ叶はぬ長病ひのために到頭四五日前に敢なく此の世を去つてしまつたのであつた。あとには松雄たつたひとり。今までは親切に世話をしてくれた近隣の人達も、いづれは同じ明日の日にも追はれる貧乏人ばかりなので、葬式などは見る蔭もない姿で執行はれ、これがあの鬼大尉の未亡人を葬る葬式かと思ふ人は誰ひとり袂を絞らぬ者はなかつた。

母に死なれた後は身寄りの者と云つてはあの心の悪い伯父ばかり、それも今では横濱邊にゐると聞くのみで住所さへ分らないので、松雄はその筋の手で養育院へ送られることになつたが、彼はどうしてもそれを承知しないで、假令乞食をしても姉の藤子の行方を探し出すといつて聞かなかつた。そして一昨日の晩、こつそり保護の手をぬけだして、何處へと云ふ當てもなく町へ出たが、そのうちに寒氣と空腹のために一步も歩けなくなつて、街頭霜降ゆる街路の面に俯伏せに打倒れてしまつた。そしてもう二時間も遅れて発見されたら或は凍死してゐたかも知れないのを、折よく巡回の警官が通り合はせたので、彼はその

手に救はれ、今芝の警察署で保護を加へられてゐる最中だと云ふ。一時は鬼大尉と唄はれて三つ子の口にまでその名を知られた勇士の遺子が、時運とは云へ、かくまで悲惨な境遇に落ちてゆかなければならないのは社會の罪であらうか。はた又人道の罪であらうか。世の志士仁人はどうか、この憐れな孤兒に對して充分の同情と憐愍とを垂れたまはんことを祈るといふ記者の希望がその記事のあとに書き添へてあつた。

歌子と八重子は二人で相談をきめた上、兎に角その新聞を持つて母様のお居間へ行つた。その日は父様も家にゐられて、丁度その時母様のお居間で二人して何かお話しをしてゐらつしやつた。母様は歌子の手から新聞を取つて御覽になると、忽ち顔色をお變になつて、「まあ、可哀想に、私もこんなことになつてゐるんぢやないかしらとは思つたが……」と云はれてはらくと涙を流された。

いろく父様とお話しをなすつた末、書生の村瀬は時を移さず警察署へお使に立つことになつた。どうせ末は養育院なぞへ入れられて、これから先どう發育していくか知れない才能をばあたら社會のどん底に埋めてしまふのが惜しさに、もし警察で許してさへく

れるならば間宮家では彼の松雄を引取つて、自分の家の子同様に充分教育も施し、修養もさせて他日は立派な人物として社會に立たせ度い希望なのであつた。間宮家の人達はあの温なしい、可愛い、そして賢さうな松雄にそれほどの望みをつないでゐたのであつた。

警察へ行つた村瀬はもう夜になつてから、紺飛白の垢じみた袷一枚でぶる／＼ふるへてゐる松雄に自分のマントを着せてやつと連れて歸つて來た。聞けばなんでも今朝の新聞を讀んで、二人も三人も彼を世話しようといふ人が警察へ申出てるたので、それで暇どつたのだと云ふ。

警察でも選擇に困つてゐたのを村瀬は前々からの關係を話して、しかも間宮家の位置としてかう云ふ善事をするのは、社會に對しても決して無意味なことではないと云ひ張つて到頭署長をうけがはせてしまつたのだと云ふ。

松雄は間宮家へ連れて來られるとすぐ湯も使はせられる。温かい着物も着せられる、そしておいしい御飯も食べさせられて、少し氣が落着いて來るとやがて皆さんの集まつてゐられる茶の間へ呼び出された。明るい電燈は煌々と輝いて、二箇所に置いた大火鉢の炭火

は程よい温氣を室内に漲らせてゐる。そこでお茶が出て、極めてしんみりした家庭的の團樂のなかで、貧苦に襲れた松雄は皆さんから涙の滲むやうな親切なお言葉を頂いた。

父様はいつものおつとりとした口調でまづ口をお切りになつて、

「人間といふものは決して眼の前のことばかり當てにしてゐては可けない。今悲しいことが身に振懸つてゐるからといつて、もう將來のことをすべて絶望してしまふやうなそんな弱い心では到底駄目ぢや。殊にお前などは鬼大尉とも呼ばれたあの立派な、人格の高いお父様を持つてゐるんぢやから、此際餘程奮發して一生の志を立て、もう一度立派に須藤の家名を起す覺悟をきめてくれなければ可かんど。それには何を云うても意志を固くして、一生懸命に勉強しなくつちや可かん。私は今日からお前を自分の子と思つて、出来るだけのことばしてやる。今日の苦しさが他日どんな大きなものになつて返つて來るか知れないのだ。歴史上の英雄豪傑を見れば分る。大方の人は貧乏人の家に生れて、苦勞に苦勞を重ねて育つた人物だ。」

母様はその言葉のあとについて、

「ほんとに旦那様もあ、仰しやつて下さるんだから、お前も今日からこの家の子になつたと思つて、一生懸命に勉強してくれなくつちや可けませんよ。どんな貧民窟で育つても心の清いのが何よりなんだから、そればかりは決して忘れないやうにね。」

さうした言葉が親のない松雄には聳々と胸にしみるのか、彼は疊のうへにしつかりと両手をついたつきりしく泣いてゐた。食ふや食はずで過ぎたこの四五日の勞苦はその頬にも、眼にも現はれて、じつとしてゐても慄へる肩先が何ともいへずいぢらしかつた。彼は涙の隙にやつと言葉を正して、

「どうも皆様、御親切に有難うございます。御恩は決して忘れません。」といつたが、新しい涙は又すぐにその言葉を奪つてしまふ。そして彼はさんざ泣いた揚句、

「ですけれども僕はどうかして姉様に逢ひ度いんです。此間の晩も僕姉様の夢をみましたから、姉様はきつとまだ生きてゐて、この日本の何處かにゐらつしやるに違ひないんです。あ、どうかしてたつたひと眼でい、から逢ひたい。姉様に逢ひたい。」といつて、そのまゝ、そこへ泣き倒れてしまつた。

一座の人々は誰も彼も涙を呑みながら黙つてそのさまをみてゐた。

縁あつて情厚い間宮家に救はれた憐れな孤兒の松雄はこれから先どう云ふ運命を迎へることであらうか、幼くして何者かの手に誘拐された姉の藤子、心の黒い伯父、そんなものがこの間宮家を中心にしてどんな悲しい、恐ろしい波瀾を巻き起こすことであらうか、露の命の一篇はこれからが本筋に入るのである。

四

二年の歲月は流れるやうに過ぎ去つていつた。

十四歳で間宮家に救はれた松雄は、一つく年をとつて、丁度その年には男一人前の資格の出来る十六の春を迎へた。救はれて後は書生ともつかず、家のものともつかぬ親しい待遇を受けて、彼は中學校程度の夜學へも通はせられ、ば、又衣類から日用品のやうなものまで一切間宮家からとりまかなつて貰つた。彼はその恩義を心の底から感じて身を粉にし

ても間宮の家のためなら一生懸命になつて働いた。そして隙々には勉強の方も怠らなかつたので、天性伶俐な彼は學校でも抜群の成績を得てゐた。年をとるにつけ亡なつた親達のこととも思ひ出されて、どうかして再び須藤の家を起さうと思ふ心が彼の胸に堅い決心を極めさせたのであつた。

頃は丁度四月の半ば過ぎ、静かな屋敷町にも慌たしい春がそろそろ去り際になつて、間宮の邸でも奥庭に植ゑられた三本の八重櫻が年を経たその枝々に眼のさめるやうな美しい花を咲かせて、宵々ごとに薄月の光を宿しながら雪とも紛ふ落花の風情を添へる頃であつた。常は何事もない間宮の家では或日突然一大事が起つた。

それは外でもない、主人の間宮仙造が會社の用で俄かに支那から印度を経て、遠く歐羅巴の方まで旅立つことになつたのであつた。社用で大阪や長崎邊までは年に一度ぐらゐる向くこともあつたが、往復約半歳に亙るやうな大旅行はまだ一度もしたことがないので、家の人達は上を下へかへして大騒ぎをした。親戚のものばかり集まつて心ばかりの別宴を張つた晩などは、お母様はじめ歌子や八重子に至るまで妙に涙に打濕めつて、生別れでも

するやうにお父様の袂に縋つて心細がつた。

四月の二十一日には支度も愈々整つて、お父様は到頭長い旅路に出られることになつた。家の人達は誰れも彼れも打揃つて横濱の波止場まで見送ることになつたので、會社の事務員たちが来て荷物の手配りなどをすつかり済ませてしまふと、松雄も木綿の紋付に小倉袴をきちんとはいて、皆さんのお伴をして横濱へ行つた。

松雄はその年になるまで、唯一度も横濱といふ處を見たことがないので、その町へ着くと見るものが皆珍らしかつた。停車場から車で波止場へ行くまで彼はまるで別な世界へ来たやうにきよろしく四邊を見廻はしてゐたが、ふとそこに住んでゐるといふ伯父のことを思ひだすと何んだか急に心が寒くなつて來た。あ、あの伯父は今何をしてゐるだらう、何處でどうして暮らしてゐることだらう。心の悪い人ではあつたが、もう肉親のものといつては誰れひとり残つてゐない今の身には、何かしら懐かしいやうな氣もする。逢へば恐ろしいとは思ふであらうが、かうして考へてみると何だか逢つてみたいやうな氣も湧いて來る。そんなことを思ふと、松雄にはまだ夢寐にも忘れ得ぬ亡き母の面影や姉の藤子の姿

が髣髴として眼の前に浮きあがつて来るのであつた。

波止場には数多い見送りの人々がもう眞黒に寄り集まつて間宮の主人の来るのを待つてゐた。主人は「いづくそれ等の人に挨拶をして『どうか御無事で。』とか『御機嫌よう。』とか云ふ言葉に送られながら高い橋を渡つて、波止場に横づけになつた巨大な汽船の甲板へ乗り移つた。そして見送り人のなかの重だつた人達と一緒に歌子や八重子達まで連れてそのまゝサルンの方へ入つてゆかれた。

松雄はたつたひとり群を離れて船尾の方の甲板へいつて、その冷たい欄干に身を寄せながら遠い海の彼方を打眺めてゐた。そこには聲のやうに静まり返つた海の面に巨大な汽船が眞黒な煤烟を空に吹きなびけながら船艙となく碇泊してゐる。遠い歐羅巴の空へいくものもあれば又近海を巡航して歩くものもあるであらう。いづれも海の王のやうな勇ましい姿をして傲然と海面を壓してゐる。そして大空は心ゆくまで美しく晴れ渡つて、輝かしい日の光が今日の門出を祝ふやうに明るい光の縞を海上に縋々とふりこぼしてゐた。

振かへつて波止場の上をみるとそこには幾百人とない人の群が蟻のやうに集まつて、い

づれも此の船に乗つて遠い異國へ旅立つてゆく人達を見送るのであらう。顔だけが白く此方を振仰いでゐる。そしてその間で荷揚人夫が鈍い唄聲をたてながらトロを押したり、起重機を巻いたりしてゐる。そしてはるかに見える横濱の町々の煙は霧のやうな春霞に煙つて、さも旅にゆく人に別れを惜しませるやうに、のんびりと我れ知らぬ顔にまどろんでゐる。

松雄の小さなその胸にはその時將來のことがそれとなく映つて来た。あ、どうかして一日も早く成業して自分もこんな澤山な人々に見送られながら西洋へ行けるやうになりた。西洋へ行つて歸つて来る時には更に澤山な人々に迎へられて、須藤松雄といふ名が天下に聞えるやうな人物になりたい。亡き父様や母様はきつと僕を守つてゐて下さるに相違ない。な、さう思ふと彼の眼には一杯に涙が溢れて来た。

その時すぐ彼の後で靴音がして、突如誰か、軽く肩を叩いたかと思ふと、

「おい、松雄。お前は何をしてゐる。もう船が出るぞ。」と云ふ聲がする。

吃驚して振かへるとそこには間宮の主人が四五人の年輩の方々と一緒に立つてゐて、そ

向いも一りす
時刻より

の周囲には船の人達らしい制服の男が忙がしさうな顔をして佇んでゐる。

主人は又言葉をついで、

「では、松雄。お前とも當分の別れた。お前ももう十六になつたんだから、俺が留守になつても、どうか家の方のことは出来るだけ世話をしつてやつてくれ。あとは女ばかりでさぞ寂しからうから、お前がしつかりしててくれんけりや困るぞ。そしてお前も體を丈夫にして、精々勉強して、俺が歸つて来るまでには立派な成績をあけるやうにしてくれんぞ。可

と、まるで慈父が子供にさとすやうな調子で言つた。

松雄は低く頭を下けて、

「畏まりました。どうか御機嫌よう。」

と、口のなかで云つたきり、あとは云ひ甲斐のない涙に暮れてしまつた。

もう出帆時間になつたので、甲板にゐた人達は順々に波止場の方へ下りてゆく。松雄も皆さんの後について、盡きぬ名残を惜しみながら波止場へ下りたが、それから間もなく出

船の號笛が鳴りだした。それと一緒に錨は凄じい音をたて、巻き上げられ、方々に引纏つてあつたロープはすつかり取外されて、やがて消魂しいサイレンの聲とともに巨大な汽船は船腹を細かく打慄はせながら徐々に波止場を離れていつた。

「左様なら。」

「御機嫌よう。」

などと云ふ別れの言葉は嘔り泣きの聲に纏れて、しばしの間は、岸と船との間に手巾がひらひらと振り交はされたが、それも漸次と遠ざかつて、いつしか甲板に立つ人影も豆のやうに小さくなつてゆく。松雄はその時、欄干に倚つて頻りに手巾を振つてゐられた主人の姿をいつまでもく忘れることが出来なかつた。

皆は船の姿が防波堤の彼方へ遠ざかつてしまふまでじつと見送つてゐたが、その中に世話役の人達にせかれて到頭沖台はるかに消え去つてゆかうとするその船をあとに見捨て、しまつた。——名残のつきぬ別離、一度海の彼方に去つた主人がこれからさき運命の悪魔に呪はれてどんな悲しい目に逢はれるか、或はこれが永久の別離にならうとも知れぬその

恐ろしい行末をば、その時には誰ひとりとして知るものはなかつたのであつた。

歸りには矢張り見送りの人達と一緒に間宮家の人々は横濱驛から汽車に乗つた。松雄は歌子や八重子たちと一緒に一等室へ乗つてゐたが、彼はまだ別れていつた主人の姿が眼先へちらつくやうなので、自分ひとり少し離れて車窓から混雑したプラットホームの光景をぼんやり眺めてゐたが、發車間際になつて彼はふと何物かに驚かされたやうに悸乎として思はず座席から立ち上つた。

丁度その時何處から入つて來たのか一列車が向側のプラットホームへ來て停車したが、横濱、横濱といふ驛員の呼び聲とともに開かれる扉口々々から溢れるやうに降車する客のなかに松雄はひとりの不思議な人の姿をみたのであつた。それは四十格好のむさくるしい風姿をした男で、前さがりになつた中折帽をかぶつて、片手には何をいれたのか小さなメリンスの風呂敷包みをさけてゐる。見覚えのある顔と思つたのはほんの一瞬間のことで、次の瞬間にはそれが別れて程經たあの伯父であることがはつきりと分つた。

伯父の方でも松雄がぢつと見てゐるのに氣がついたか、怪訝さうに、じろじろ此方をみ

ながら歩いていつたが、やがて吃驚したやうに大きな眼を睜つて、突如彼の乗つた列車の方へ寄つて來ながら、

『お、松雄ぢやないか。』

と、少し慄へを帯びた聲で叫んだ。

松雄も我慢が出来なくなつて、四邊を憚りながら、

『伯父さん！』と、叫んだ。

『お、松雄だ、たしかにお前だつたな。』

と、伯父は見知らぬ様に云つて、慌たしい調子で、

『お前は何處にゐるんだ。お母様はどうした。』

松雄はそれを聞くと云ひ甲斐もなく涙ぐんで、

『お母様はあの、母様は死にました……。』

『なに死んだ！』

伯父の顔はみる／＼眞蒼になつていつた。そして穴のあくほどきつと松雄の顔をみつめ

てゐるが、やがて崩れるやうに、

「あ、到頭亡られてしまつたか。私はちつとも知らなかつた。いつ亡られたんだね。」

「あの、一昨年の二月です。もう二年になります。」

「一昨年？　そしてお前は今どうしてゐる？」　伯父の顔には何かしら眞實らしい色が浮んで来た。

「どうしてゐるつて、僕は……。」

と、云ひかけたが松雄はそれから先言葉をつぐことが出来なくなつて、突如袖で顔を掩つてしまつた。それと一緒に遠くの方で發車の笛がなつて、一聲の汽笛と一緒に列車は何の容赦もなくごとりと動きだしてしまつた。

「松雄、松雄」と狂氣したやうに呼ぶ伯父の聲は漸次と遠くへ距たつてしまつた。

五

お父様が旅立たれてから後の間宮家には毎日々々寂しい日ばかりが続いた。朝から晩まで家中が火の消えたやうで、殊に歌子も八重子も學校へ行つてしまふ晝間のうちは、まるで空家のやうにひつそりとして、お庭に囀る小禽の聲ばかりがちよよと座敷から座敷へ響いてゆく。

そのかはり皆が學校から歸つて来て、お琴の稽古もすまして、打揃うて夕餐の膳に就く時には寂しいながら一日中で一番楽しい時がその團樂の間に過ぎられるのである。そしてその後で歌子と八重子は自分のお部屋へ歸つて、學校の方のお復習をしながら姉妹ばかりの優しい物語に耽るのであつた。

花が散つて後の木立は日に／＼緑の新芽をふいて蒸し薫るやうな強い若葉の匂ひが芝生からも花岡からも一面に湧きあがつてくる。夜はしつとりとした露とともに下界を包んで、吹く風もない静けさのなかには眺望の月が蒼白い光を雨のやうに灑いでゐる。そして石の多い池の汀にはその月の光が白菫蒲の花をまるで夜の唇のやうに蒼く／＼照らし出しているのである。

八重子は窓に倚つて星屑さへみえぬ明るい月影を仰ぎながら、

「お姉様。ほんとにい、月でございますことねえ。」と、嘆息を吐くやうな聲で云ふ。

歌子もふと教科書から目をはなしながら、

「ほんとに静かな晩ねえ、まるで水の底へ入つてゐるやうですわね。」

「お姉様。お父様は今頃何處でこの月をみてるらつしやるでせう。私それが氣になつてな
りませんわ。」

「さうねえ、私も今そんなことを考へてゐただけど、今日ありは何處でせう。歌子は心
なき月影をば妹と一緒に振り仰ぎながら云ふ。

「まだ佛蘭西へはお着き遊ばさないでせうか。」

「そりやまだですわ。お立ちになつてからやつと一月にしきやなりやしませんもの。佛蘭
西まではどんなに早い船でも四十日はかゝるつていひますから、まだお父様はきつとお船
の上ですわ。」

「まあまだお船に乗つてゐらつしやるんでせうか、さぞお寂いでせうねえ。」八重子は遠い

波濤の彼方を思ひやるやうな眼眸をしたが、やがてつと立つて書棚のなかから世界地圖を
持つて來た。彼等ふたりは殆んど毎夜のやうにそれを机の上へ持出して來てはシンガポ
ルだのボンベイだのといつては父の旅路の安否を氣遣つてゐるのであつた。

地圖の面には紅色で塗つた亞細亞と、綠色で塗つて歐羅巴とが描き出されてゐる。八重
子はアデンからずつとスエズの方まで入り込んでゐる紅海の處を指さしながら、

「今日あたりはきつと此處いらを這つておいで遊ばすんですわねえ。もうスエズをお越し
遊ばしたか知ら。」

「さあ、それは分りませんわ。ぢや松雄を呼んで來て、哩數を勘定させてみたらいい、でせ
う。ボンベイをお立ちになつた日から勘定してみたら大概分るでせう。」

八重子は立つて呼鈴を押しにいつた。と、間もなく長廊下を此方へ歩いて來る足音がし
て、入口の紙襖のところから小間使のお糸が顔を出しながら、

「お召し遊ばしましてございますか。」

歌子はそれをみると、

「あの、糸や、松雄を此處へ呼んでおくれな。一寸計算して貰はなくつちやならないものがあるから。」

「はい、畏まりました。」と、答へたかと思ふと、お糸の足音はまた静かな母家の廊下を漸次と違ひのてゆく。

やがて今度は入れ代りに久留米餅の着物に小倉袴をはいた松雄がついと入つて来て、入口のところへ手をつかへながら、

「何か御用でらつしやいますか。」と、丁寧に辭儀をする。歌子は急に笑ひを浮べて、

「松雄。あの今ね、大變な問題が起つてゐるのよ。まあ、こつちへお入り。」と云つて机の近くまで呼び寄せながら、地圖を示して、

「あの、今お父様は何處いらにらつしやるだらう、それをお前に計算して貰ひたいの。」松雄は歌子から事の入譯をきくと八重子から紙と鉛筆をかりて熱心に海の里程を勘定しはじめた。そして一時間の航程を八海里としてボンベイから計算をたて、みると丁度お父

様の乗つた船は今紅海の中程のところを駛つてゐることになる。それを聞くと二人とも安心して、

「ほんとに難う。お前は計算が上手ね。」

と云つて松雄に禮を云つた。

八重子は、お父様の在所が漸う分るとまた月を振り仰いで、

「紅海つてどんなところでせうねえ。そこでも今夜はこの月が出てゐるかしら。」

松雄はそれを引取つて、

「え、きつと出てるますとも。旦那様もお船のうへからあの月をお眺めになつて、お嬢様方のことをお思ひになつてゐらつしやいますでせう。」

「まあ、ほんとにさうだと嬉しいわねえ。あの月のなかへ字がかけたらお父様にもお見えになるわねえ。ほんとに今頃は何を遊ばしてゐらつしやるかしら。」

情の厚い歌子はさう云ひながらも目を濕ませてゐる。

松雄は俯向いて何ごとか頻りに深い思ひに暮れてゐるが、やがて何と思つたかさうした

ま、しくしく啜り泣きをしだした。はじめのうちはどうかして聲を立てまいとしてゐたが、漸次と我慢がしきれなくなつたと見え、しまひには筒袖の手を顔へ押しあて、涙を押し拭ひだした。

歌子はふとそれを見咎めて、

「あら、松雄、お前どうしたの。」と、怪訝さうに訊いた。

松雄はさう云はれると猶ほ悲しくなつたやうにしばらくの間は聲も得立てなかつたが、やがて嗚咽をくひしぱりながら、

「お嬢様、相済みません。私、お嬢様方のお話を伺つてゐましたら、つひ悲しくなつてしまひまして……。」

「何がそんなに悲しいの。何か私達が悪いことでも云つて？」

「い、え、さうぢやございません。あの私、亡つた父や母のことを思ひ出したんです。どんなに下々で育つた者でも親を思ふ心は少しも變りません。お嬢様方は御両親ともお壯健でゐらつしやるからよろしうございますけど、私にはもう両親ともないんです。」

そればかりぢやございません。たつたひとりの姉も今では生きて居りますか、死んで居りますか。……あ、それを思ふと私悲しくて耐らないんです。丁度お嬢様方がお父様をお思ひ遊ばすやうに私は今姉のことが思はれてならないんです。今頃はほんとに何處でどうして居りますことやら、いつそ死んでしまつたのならよろしうございますけど……。」

歌子は自分も貰ひ泣きをして、思ひやりの深い調子で、

「ほんとにねえ、私はいつもお前の身のうへを思ふと可哀さうでなりませんわ。姉さんはほんとに何處にゐるのだらうねえ、私達で出来ることなら一日も早く捜しだして逢はして上げたいわ。」と、云つてしくしく啜り泣きをしながら、

「でもお前が勉強して早く豪い人になればそれが一番い、わ。お前の名が世間に聞えるやうになれば、姉さんだつてきつとそれを聞きつけて逢ひに来てくれるに違ひないもの。」
松雄は自分でも餘り腑甲斐ないと思つたか、やがて涙を拭いて顔をあげた。しかし澄みまさる月の光を見るにつけ、又夜の静けさをみるにつけ、思ひ出されるのは親しい人達のことどもであつた。

そこへふいに又さつきのお糸が顔を出して、入口の紙襖の處から、

『あの須藤さん。奥様が應接室の方でお召しですよ。』
それをきくと松雄は後を振り願つて、

『さうですか。何誰かお客様ですか？』

お糸は意味ありけな顔で、

『い、え、あのなんでも貴方の伯父さまか誰か来てるらつしやるんださうですよ。私今
お茶をあけにいつたら、奥様がそんなお話をなすつてゐらつしやいました。』

『え、伯父が？』松雄はそれを聞くと飛びあがるほど驚いて、いきなり起上りざま歌子
達に挨拶をしてそわ／＼廊下の方へ出ていつた。

歌子はなんだか氣にかゝるので、それから半時ばかり経つとこつそり足音を忍んで應接
間の方へいつて見た。立聞きなどをするのは悪いとは思つたが、松雄の身が憐さに彼女は
我慢が出来なくなつて、隣りのカーテンの陰から様子を探つてゐたのであつた。

應接間のなかでは今母様と松雄と松雄の伯父とが何事か涙に打濕る物語りをしてゐる。

いつぞや横濱の停車場で逢つたその伯父の聲はまだ歌子の耳に恐ろしく響いてゐるので、
その聲を聞いたわけでもそれがその人だといふことはすぐに分つた。

伯父は思ひ入つたやうな聲で、松雄に向つて、

『全く私はお前のまへでかうして今迄の罪を詫げる。お前の話をきくと私はこの胸が張り
裂けるやうだ。あ、どうか許してくれ。今日私がかうして漸うの思ひでお前の居處を捜
しあてたのも、全く神様が私を救つて下さつたのだ……。』その聲は啜り泣くやうに低くな
つてゆく。

松雄はそれには答へずに、

『伯父様、伯父様が罪を詫びて下さるのは僕嬉しうござんすけど、あの姉様の行方を教へ
て下さらなけりや僕どうすることも出来ません。姉様は一體どこにゐらつしやるんでせ
う。』

『あ、藤子か、藤子は……。』と云つたが、それつきり伯父の聲はふつりと切れて、室
内はやがてしいんとしてしまふ。

歌子は體ぢうが耳になつたやうに一心になつてその先をきいてゐた。

六

息をもつかず立ち聞きしてゐる歌子の耳には、やがて世にも憐れな物語りのひとふしがひいて來た。松雄の伯父は過去の罪を悔いたために、今川宮家の夫人の立ち合つて下さる前で、自分の犯した罪を悉く松雄に告白してしまつたのである。語る人も聞く人もひとしく涙に咽んで、そのひそやかな聲は問うちの静けさの中へ寂しくにじみ込んでゆくのであつた。

伯父の語るところによると、これほど松雄が懐かしがつてゐる姉の藤子は伯父すらも今全くその行方を知らないのであつた。神隠しに逢つたとか、悪漢にかどわかされたとか、種々さまざま噂はたつてゐるが、伯父の告白するところで見ると、實は藤子に姿を隠させたのはこの伯父の所業であつたのであつた。度々松雄の母を苦しめたあけく、もう愈よく

自分のとるべきものもなくなつたと見据ゑると、伯父はその時、惡鬼のやうな心になつて藤子までかどわかしてしまつたのであつた。

丁度その日藤子は用があつて芝公園までいつたが伯父がとある町の角でその歸りを待ち受けてゐるとは知らず、早く家へ歸つて床のある母を慰めようと思ひながらいそぐと家路についた。伯父はそつとその跟をつけて人影の薄い通りへ來ると後からいきなり、『藤子。』と呼びとめた。

藤子は吃驚してそこへ立止まつたが、伯父の顔を見ると眞蒼になつてぶる／＼慄へだした。もうその頃には伯父が善くない人であるといふことをよく知つてゐたので、子供心にもひどく恐ろしかつたのであらう。彼女は立止まつたま、口もきかなかつた。

伯父は藤子の顔を見ると慄と馴々しい笑顔になつて、親しげにいろ／＼なことを問ひかけた。そして是非話したいことがあるからと云つて、公園のなかの樹立の影にあるベンチのところへ連れていつた。

藤子をはじめのうちは恐がつてどうしても云ふことを聞かなかつたが、そのうちに伯父

Paulo

の笑顔のやさしさでそれとなく気がゆるんだか、到頭いはれるまゝ、に樹立のなかへ入つていつた。

伯父はそこで藤子を自分の傍へ坐らせてくどくどと説いて聞かせて、扱て

「藤子、お前はお母様を可哀相とは思はないか？」と訊ねた。

その時藤子はいつとも快癒の日も分らぬ母様の病氣のために體も瘦せ細るほど心配をしてゐたので、さう云はれると急に泣きだして、

「伯父様、私もうお母様がお可哀相で耐らないんでございます。早く癒つて下さらなければ、松雄も私も御飯を頂くことも出来なくなつてしまふんです。それを思ふといつそお母様の代りに私が死んでしまひたうございます。さうすれば松雄だけでも助かつて、もし弟が立派に成人さへしてくれ、ば母様も御安心なさるでせうから……。」

そんないぢらしい言葉が伯父の胸には少しも響かなかつた。彼はかうまで藤子が苦しんでゐるのを却つてい、ことにして、

「お前がそれほどまでに母様のことを思ふんなら、どうだ、ひとつお前の體を犠牲として

母様を助けて上げては。」

と云つた。藤子はなんにも知らないので、

「私で出来ることならなんでも致しますわ。たとひ生命がなくなつても私、お母様の御病気がよくなつてくれさへすればいいんですから。」

「そりやい、心懸けた。お前がそんな親孝行な娘とは伯父さんも今迄少しも知らなかつた。それぢや伯父さんがお前にい、ことを教へてやらう。お前が一人身を犠牲にすれば、母様も助かれば松雄も助かる。人間といふものはこんな場合になつたらどうしても人の犠牲になるだけの覺悟をして置かなければならない。その犠牲になる精神といふものは又と得難い美しいものだ。お前のお父様が戦地で深い戦死をなすつたのも、もとを云へばその精神から來てゐる。國につくすのも、家に盡すのも同じことなんだ。」

さういはれると素直な藤子はすつかりその氣になつて、初めて涙を押し拭ひながら、
「でも犠牲になるつてどんなことをするんでございますの？、私のやうなものでも出来ることなんでございませうか。」

「出来るどころぢやない、さう云ふ氣さへあれば今からでも出来る。」
 伯父は藤子に力をつけるやうに云つて、到頭まだ世の中のことを知らぬ十五の娘をすっかり誘惑してしまつた。そして一度家へ歸つて母様にお断りして出て來ると云ふのを、そのまゝ引立てるやうにして、その頃伯父が住んでゐた四谷の家へ連れていつた。そしてその翌日、同じ悪いことをして歩く仲間の手で、彼女を否應なしに淺草邊の玉突場のゲー五取りの女に賣つてしまつたのであつた。

初めのうちは藤子もその職業のつらさ、苦しさに耐へられなくなつて幾度か遁げようとしたが、金で賣られた身の悲しさには、いつもきまつて其刹那になると見附けだされてしまふ。そして伯父のところへもどうか母様や弟だけには便りをすることを許してくれと云つて手紙で泣きついてはきたが、伯父はその都度、芝の家からの手紙を偽造したりして、家ではもう何もかも承知してゐる、どうかお前が一生懸命に働いてくれさへすれば母様も松雄も助かるのだからなどとい、加減な嘘を云ひこしらへて、彼女の心を釣つてゐた。藤子は思ひきつて或日のことそつと備はれた先をぬけ出して芝の家へ歸つていつたが、

その頃にはもう母様は果敢なくなられたあとで、近處の人に聞いても家が何うなつたかもまるで分らなくなつてゐた。たつたひとりの弟の松雄も何處へいつてしまつたものか、行方さへ知れない。

藤子はしよんぼり途方に暮れながら四谷の伯父へ家へ訪ねていつたが、その頃にはもう伯父すらも東京にはゐなかつたので、まるで羽がひをもがれたやうな彼女はこのひろい東京の町々を當てにもならぬ人の行方を尋ねてさまよひ歩かなければならぬ身のうへになつてゐた。家を出てから丁度三日目に仕方がなくなつてまた備主の許へ歸つて來た藤子はその日から死にまさる憂い辛い目に逢はなければならなかつた。そしてそれから二月ばかりたつと彼女はその備主にも捨てられて、何處か大阪の方のさうした家へ遷はれていつてしまつたのであつた。

伯父はそれから半年ばかりしてやつとその話を備主の口から聞いた。そんな譯で伯父も今では藤子の行方をまるで知らないのであつた。大阪へ行つたまではやつと突き止めたが、それから先、どこへどう流れていつたかまるつきり當てさへつかない。

伯父も横濱ではひどく苦勞に苦勞をした。やつぱり人の子をかどわかしたりなんかして悪いことばかりしてゐるが、丁度今年の正月になつて、ふとしたことから俄かに自分の罪を覺り、今迄の生活をふつつりと見捨て、今では全く善心に立ち歸つて耶穌教の洗禮まで受けてゐるといふ。さうなつてみると急に藤子の方が激しく身を責めて、どうにかしてその行方をさがし、今一度松雄にも逢はせて、今迄犯した數々の罪をじき松雄の父様や、母様の墓前に詫言しなければならぬと思ひだしたのであつた。

それにしても憐れな藤子は今何處の國里で、どんな月日を送つてゐることであらう。行方が知れないとなるとひとしほ懐かしさが募つて、伯父の話を聞いてゐるうちにも松雄は云ひ甲斐もない涙に打沈んでゐた。伯父はそれを見ると耐らなくなつたやうに、

『いや、お前がさう思ふのも全く無理ではない。伯父さんもどうかして捜しださうと思つて、これまでもいろいろ手を盡してみたが、矢張り駄目なのだ。幸ひ生きてゐてくれさへすりや、また逢つて詫言を云ふことも出来るが、もしも此の世にゐないものになつてゐたら、伯父さんはなんと云つて神様にお詫言をしよう。それを思ふと伯父さんは、かう

してゐるにも心が騒いでならないのだ……。』

世路の艱難に悩まされた伯父の眼にはその時血のやうな涙が流れて來た。自分の罪を知つて、それを悔悟するものには神様の祝福が必ず來る。悔悟して流す涙にはダイヤモンドよりも猶ほ尊い光があるのを松雄は初めて見た。

伯父は涙ながらに言葉をついで、

『夫人、私はほんとに今でも思ひ出します。藤子が芝公園のベンチのうへで亡くなつた母のことを云ひだして泣いたあの優しい、しほらしい姿はまだ私の眼の底に残つて居ります。しよんぼりかう俯向いて、伯父さま私はほんとにお母様が、……』と、云つたあの顔。……あ、神様。私はこの世に二人とない極悪人です。どうぞ私の罪を私の生命を以て償つて下さいまし、そして行方の知れないあの藤子の爲めに神様の恵み深い祝福を垂れ給へ！』と、云つて、伯父は額に手を當てながら狂氣のやうになつて神に祈禱を捧げはじめた。間宮の夫人も、松雄も、それから帷の蔭に隠れてゐる歌子も唯黙つて嘔り泣くばかりであつた。

日の出る國から日の沈む國まで、この八黄の宇宙をしろしめす神様は果たしてこの伯父の罪を償つて下さるであらうか。葉末に置く露にもまして果敢ない人の世の浮沈の波に押し流された藤子の運命や如何に？……

窓から見ると稍西へ傾きか、つた月影は今お庭の池水を眞面に照らしてゐる。その水の面には淡い星の影も沈んで、白菖蒲の花に映る月光の白さだけが、神の御心を示すやうに淨らかに輝いてゐる。空に照る月の影は唯ひとつでもそれを眺める人々の縁はどんなに悲しくもつれてゐるであらうか。今宵時と處とをはるかに距て、この月を振仰ぐ人々の運命は次回から次々と讀者の眼の前に展開されることであらう。

七

歌子や八重子のお父様の旅路は豫定よりもずつと長くなつて、丁度その年の秋も暮れる頃、漸う露西亞の方の視察も終つて、莫斯科から直路日本へ向けて歸朝されることになつ

た。

雪のシベリアの十日は汽車の旅とは云ひながら、旅疲れのした體には凌ぎ難いほど辛かつた。朝起きるから晩寝るまで、唯一望望々とした雪ばかりで、一驛々々に漸次となつた。しい日本の方へ近づいてゆくのがせめてもの楽しみだつた。

ハルピンで南滿洲の方へ出る列車に乗りかへて、そこから朝鮮の京城へ出て、そこで残つたもう一つの用務を終へて愈々日本へ歸られる事になつた。列車を換へるともう日本人の顔がぼつ／＼見えて来て、着く驛々では必ず五人より少くない同胞の姿をみる事が出来た。荒寥とした滿洲の雪景は眼を傷ましめても、久しぶりで聞く母國の言葉は異郷の旅に疲れたものには何とも云へない嬉しさを湧かせるのであつた。殊に鐵道の沿線をば時々日本の軍隊が警戒して歩いてゐる姿も勇ましく、ふと喇叭の音などを聞くと耐らなく氣が勇んで來るのであつた。

丁度列車が奉天の停車場から三驛ばかり手前へ來か、つた時である。列車内では突如恐ろしい出來事が突發した。

もうその頃は冬の日も雪に暮れた満洲の曠野の果てに沈んで、四邊は蒼茫とした夜色に染められてゐた。人煙のうすいそのあたりは夜となると妙に未開地のやうな凄まじい光景に變つて来て、満目雪に掩はれた所の起伏が唯ちつと眺めてゐても一種の鬼氣を人の胸にしみいらせる。

間宮の主人はその晩奉天へ泊る豫定になつてゐたので、隨行の倉田といふ社員に命じて、そろく荷物の始末などをさせてゐたが、列車がとある驛を通過すると間もなく、車室の入口の扉が突然まるで蹴放されるやうにさつと開いた。吃驚して振顧ると、そこからは支那服をつけた異様の男が三人ばかりどや／＼と飛び込んで来て、まじく四邊の様子を窺つてゐたが、他に乗客がないのを見澄ますと、一人は入口の扉のところへ張番に立ち、他の二人はいきなりつか／＼間宮の主人の方へ寄つて来て、拙い英語で、

「金を出せ。」と、云ひながら、油でよごれた片手を突出した。

餘りだしぬけなので間宮の主人は呆氣にとられてその男等の顔を見てゐたが、倉田の方は一大事と見てとつていきなり常報知器の方へかけていつて乗車してゐる車掌や鐵道守

備兵に急を告げようとした。

と、悪漢のひとりはずぐさまポケットへ手を突込んだかと思ふと、ぴかりと光る何物かを引出して、固く拳をにぎりしめながら倉田の後を追懸けていつたが、やがてそこでは肩を裂くやうな一發の銃聲が聞えた。それと同時に倉田は丁度車室の真中のところへ虚空を擱んだま、ばつたりと倒れた。

間宮の主人はぎよつとして起ち上りざま、自分も護身用を持つてゐたピストルを鞆のなかから取出さうとすると、その時又一聲の銃聲が耳を劈くやうに聞えて、胸のあたりにちくりと痛みを感じたかと思ふと、それなり眼がぐらく／＼ツとして、彼も敢なく座席のうへへ悶絶してしまつた。……

それから何時間経つたか判らない。

ふと気づいて眼をあけると間宮の主人はいつの間にか眞白な壁にとりかこまれた大きな室の真中にある鐵製のベットのうへに寝せられてゐた。胸のあたりには幾重にも繻布が巻かれてゐると見えて、身動きも出来ないほどそこいらが窮屈で、じつとしてゐても胸の底

の方がじり／＼と痛んで来る。ふと列車中の慘劇を思ひ起こすと、あの時自分も拳銃で胸を射られたのだなと氣付いて、何となく不安な氣がして来たが、あれから後どうしてこんな處へ運ばれて来たのだからそれがさつぱり判らない。

主人が眼を開いたのを見ると、やがて枕元には靜かな靴の音が聞えて、ひとりの年をとつた日本人の軍醫が顔をだして、

「や、お氣がつかまりましたか？」と、さも安心したやうに云ふ。

その顔を見ると間宮の主人もひどく氣安くなつてこゝは兎にも角にも日本人の住んでゐる屋根の下だと思ふと云ひやうのない嬉しさが込上けて来た。

「や、お氣がついて何よりです。私達はもう先刻から大層心配しとつたんですが……」といつて、軍醫はそつと脈をとつて見ながら、

「あ、もう大丈夫です。もう心配することはありません。」と、幾度か合點ながらいふ。

間宮の主人は何よりも先にまづ此處が何處だか知りたかつたので、苦しい息の下から、

きれ／＼に聞くと、軍醫はにこやかに笑つて、

「此處ですか？ 此處は奉天の守備隊の陸軍病院ですから、御安心なすつて。」

といつて、負傷してからの出來事を詳かに語つてくれた。

列車内へ闖入して来たのは滿洲の雪の天地を荒らして歩く恐ろしい馬賊の片割れなのであつた。守備兵や鐵道員の眼を睨まして、徒等は列車の連結機の間へ身を隠したり、勞働者に扮ほつて三等客の間へまぎれ込んだりして、聞くも恐ろしい悪事を働いたのであつた。

隨行員の倉田は頭蓋を射られたので、唯一撃でもう敢なく落命してしまつたのであつた。主人の方は胸を撃たれたのであつたが、幸ひ急所を外れてゐたので、餘病さへ出なければ一月ぐらゐで充分治癒るといふ。そして車中では拳銃の音がするとすぐさま隣りの車室にゐた旅客の急報で列車はそのまゝ、そこへ停車し、守備兵は銃をおつとつて間宮の主人の乗つた一等室の方へ驅けつけたが、その時遅く悪漢の群れはもうそこにはゐなかつた。足跡でみるとどうやら列車から飛びおりて雪の中をある川に沿うて逃げた形跡があるので守備兵は取るものもとれ敢へず足跡を追つてその行方を搜索したが、丁度線路から三丁

ばかり離れた藪陰のところに、列車から跳んだ時に負傷したものと見えて、ひとりの賊が折れた左の足を引摺りながら地につくばつてゐるのを発見した。守備兵は先づそれを捕へて、あとの二人はそこから遠くない人家の陰に隠れてゐたのを格闘の末に頭射殺してしまつたのだといふ。

負傷した間宮の主人と、それから落命した倉田とはその列車ですぐさま奉天へ送られた。そして陸軍病院へ收容されて早速手當てを受けたが、主人はそれから二時間ほど正氣づかなくて、今の今迄枕許に侍する軍醫達を憂慮させてゐたのだといふ。

間宮の主人は倉田のことを聞くと、不意に突發した出来事とはいひながら氣の毒でならなかつた。日本を出てから今日まで、見も知らぬ異國で彼は陰になり、日向になりいつも主人を大事と一生懸命に盡してくれた。それを思ふと惡漢の毒牙にかつて果敢なく滿洲の雪に恨をとめてたのが、云ひ知れず悲しかつた。で、彼は軍醫に頼んで懇にその亡骸を茶毘の煙となし、遺骨は彼が治療して歸朝するの日、共に船路の旅に就くやうにそれを取りはからつて貰つた。

間宮の主人の創痍は軍醫達の手厚い治療の功があらはれて、餘病を發することもなく一日に快方に向つていつた。そしてそれから二十日ばかりたつともう退院してもい、と云ふので、色も香もない軍隊の病院の生活を離れて彼はホテルへ送られた。そして美しく飾られたその氣持のいい、客室で、朝に夕に室咲きの草花などを眺めながら養生した。東京の間宮邸では主人が遭難の報を受け取るともう上を下へかへして大騒ぎをした。なかでも歌子などは毎日々々涙に目を暮らして、間があるると遠い滿洲の空で憂い朝夕を送られる父様のところへお見舞ひの手紙ばかり書きつゞけた。その手紙が又どんなに父様の御心を慰めたらう。

そのホテルにひとりの日本人の愛らしい女ボーイがゐた。年は十七八で、いつも何か悲しみが胸の底に宿つてゐるやうに涙ぐんだやうな顔つきばかりしてゐた。従順で親切で、殊にものに答へる聲音のやさしさが誰れにも可愛がられる素質をもつてゐた。

間宮の主人は朝夕のとりまはしにその女ボーイばかり使つてゐたが、ふと或日のこと主人は彼女が夕陽の沈む窓に倚つてしきりに泣いてゐるのを見た。滿洲の曠野に沈む日の色

はまるで眞紅な血のやうで、そのなごりが土でつくつた低い支那街の臺にはのめくさまを見てゐると、何氣ない身にも異國の空にさすらふ悲しみが迫つてくる。支那人の物賣りの異様な笛の音は暮天にうす寒く流れて、泥まみれになつた雪のうへに遊ぶ子の姿も出ましく、遠い空を三々五々餌を漁りながらとびつれてゆく鴉の姿もみるから悲しげであつた。

間宮の主人は憐れな女ボーイの啜り泣く姿をみると可哀相になつて、ふと後から、

「お前は何をそんなに泣いてゐるのだ？」と聲をかけてみた。

と、女ボーイは吃驚したやうに後を振り返つて、急に恥かしさうに袂で顔を掩つてしまつた。

「お前は日本の何處で生れたのだね？」

主人はしかたなしにかう優しく問ひかけたが、それを聞くと女ボーイはやつと泣き聲をさめて手巾で眼を拭きながら、

「私あの東京でございます。」と、きれぐに答へる。

「東京？ ふむ、それは懐かしいね。そしてもう此地へは長く來てゐるのかね？」

「い、え、つい今年の春参りましたばかりでございます。」

「今年の春？ それまでは矢張りずっと東京にゐたのかね？」

主人はわが子にめぐりあつたやうな調子で問ひつめる。

「い、え、大阪から長崎へまゐりまして、それから大連へ渡りました……」

間宮の主人はふと言葉をきつて、しばらくの間その女ボーイの顔をぢつと見てゐるが、やがてしんみりした聲で、

「お前には両親はあるのか？」

と訊いた。

女ボーイは又新たな涙に言葉をふさがれながら、

「い、え、もう両親とも亡くなつてしまひました。」

間宮の主人は更に眼を睜つてその顔をぢつと見詰めた。